

第四章・関外地区

第二節●関外誕生

(1) 吉田新田の沼地

●関外——この章の関外地区というのは、伊勢佐木町を中心とする周辺十二カ町、それに埋地といわれる万代町ほか七カ町、外埋地として区別される山田町ほか六カ町、合計二六カ町。面積は一・二〇・一ヘクタール、関内地区よりも五・六ヘクタール少ない平坦地である。

国鉄根岸線をはさみ関内地区と隣り合せ、西側は大岡川をはさんで野毛地区と南区に、東側は中村川をへだてて元町・石川地区と南区にそれぞれ接している。この南区のうち永楽町・真金町も記述のなかには入れている。

この地区は、もと吉田新田（沿革編参照）の大部分である。

「関外」という呼び方は、吉田橋関門外であったのでそう呼ばれたもので、関門の中の「関内」と対比されていた。この章では、吉田新田あるいは関外地区と時代によって併用することにした。また埋地の七カ町は、別に埋地地区、南区の永楽、真金両町は永

真地区と記すことにする。

●吉田新田の頃——開港の頃の吉田新田は、主に大岡川沿いに住居が散在していた。西の隅には山王社（お三の宮）、東に常清寺とその墓地で、大部分は田や畑、それに沼地であった。南一つ目が野毛を経て神奈川方面から開港場に入る唯一の道の入口に当る、八丁縄手（現、長者町通り）である。

この新田は明治に入る直前でも「沼のような田のような」ところが多かったという。常清寺の住職の話。

「拙僧がこの寺へ来た時分には、座敷に坐っていても、満潮のときになると、潮の方が六尺も高いというありさま。いまでは満潮でも、地の方が五尺も高くなっています。そのころは墓地などまるで水で墓詣りも出来なかつた始末。吉田氏累代の墓碑が一番大きかったから、満潮のときでも頭だけはよく見えていました」（伊奈老師談『横浜どんたく・下巻』）と語っている。

こうした吉田新田に目が向けられ地区的に利用されはじめたのは、吉田橋の架橋であり、次に横浜製鉄所の建設、そして吉原遊廓の設置であった。

●吉田橋関門——吉田橋は、開港場への陸路入口となり、居留外人の保護のために、橋の北わきに関門が設けられた。

そこには、菜っ葉隊といわれた警備隊がいて橋の通行は厳重であった。

「今の吉田橋——鉄の橋のところには大きな関門がありまして、菜

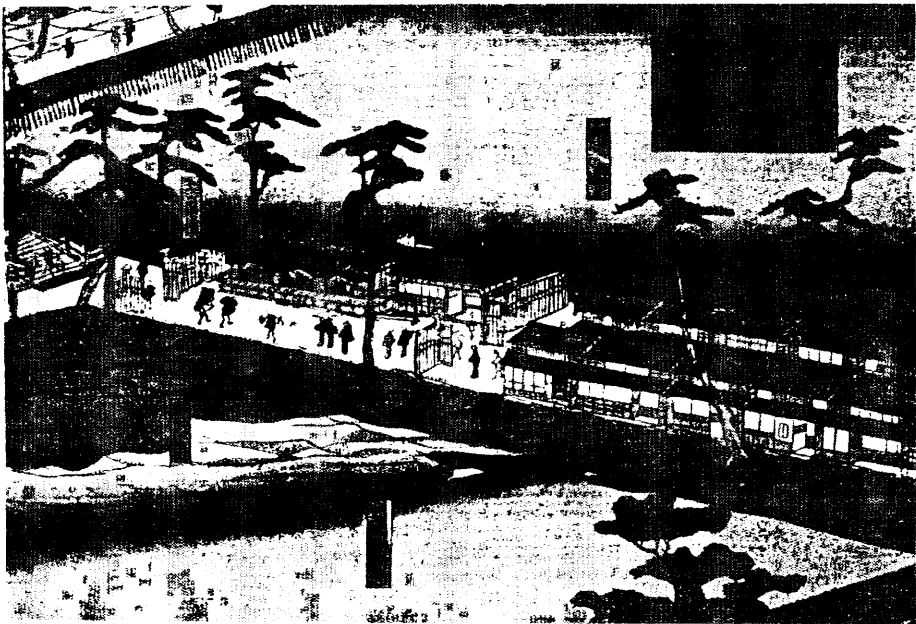


吉田の落雁（横浜地名案内より）

つ葉と申す青い色の長い羽織を着た人がたくさんいて、見張って
 いたので、友達と一緒に洲干町の方へ遊びにいきますにも、
 そこを通るのが何より心配でした。『お頼み申します』といいま
 すと、『どうれ』と長い青い羽織の人が出て参りまして、何処へ
 いく、何人でゆく、何しにいくのかと、細かく調べたうえ、『通
 れ』と申して、それからチャキチャキと拍子木を打って中へ知ら
 せませす。ある晩、洲干町の寄席へ参りますのに、連れの人が一本
 さしておりましたので、たいそうお調べがむずかしくて、しまい
 に『預けていけ』と申されて通されましたが、そのときくらいこ
 わい思いをしたことはございませんでした（吉田やほ女談『横浜
 どんたく・上巻』）

「関門は朝六つから夕六つまでは大門が開けてあつて、夕六つか
 ら後になると、袖門ばかり開けてあつた。それから、夜の四つ時
 になると、ことごとく閉めてしまいますから、四つ過ぎに用事が
 出来て関門を通行したいものは、いちいち願ひ出て開けて貰わね
 ばなりません。もし、帯刀をした者や、大きな荷物を背負つたり
 した者は、すぐには通さない。一とおり行先から用向まで取調べ
 た後で、帯刀は預り所へ置いて通されました」（西戸部 一老人談
 『横浜どんたく・上巻』）

●横浜製鉄所——一方、慶応元年（一八六五）八月、新田の南東
 の隅、堀川と派大岡川が分流する沼地を埋立てた地点（現、吉浜
 町、石川町駅構内を含む）に横浜製鉄所が建設された。この工場

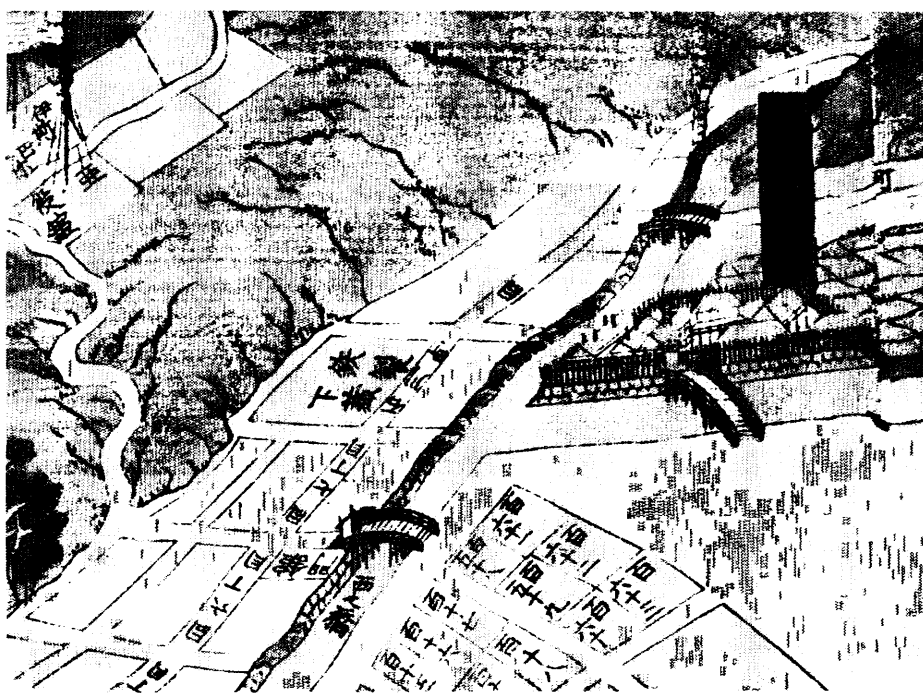


吉田橋関門（〆神奈川横浜二十八景、より）

は、幕府がフランスと提携して技術者を招へいし、軍艦の修理と洋式工業の伝習とを目的として設立されたもので、この地点が選ばれたのは、港に近く水運の便に恵まれていたからであった。初代首長はフランス海軍士官ドロートルであった。

この製鉄所の管理、管轄は、慶応四年閏四月神奈川裁判所、さらに大蔵省、そして明治三年、工部省へと移り、四年四月には横浜製作所、十月には横浜製造所と改称され、五年、海軍省の所管となりさらに六年には大蔵省へ移管され、八年に横浜製鉄所と旧称に復した。のち、民間に貸与。のち内務省所管となり、さらに再び海軍省にと移り、練鉄、鑄造、旋盤と近代工業の先駆的存在となり、十二年平野富二に貸与、十七年建物は石川島造船所に移転されるという、めまぐるしい変遷をたどってきた。その跡地は、日本海員掖済会に貸与された。日本海員掖済会は、海員の養成と保護を目的に明治十三年に創立され、東京に本部が置かれ、横浜のほか大阪、神戸、門司、長崎、函館に出張所が置かれた。横浜では海員養成所、海員宿泊所、病院が設けられ、のちの明治二十二年には神奈川支部が創立、大正三年には専務幹事を置いて海員募集に努力するが、横浜の船員にとっては、なくてはならぬ存在となる。

●遊廓地——慶応三年（一八六七）、吉田新田一つ目の約一万坪のうち八千坪が埋立てられた。これは前年の豚屋火事による焼失した港崎の遊廓地を公園とすることになり、代替として吉田新田内



横浜製鉄所（改正横浜細見図（部分）、より）

の沼地が新しく指定されたことによる。

その遊廓地は、江戸と同じく吉原町と称され、廓の大門の外は姿見町と称した。ここには明治二年現在、妓楼一八軒、遊女四二四人、局見世八四軒、遊女六三人『横浜開港五十年史・下巻』が数えられたという。

遊廓地内に吉原町会所が設けられ、梅毒の診療室が置かれ、英人医師ニュートンらにより梅毒患者の治療が行われた。これはわが国の最初のものとなった。慶応四年六月になって病院が建てられ、ニュートンのほか松山不苦庵も加わり検診が実施された『横浜市史稿・政治編』。創立当初から宮島義信(のち病院長)が医員兼通弁・薬剤師として勤務した。

●かねの橋——明治に入ると、関外の開発が一举に始まった。その手始めのように二年(一八六九)十一月吉田橋がイギリス人、R・ヘンリー・ブランドンの設計で改修され、鉄製の橋にかわった。これは、わが国最初の鉄橋であった。普通「かねの橋」と呼ばれた。新装なった橋では馬車一銭、人力車五銭の、通行料金が七年まで徴収された。外国側の要求によって開かれた馬車道と吉田橋によって関内と吉田新田とは、名実ともに一直線に結ばれた。

●地域の発展——かねの橋の開通でこのあたり一帯は人出が多くなあって、遊廓に遊ぶ人を上回るにぎわいとなった。この「かねの橋」の模様は当時の横浜絵『横浜吉田橋ヨリ馬車道之真景』『横浜吉田橋通繁昌之図并本町通弁天通外国館遠景』などに克明に描

かれた。盛り場のなかに、土弓と称する遊戯場が、早くも明治元年十月に弓師半次郎という者によって作られたのもこの頃で、この興行は大当りとなって、東京にまで広まったという。

二年四月には旧横浜村にあった弁財天社が姿見町裏(現、羽衣町)に遷座してきたが、この頃には街並みが整い、その年の八月には、姿見町三丁目に谷蔵という者が西洋料理の店を開いた。横浜での西洋料理営業の始めは未詳だが、明治初期、早くもそれが商売として成り立つのも、開港場横浜ならでのことであった。

谷蔵の開店後、それに影響されたかのように、四年には関内の駒形代地に、六年には不老町に開化亭など、つぎつぎと西洋料理の店ができてゆくのであった。

この盛り場のとなりの羽衣町あたりは、のちに関外芸者と呼ばれる芸妓たちが居住する地となった。しかし、便乗する者もあって、表向きは三味線の師匠、その実、男女多数をおき、芸妓や舞女間に似た行為をするものがあちこちに現われたので、県令は二年一月にはこれを禁じるといふ始末であった『横浜市史稿・風俗編』

しかし、吉原遊廓は四年十一月、火災で焼失。このため遊廓施設は、埋立が終った新開地高島町に移転させられた。

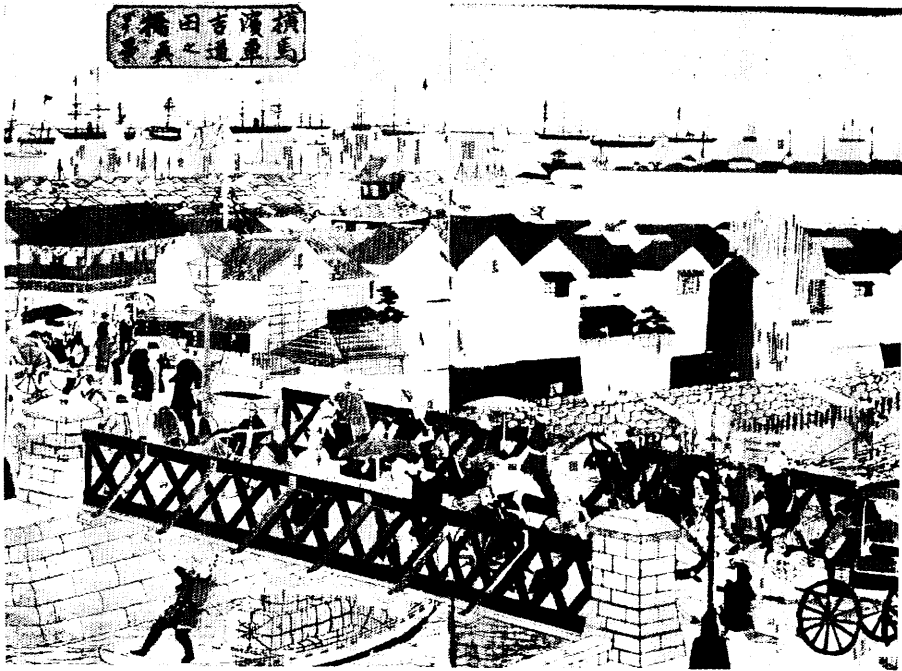
この間、海岸線の野毛の鉄道用地周辺や内陸の吉田新田は市街化が進んだ。時の県令は明治三年「吉田町や野毛町は、追々人家も建ち込み、繁栄してくるが、出火の予防が大切、追々建物の屋根を瓦に取り替るべきで、現在の柿板葺は三年のうちに、瓦に取

替えること」『神奈川県史料・第二巻』意訳」とし、さらに四年、「関内・関外の湯屋は、往来からまる見えで、その上二階の縁先には素裸で出てくる不作法者もいる。見苦しいので、四月から九月までの間に、造作の模様替をせよ」(同上資料意訳)といったような布達を出しているが、このような例からも市街化が想像される。

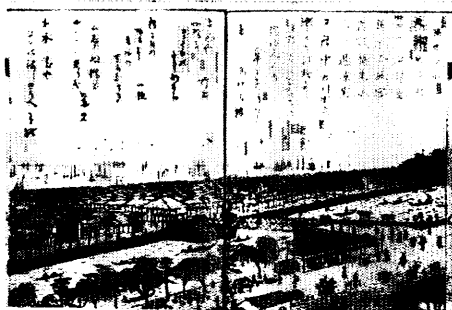
吉田町裏にかけては、ぞくぞくと新しい町が誕生した。吉田新田内では、吉田を冠して吉田福富町、吉田末吉町、吉田若葉町などという町ができた。大岡川をへだてた旧太田村地内でも同じように太田初音町、太田黄金町などと呼ばれていた。これらは初期的な町名であったが、街並が整ったことを示すものであった。そして、明治三年(一八七〇)六月、長者町・福富町が命名された。

●盛り場―盛り場は開港場の商人や労働者が集まり、ますます繁盛した。この三年八月、羽衣町に芝居小屋下田座佐野松が誕生した。小屋は、畿島神社わきの佐野松と、関内にあった下田座とが合併されてきたもので(明治十五年三月、羽衣座と改称)、盛り場の中心的存在となり、にぎわいをいっそう盛り上げることとなった。

そして、これらの人を客として、芸妓やその便乗者も忙しく活動することになった。そして私娼が暗躍することもまた自然の成行きであった。さらに、かねの橋は人々の行き交うところ、そこ



横浜吉田橋ヨリ馬車道之真景



鉄橋夕照(横浜地名案内)より

には人々を目当てに「麦湯」の店が多く出現した。この店は今でいう風俗営業で、単に麦湯を飲ませるだけでなく、従業員が娯を売ったものであった。この麦湯が皮肉にも盛り場のにぎわいをいっそう盛り上げていった。

「そして、この麦湯の多い橋の川岸、柳町の川岸には桜が植え込まれ川の流れてそって風情を浮き立たせた」(『横浜市史稿・風俗編』)

こうした引き立て役は、揚弓場、船員を相手とする銘酒屋もそうであった。のちに囲碁将棋集会所、小料理屋の従業員を表向き職業として、夜は娼婦に交身するという時代になってゆくことになる。

明治五年(一八七二)十二月までには、関内の全部に瓦斯灯が点火された。明るくなった関内弁天通りから馬車道にかけて、街には夜店も並んだ。書画骨董などは殊のほか居留外人の興味を引きつけ、賑いは数倍となった。この人々の流れは、吉田橋から吉田新田の通り(現、伊勢佐木町通)へと続き、にぎわいに拍車がかげられた。

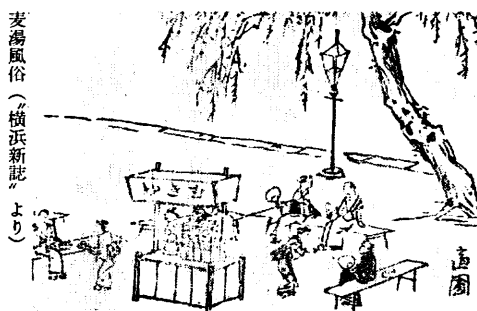
●周辺では——しかし、この関外地区のにぎわいは、吉田橋のまわりに限られたもので、より広い賑いとなるのは大正期に入ってからとなる。ましてや明治六年頃では、埋立地吉田新田は、家屋が建てそろわず、草原同然で、ヨシズ張りの茶店や長屋が建てられてはいるが、これは地主が土地そのものの人気を集めるための方

策で、地代なしの貸地であった。この頃の地主は、収入の道なく、埋立の際の借金の利子すらも上ってこない状況であった。特に埋立地区の松影町ほか六カ町は、地主や横浜商人が外国人からの多額な借金によって行なった埋立で、これらの身代もほとんど無くなってしまおうという窮地に追い込まれる状態であった。これほど土地が利用がされない状況のなかで、地主たちは、地租の免除を願いでなければならなかった。(『横浜市史第三巻下』)

●埋立地区整備——旧吉原町の地域を中心として、伊勢佐木町一帯の盛り場の範囲が広がってゆくなかで、吉田新田のうち派大岡川と中村川、堀川が合流する地点一帯は、依然として沼地であった。前に述べたように、横浜製鉄所が日本工業の先駆的な噴煙をあげ稼働していたものの、土地の整備(埋立)は完全なものではなかった。

明治三年、埋立は着手されていたが、実に七年の年月を要し、明治九年になって完成するのだが、この土地は現在でいう「埋立地区七カ町」で、面積約七万坪(約二三ヘクタール)、大事業であったばかりでなく、その資金と利権をめぐって国際的な問題にまで発展したのであった。

この補充的な吉田新田の埋立に当っては、明治三年四月、神奈川県知事井関盛良は、自費で行う者に限って工事施行を許可するとした。折から土地が足りないこととて、これに対する応募者は殺到。その結果、吉田新田開拓者吉田勘兵衛の子孫の勘兵衛はか



麦湯風俗(『横浜新誌』より)

二人が工事を許可された。のち勘兵衛に代つて吉田寅松、それに吉田常次郎、越前屋惣兵衛、橋本屋弁蔵、福島屋長兵衛がアメリカ一番館のウォルシュ・ホール商会から資金を借用して、明治三年十二月に埋立の工事を開始した。根岸堀潮川を掘削した土を利用、埋立を行うのであるが、予想外の難工事であった。

六年四月には、工事はほぼ完工したものの、工事費の思わぬ増大に長兵衛らは、この埋立地を県で買上げてくれるよう嘆願し、県も調査の上、それを承諾して買上げ、官有地となった。たまたまその月に相生町に大火があり、類焼した者に限りこの埋地の、希望する面積の土地を貸付けたので、多数の人が願ひ出て数カ月うちに市街地化していった。

この間、埋立地付近の土着農民が田や畑を失い、移転することになったが、農民と地主との交渉の過程で無頼の徒が入り込み、私利私欲を計って画策、そのため農民と対立、農民は土地の解放を叫んで決起、県庁に駆け込み強訴を行うという事件もあつた。

●町名新設——埋立終了と前後して、この埋立地とそのまわりには町名がつけられた。明治六年（一八七三）二月、旧吉原町には松ケ枝、若竹、梅ケ枝の各町、三月には蓬萊町、四月には万代、不老、翁、寿、松影の各町、十一月にはさらに埋地の外の既成の土地に、若葉、末吉、賑、久方、雲井、駿河、吉岡、長島の各町、一カ月遅れて和泉町というように一挙に新開地にふさわしい佳名がつけられた。

そして、町と町をつなぐ橋には、亀ノ橋、日ノ出橋、豊国橋などの橋名がつけられた。これらの命名は「これからの市民として活躍するには、因襲にこだわってはいけないという明治政府下の、県庁の指導者の考えによつたものであろう」（石井光太郎「伊勢佐木のむかし」『いせぶら百年』）という推測もある。

●常清寺移転——しかし、こうしたなかでも、吉田橋のすぐ近くあたりは、常清寺とその墓地があり開発がなされていなかった。翌七年十一月、寺と墓地が一時久保山に移転した。近隣の開発に伴う当然の移転であつた。墓地の移転には七〇日を要し、掘り起した跡地を埋戻すのに一坪三円五〇銭を要したという。

すっかりきれいになつた墓地の跡地には、山中座という芝居小屋が建てられた。しかし、人々は縁起が悪いとして「死人座」と呼んだという。その故か、不入で間もなく廃座となつたという。

こうした土地を含めて、通りを中心とする街並みの整つたところは、明治七年五月伊勢佐木町と命名され、一、二丁目が置かれた。伊勢佐木町の誕生であつた。町名の由来については、開発者の名をとつたというほかにいくつかの説がある。

伊勢佐木町には、九年に蔦座が建てられ、芝居小屋のはしりとなつた。埋立した土地は、たくさんの人々の集まることによつて土が固まるので、そのために人集めが行われたのだが、十年には伊勢佐木町に観音堂が建立された。ここでは句会が開かれたこともあつた。そして、十一年の六月には柳橋から吉田橋、さらに花

園橋間の派大岡川には盃蘭盆会に際して燈籠流しが行われ、伝馬船を浮べて、囃子、花火を揚げて大にぎわいになったこともあった。

沼地の埋立完成によって一段とにぎわいが増したなかで、盛り場の裏手、松ヶ枝町、若竹町、梅ヶ枝町のあたりも、これにつれてますますにぎわいを見せていった。

さらにこれらの町の突き当たりで、もとの八丁細手の長者町（明治三、四年命名は、車橋から長者橋までを結ぶ直線で街並みがととのい、関外地区での重要交通路だけでなく、若葉、末吉、賑など各町の発展の基点ともなっていた）。

その長者町の野毛側の入口はいまの九丁目にあたるが、そこには吉田勘兵衛の子孫、吉田家が代々居宅を構えていたが、明治九年頃になると、その一帯には駄菓子作りの店が五、六軒できた。この菓子製造の店は明治末期になると長者町八、九丁目に多くかたまることとなった。それは昭和初期まで続くことになる。

こうして、吉田橋、伊勢佐木町、（もと八丁細手の）長者町、それに埋地地区が地点的に市街化されていったが、十年代に入ってもまだこれら以外の吉田新田の土地は、ほとんどが畑や沼地であった。この頃、市内に虎列刺病の流行があったが、十二年吉田新田のはずれの、一町二反歩（一・一九ヘクタール）の土地が、コレラ患者の收容所の地に指定された。

●興行地——明治十三年（一八八〇）七月見世物興業取締規則に

よって、見世物興行場が伊勢佐木町周辺に限り許可。伊勢佐木町一、二丁目、福富町一丁目、松ヶ枝・若竹・梅ヶ枝・姿見の各町、それに羽衣・蓬萊・浪花の九カ町に限って興行地として指定された。

このため今までの萬座や羽衣座に加えて、賑座・勇座・栗田座・伊勢村座・山中座などの芝居小屋や寄席が建てられ、常打ちの興行が行われ、伊勢佐木町一帯は花盛りとなった。

明治十三年六月、羽衣町下田座での、真土村事件をテーマにした芝居は大当りに当たった。同十二月には、自由民権運動団体の顕猶社による政談演説会が羽衣町の相模楼で開かれるなど、時の社会的情勢を演題とした。

見世物興行地の指定によって、芝居小屋のほか、さまざまな興行が行われたが、それとともに各種の飲食店が、同時並行して発生した。そして十五年には、勸工場が登場。伊勢佐木町通は娯楽街としてだけではなく、本格的な物品販売の商業的な市街地になり始めていった。

●勸工場——勸工場は、百貨店の前身ともいえるもので、十五年七月には、広栄商社が吉田橋近くの、もとの定席丸竹の階下に、十二月には姿見町二丁目（現、末広町二丁目）の橋通りにできたが、これに促されたように、伊勢佐木町通りの萬座跡や松ヶ枝町に五、六カ所の小規模な勸工場ができた。『横浜沿革誌』には「明治十五年二月、伊勢佐木町通に芝居小屋賑座・勇座・其他大

弓場・観世物場・勸工場・飲食店等建設、数月を出ずして、繁華の市街となれり」とあって、急速に明治初期に、繁華街を形成していったことが記されている。このことは後の三十二年、関外大火の後、勸工場が多く出来るきっかけとなった。

十七年（一八八四）には、興行地域の指定が賑町・久方町・足曳町・雲井町の各二丁目の地域に改正されたが、もとの指定土地に残る芝居小屋もあって、結果的には範囲が広がったことになった。

豊富、姿見、松ヶ枝、若竹、梅ヶ枝の各町は裏伊勢佐木町として栄えた。伊勢佐木町をかこむ各町はことごとく繁盛の地となった。

●遊廓移転―隣接地の土地利用はさらに大規模に行われることになった。遊廓の移転であった。

吉原町の遊廓は、既に高島町に移転していたが、高島町からまた移転する適地として千歳町三丁目の西側、山田町、富士見町の各三、四丁目、山吹町の三丁目の一帯が指定された。指定された土地は町名改正が行われ、明治十五年、永楽町、真金町と町名がつけられた。〔横濱開港五十年史・下巻〕より）

真金町・永楽町の一部は遊廓地に指定され、移転の前に、とりあえず長者町に仮宅（仮店）を設けて営業した。それは一時的ではあったが、影響はすぐに現われて、長者町一、二丁目の水天宮とそのまわりがにぎわい始めた。長者町の稲荷とともに爆発的な

にぎわいとなり、ここにも盛り場が発生した。

長者町の仮宅から真金・永楽町への移転は二十一年に、完了した。

移転した長者町一、二丁目の仮宅跡地にはすぐ人家が建ちはじめ、この地区発展のきっかけとなった。もとより遊廓移転先の真金永楽地区もすぐに街並みがつけた。それは伊勢佐木町に近く、人の流れが容易にこの町に流れこめたからでもあった。さらに長者町を境に雲井町、吉岡町、足曳町など永楽地区の隣接地は、風俗的な営業も多く発生、盛り場の場末として特色を色濃く出してゆくのであった。

長者町の水天宮―震災で焼失



現在の水天宮（南区の西仲町）

しかし、そこを少し隔てた大岡川に沿う末吉町あたりは、明治十八年の頃でもまだ地盤は軟弱で、雨でも降ろうものなら泥田を渡るような状況であった。この土地で太田の牛屋音松が、自費で拡張埋立を行い、県令から榮譽をうける『横浜市史稿・風俗編』より）というようなことでも推定されるように、本格的に末吉町方面が繁盛してゆくには、明治も後期になる。

●埋地の家内工業——一方、埋地地域は市街化傾向にあったが、この地域では関内の隣接地として、貿易関連の家内工業が発生しつつあり、さらに周開をめぐらす運河によって水上の運送に有利なことから、材木のほか各種の間屋が発生、繁栄を見せていった。

こうした地点的な地域の変化は、次第に埋地地域の全般にわたった。埋地地区は間屋とともに、輸出に伴う家内式手工業も多く見られるようになって、輸物関係の下職の集まる地域となっていくた。港の後背地としての性格づけがされてゆくのもこの頃であった。

さらに永貞の遊廓の繁盛は、この埋地にも影響を見せ、市街地のなかに、飲食業などを多くもつ商業地化の傾向も示しはじめた。例えば、十八年十一月、ある飲食店主は許可を得て、翁町あたりで外人相手の西洋酒のコップ売営業を始めた。外人銘酒屋といわれるもので、今のバーに似たものという。これがきっかけとなって「弱・不老・寿」の各町界限には、その開業者が数軒に及ん

だ。『横浜市史稿・風俗編』

十九年（一八八六）には、翁町五丁目の官有地に消毒所と伝染病隔離所が設けられ、さらに同年、不老町には山手のメソジスト派の横浜福音会など、従来と変った施設も見られるようになった。

●同業集まる——長者町一・二・三丁目通り、末吉町一、二丁目あたりは家具の製造、販売店、それに蓬萊町河岸には洋服古着屋などがあって、これらはそれぞれ町の性格づけともなった。

特に衣類を業とするものは、色とりどりの色彩を見せて客の気を引きつけたという。これらは、いずれも震災で壊れてしまったが、蓬萊町河岸だけは再生、新規仕入洋服の販売の専門的地域として残ることになった。

(2) 興行地伊勢佐木町

●時代の波——明治も二十年代に入ると、伊勢佐木町周辺は繁栄のままその新しい時代を迎えていた。

この二十年代の芝居小屋のほとんどはこの関外に集まっていた。港座、賑座、勇座、羽衣座、そして千歳座、両国座などが目白押しであった。それらの芝居小屋では、歌舞伎が上演され、関内真砂町の港座では明治二十四年一月五代目菊五郎によってスペンサーの気球乗りが劇化上演された。それがきっかけのように、萬座では同二月川上音二郎の壮士劇（オッペケペー節）などが上

演された。

両国座では二十七年源氏芝居興行、羽衣座では二十八年十一月開化の横浜を舞台にした「人間万事金世中」が上演された。三十年四月には同座で新派劇団の大同団の結成があつて、葛座で翌年新派大公演など、興行は花盛りであり、時代の波に乗っていた。

福富町裏新富の横丁、羽衣町、賑町裏あたりには、飲食店のほかさまざまな商売が盛んであつた。しかし華やいだ町のかげには、私娼が居住、夕なずむ頓になると巷に出没する風景が多かつた。『横浜市史稿・風俗編』明治中期になると、それがますます活発化し、吉岡町、雲井町、足曳町あたりの地域に広がつたという。

これにたいする官憲の規制は、さほどに効果が挙げなかつたようで、各店もそれに協力したが、やはり私娼は姿を消すことなく、これによる弊害が相変らず生じがちであつた。(前掲書)

そうした反面、新思潮による民衆運動もまた横浜を席卷しはじめてきて、そのアッピールには伊勢佐木町通りが格好の場となつていた。明治二十年(一八八七)十二月折から保安条例によつて、東京を追われた論客中島信行ら五百人ほどが横浜に集まり、葛座で一大演説会を開き、氣勢が挙げられ、さらに二十年代の後半、廃娼運動や遊廓地の移転請願などの運動がはじめられたが、二十六年婦人矯風会横浜支部が設立、二十七年にはアメリカ人ドレパー夫妻によつて梅ヶ枝町に盲人福音会が設けられ、横浜における福祉施策の芽も発生した。さらにキリスト教救世軍横浜小

隊が二十九年に福富町(同年中に若竹町、三十四年には松ヶ枝町に移転)に設立、機関誌を発行、布教活動に入つたが、ここでも廃娼運動が行われた。しかし、この布教にあたつて、若竹町あたりは娼婦らの居住宅地でもあつたことから「毎夜のように、酔漢や反対者の乱暴があり、布教は困難を極めた」(『横浜経済文化事典』)のであつた。

●芝居―まことに華やかで、新しい時代の波に乗つた芝居は、相変らず盛況であつた、川上音二郎一派の壮士劇がすたると、横浜の芝居は一挙に歌舞伎劇が活発に上演され、ますます興行地伊勢佐木町通りはにぎわいを見せた。

また、芝居小屋と俳優について、評論の一つをあげると、「横浜の荒二郎か、荒二郎の横浜劇界か、兎に角その昔から横浜という土地には常設の大芝居というものはなかつた。浅草出演で華々しいうちに死んだ又五郎や、芝居の神様とまで称号を奉られてゐる今の吉右衛門や、舞踊の名手三津五郎達が葛座を開けてゐても、これは子供芝居であつたし、五代目や先代左團次、さては名優團十郎が、羽衣座や港座を開演してゐた処で、これは悉く短期であり、盆とか正月とか云つた特殊な興行に限られたものであつただけに、たとえ中興のことであるにせよ、夫れから夫れへと新旧を問はず幾多の狂言を並べて、一般に土地の人々に受入れられてゐたのは、朝日座の前身であつた賑座であつたらう。この座からも相応に中央劇場へも送り出してゐる。曰く四郎五郎、曰く伊

達藏と数え出したら枚挙に遑のない程である。ところが其の頃から座頭として貫録を示してゐたのが三河屋（市川荒二郎の屋号）であつた」（喜楽座の市川荒二郎「大横浜」）

というのもある。これは当時の横浜演劇界の一端を物語るものであつた。

興行も年を追うごとに盛んであつたが、三十年三月、港座では、幻燈を改良した程度ではあつたが、本市最初の活動写真がはやくも公開された、活動写真時代のさきがけであつた。歓楽街伊勢佐木の新時代の光芒（こうぼう）であつた。

●葛座——明治二十年代の伊勢佐木町の芝居小屋のうち葛座について次のような話がある。

「ちようどいまの森永の伊勢佐木町支店のところで間もなく勇座（現、二丁目）賑座、羽衣座などの芝居小屋ができた。九代目團十郎、五代目菊五郎、いまは不婦の人六代目菊五郎、中村吉右衛門が子供芝居として来演、東京からわざわざ横濱へ芝居見物にくる人があつて、はなやかなふんいきをかましたものです。葛座は当時としては珍しく、土台はコンクリート、レンガ造りの豪華な劇場で、二百三十八坪（七八五・四平方メートル）あつたといわれます。

入口に引手茶屋（休息所）があり、当時はのんきな時代で芝居見物というのは一日がかりで劇場内で酒食をいっさいまかなつたものです。引手茶屋の主というのは絶大な権力を持っていたもの

で、今の言葉でいえばプロデューサーと申しましようか、一興行打つときに俳優の衣装から食事までいっさい調達したものです。

葛座の自慢は小屋の看板でケヤキの厚い板に勝海舟が執筆したという大看板を掲げていました。葛座はレンガづくりだったのでどんな大火にも焼けないといわれたのですが明治三十二年の横浜の大火について焼けてしまつたわけです。当時私はY校の学生でいまの弁天橋のもとにY校があり学校の帰途しばしば立見をしたものです、芝居の引手茶屋のなかにはにぎやかで常連のヒイキ筋にお酒やお弁当を出す習慣があり、引手茶屋の人々の忙しく立ち回るさまはいまでも目にチラつくようです」（磯野庸幸「芝居小屋でにぎわう」『横浜今昔』）

●関外大火——しかしまつたく予期しない災害が突然おこつた。

三十二年（一八九九）八月十二日、雲井町から火災発生、炎は関外地区の中央部をなめ、三、一七三戸を焼き尽し、五〇戸を半焼させた。例外なく芝居小屋や寄席もことごとく焼失した。この大火は、開港以来関外地区最大の火災であつた。

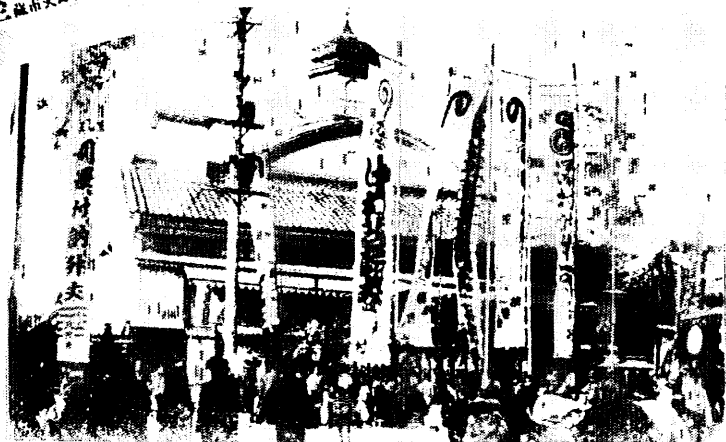
この火災によつて、市は市区改正事業を行うこととした。事業は道路拡幅を主眼としたものであつた。市会によつて決議されたのは、羽衣町弁天社から福富町方面へ道路を四間幅にして貫通すること、鶴の橋から宮川橋までは道路幅五間、ただし蓬萊町二・三丁目から宮川橋までを直線で改修など、六路線についてであり、さらに賑町にあつたいろいろな見世物小屋を三十二年八月二



伊勢佐木町の賑い（“横浜名所図会”より）



喜楽座の番付



喜楽座

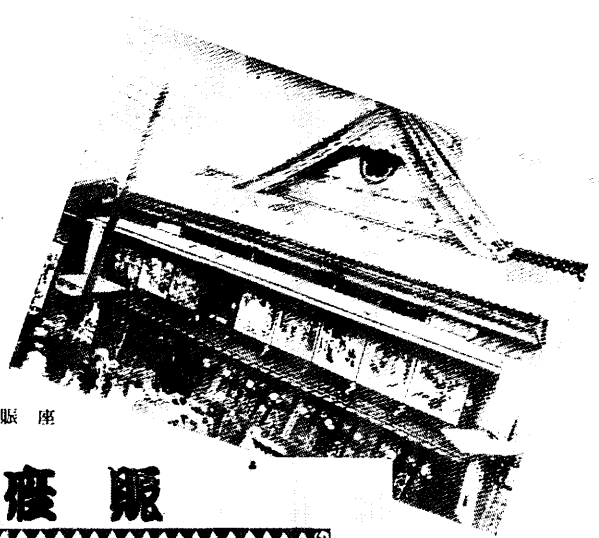
忘年素劇大會

大正三年十二月十九日二十日

羽衣座の番付



羽衣座



販座

販一獲販

販座の番付

十六日には吉岡町三丁目から六丁目、駿河町三丁目、長島町三丁目から六丁目、末吉町三丁目から六丁目と決定。さらに三十四年十二月六日、賑町一・二丁目、長島町一・二丁目が追加された。

〔横浜市会史第一巻〕より〕

特に、財力がある伊勢佐木町では、すぐに復興がはじめられた。芝居小屋では焼失した蔦座は再建されなかったが、すぐに賑座が再興、これも焼失した両国座は座名を改め喜楽座として十二月に開場、翌三十三年一月には羽衣座が再建成り、次いで十一月には松ヶ枝町に相生座、三十四年一月には長島町の長島座、雲井町に雲井座と新しい小屋も建設され、かえって大火後の方が小屋数を増した。

「然れども一時の変化は免るべからず。三十二年大火ありて目賃の場所を焼払い、楊弓、投扇等の業をなすもの多くは曙町辺に移転し、為に其の繁華は区域を拡張し、伊勢佐木町は衰頽の觀ありしも、是れ素より一時の事にして今は大火以前よりも幾層の繁華を加えたり、左りとて大資本を投じて、永久的大商業を営むもの稀にして、季節と共に業を變じ、又は一時の当て込みにて開店するもの多しとす」〔横浜開港五十年史・下巻〕

明治三十五年（一九〇二）頃、市内の興行界は『横浜名所図会』（風俗輿報臨時増刊第二百五十七号、明治三十五年十月五日刊）によれば、劇場寄席の主なるものをあげ「此他の各興行物に至りては、殆ど枚挙に遑あらず」としてその繁盛ぶりを述べているが、その

主なるものは、関外地区に集中している。それは次のようなものであった。

劇場は、喜楽座（伊勢佐木町）相生座（同上）羽衣座（羽衣町）賑座（賑町）雲井座（雲井町）であり、寄席は落語の新富亭（伊勢佐木町）講談の日吉亭（伊勢佐木町）若竹（若竹町）松福亭（寿町二丁目）浪花節の寿亭（賑町）富松亭（同上）万竹亭（龜の橋）があげられている。

一方、地区以外では義太夫の富竹亭（馬車道）落語の色川亭（野毛三丁目）清港亭（戸部町）金石亭（神奈川）、講談では高橋亭（戸部町）などがあげられているのみで、いかに関外地区において、当時の大手の興行場が集中していたかが分かる。

●ユニークな店——芝居小屋の復活とともに、勧工場も復興していった。三十三年（一九〇〇）には伊勢佐木町一丁目横浜館、日ノ出館、二丁目には東洋館が建設されて、横浜館、東洋館は四十二年まで、日ノ出館は大正初期までそれぞれ営業をつづけてゆくが、わずかな期間ではあったが、これら勧工場は、伊勢佐木町の商業活動発展の先導的な役割を果たしたといえる。

勧工場について、すこし時代があとのことになるが、町の人々には多くの想い出がある。

「勧工場は、ハマの異色の商社でした。石造り洋風館の二階建て、いろいろな見なれぬ品物が正札つきで並んでいました。私の想い出は、正月の小遣いでワニ皮の小銭入れを買ってもらったこ



勸工場の横浜館（明治41年）

とです。この頃子供はお袋の手作りの財布を紐で首につるすか、小さな袋に根付をつけて腰につるすかしたもんですから、ワニ皮の小銭入れとはすごくしゃれたもんでした」（酒亭・上総屋常連座談会）

「勸工場にはもうなんでも売ってました。子供の頃、子供の好きそうな千代紙とかもね……。そこへ行くために、早くからお風呂に入って夕飯をすまして、浴衣に着替えて連れてゆかれたのを覚えてます。店のなかはまわりだけ歩けるようになって、二階の

中央は今でいう吹き抜けになってました。二階でも下駄で上がれるんで便利でした。間口五、六間でした。階段が両側にあって、伊勢佐木町から見ると、右側が和風、左側が洋風で近代的に感じましたね。だってその頃、呉服屋では座敷で腰かけて買った時分で、番頭さんが畳に座っていて小番頭が蔵から反物をひとつ一つ箱に入れて持ってきた時分ですもの。ですから勸工場は、その頃すごくユニークなもんでした」（同座談会）

明治三、四十年代の伊勢佐木町は、全国的に有名であった。

「横浜という以上、伊勢佐木町は是非とも知らねばならぬ処である。伊勢佐木町の賑いは蓋し日本第一で、流石に東京の浅草でも大阪の千日前でも、京都の京極でも、遥かに此処には及ばないのである」（『横浜繁昌記』明治三十六年）といわれた。

●詩人が歩く——詩人佐藤惣之助も明治末期の伊勢佐木町を歩いて、次のように記している。

「橋を渡ると赤煉瓦の警察。少年は初めてボリスという言葉を知った。その先の左側に東洋館といふ勸工場があった。こゝの三階にゐて私は第一回の大火に逢った。前の蔦座といふ芝居小屋では大阪の俳優が焼死んだ。翌朝は一望の焼野原、その中でたった一棟今の有隣堂のところにあつた倉田屋といふ本屋の土蔵が残った。倉田屋は私達が初めてロビンソン・クルソーや狐の裁判や二人の王子といったお伽噺の本を買ったので、今でもなつかしい。

少し先へ行って弁天様の入口の四ツ目屋、従妹がよくこゝで簪を買った。横町の吉の谷、前の越後屋、へんな名で覚えてゐる『まからぬ屋』、花月のところの富竹、こゝで初めてキネマを見た。先に行つて喜楽座、そして筋向ふの賑座、所謂ハンケチ芝居だ。

今の常設館のところは、古くはドブ寺、そこに死人座といふのがあつたといふが、私の知つた頃は相生座といつた。そして『自転車お玉』といふ猛烈な女賊劇を見た。

それから牛鍋の太田屋、先の方から裏へかけて、吹矢、楊弓、玉転がし、このあたりが源氏節趣味の、古い横浜の味のあつた新道らしい。私達はこの、紙切り、どっこいどっこい、射的、金魚釣り、玉つぶし。さういふ少年の好奇心をそゝるものを満喫した。

そこには銀杏返しのおさんがあつた。水機關がまわり金魚が泳ぎ、青すだれがかゝつて、人々はピンヘットやカメオやヒーロといふ煙草を吹かしてゐた」(佐藤惣之助「横浜今昔記」『改造』昭十・五)

冒頭で述べられた橋を渡ると赤煉瓦の警察とは伊勢佐木警察署のことである。地域の老人は記している。

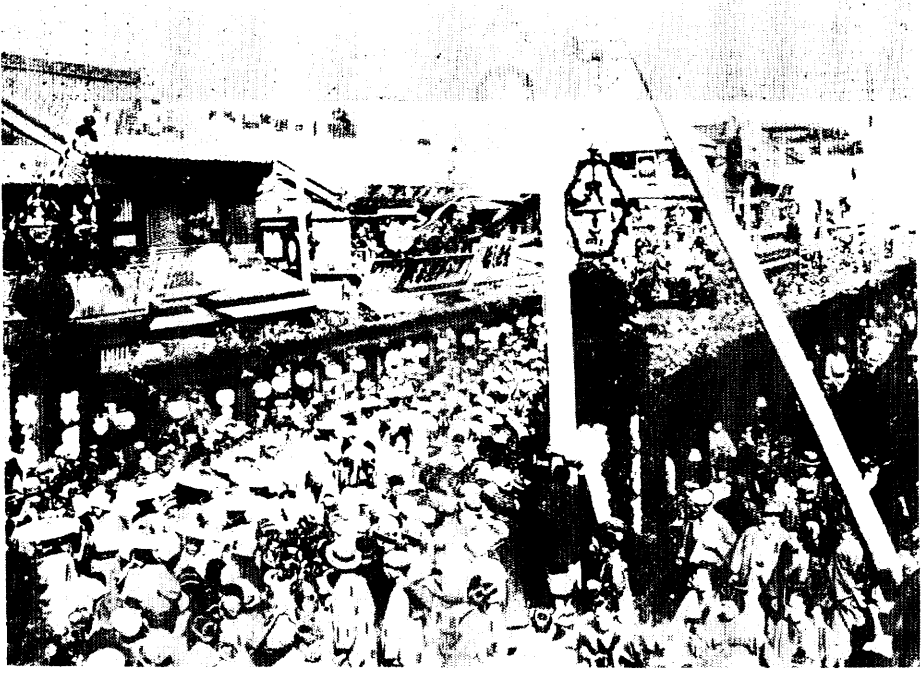
「橋の南側、川に面して、入口上部の正面に金色に輝く菊のご紋章をつけた伊勢佐木警察署があつた。署の裏には消防署があつて、蒸気ポンプがいつでも出動できるように待機の姿勢をとつて

いた。火事だとなると、直ちにかまどに火を入れ、それと掛声もろとも飛び出すのである。野次馬はこの車の後押しをして、多勢で掛声をかけながら火事現場に走つて行く。現場に着くと野次馬は追い払われる。丁度、その時分になると蒸気もあがつて、力強く放水され、火を消したのであつた。これが当時わが国の新鋭の消防車であつた」(扇町 山本正喜氏手記)

一方、明治三十三年には、吉田町に上信銀行、扇町には横浜中央銀行と横浜中央貯蓄銀行ができ、この地区にも金融資本が進出した。

●問屋街——この関外地区一帯川を利用した各種の間屋が発達していった。当時の物資流通の基地ともいえた。関内真砂町の河筋(現、市庁舎位置)に魚市場があつたことによつて、魚市場関係の間屋や仲買が埋地地区だけでも三〇軒を上まわつたという。三十六年には、長者町と扇町とに青物市場が設立。さらには信誠合資会社、帝国共信合資会社と二つの金融機関も設立され、問屋の街としての機能も充実させていつたのであつた。

明治三十二年の大火のちに、遊戯場地区が長島町に移され、そのため長島町方面(現、伊勢佐木町七丁目付近)は急激に建物が増加していった。その街並みのなかに明治三十七年長島町には善光寺別院(一六地藏、別名子育地藏)が創建、地藏尊が「現世利益の守り仏」(『子育地藏菩薩由来』)として祀られたが、これなどは地域的な動きの一つであつた。



開港五十年祭の祝賀仮装行列—アーチの通りは人で埋まった。松ヶ枝町にて(古尾晋氏提供)



松ヶ枝町の賑い

●アピール―こうしたなかにも、私娼は相変らず暗躍していた。三十九年頃には、足曳町や雲井町の一帯は、ミルクホールや煙草店の商売の蔭にかくれて私娼がはびこっていたという。十人減れば十人現われて、三十八年の場合、警察では一、三〇四人を取締る始末であった。『横浜開港五十年史・下巻』

しかし、こうした風俗の取締りにやっきになっていたさなか、明治三十八年（一九〇五）日露戦争は勝利に終わったが、ポーツマス講和条約に不満な市民五千人は、三十九年九月平沼町の空地で横浜市民大会を開き、氣勢をあげた。この夜、羽衣町において政治演説会が開催された。演説会場は殺気に満ち、遂に弁士は官憲によって中止を命ぜられた。群衆の不満は火に油をそそぐように、松ヶ枝町ほか市内十一カ所の巡查派出所を破壊、焼打、騒擾事件となった。警官隊が軍艦高雄から横浜港に上陸、翌日には軍隊までが出動、群衆は鎮圧された。横浜公園に中央監部が設けられ、警戒三日間という始末になった。『横浜市史稿・風俗編』

もはや伊勢佐木町通りは、単なる盛り場の目貫き通りとしてではなく、群衆にとつても行動の通りであり、主張をアピールする場でもあった。

●活動写真館―明治四十二年（一九〇九）は横浜開港五十周年の年で、伊勢佐木町も祝賀に沸きに沸いたが、祝賀が行われたというだけでなく、これまでともすれば、新開地の名残りを留めた興行地から脱皮し、名実ともに市民のレジャーの場所となる

節目の年でもあった。その例として、四十一年五月、米山梅吉によって福富町一丁目に喜音満館が設けられて、活動写真（映画の前身）が上演されたことが挙げられる。館は翌四十二年に開港五十周年記念の年にちなんで開港記念電気館と改称され、本市初の活動写真常設館となった。そして、これにつづいて四十四年十二月、ドイツ人ウエルデルマン（ワダマン）により、長者町六丁目外国映画専門館のオデロン座が創立された。市民の芝居から映画へという、興味の移行の先鞭となった。

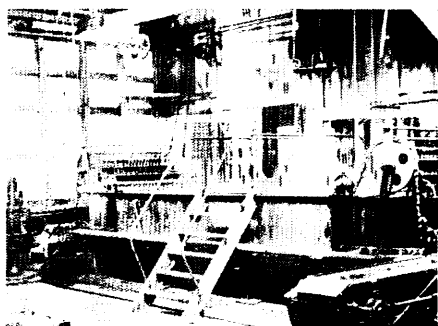
さらに四十四年九月には福富町に実費診療所ができるなど、伊勢佐木町の裏も一層充実された。

●サイダー―蓬萊町では、四十三年、金線サイダーが製造工場を拡張した。この地区において唯一の地場産業であった。

サイダーは、慶応元年（一八六五）秋元巳之助が外人からその製法の伝授を受けて製造したものである。商品名金線サイダー。わが国初の清涼飲料水であった。

「芳香と美味さを以て全国第一の清涼飲料水の工場は、三〇八坪（一、〇一八平方メートル）あまり、土蔵造り、煉瓦造りで、宏荘な西洋建築物にて、屋上の金線サイダー印は高く空中に聳て、会社の雄大なるを示して、横浜の一名物と唱えられた」『横浜社会辞彙』とされている。

二代、巳之助によって二十八年レモナーテ、三十七年シャンピンサイダーが製造され、のち中国、朝鮮などに輸出するほどにな



金線サイダー蓬萊町工場の内部（秋元繁秋氏提供）

っていたもので、従業員一〇〇人、年間一〇〇万ダースを生産したものであって、わが国第一の名声を得た。

サイダーは、昭和の初期までは、まだ高級品で、主な取引先は大手の料理屋や地方の大きな問屋であったというが、実績だけを残して、地場産業として定着することなく、震災によって泡のように消滅するのであった。

●市街化——明治四十五年（一九一二）、横浜電気鉄道（のちの市電）が敷設されてからは完全な市街となり家並みはとほろどほろに洋館、店舗、土蔵のような建物が建てられた。

●移行——興行街伊勢佐木町の商店の模様も次第に変わった。代表的なのは四十二年に書店有隣堂が開店、四十五年には野沢屋が関内から移転し、野沢屋呉服店と改称、開店した。この関外への進出は、市民が好み市民が多く集まる商店街は、もはや関内の弁天通りや馬車道ではなく、伊勢佐木町に移行したことを示すものであった。

その上、伊勢佐木町の入口に当る吉田橋は、日本最初の鉄製の橋であったが、さすがに老朽化し、四十年あまりの使命を果して、四十三年には鉄筋コンクリートに改築された。開通式は四十四年十一月、華やかに行われた。商店街入口はアーチ、日の丸の旗で装飾され、往来は大変な混雑を見せた。この商店街入口の整備は伊勢佐木町のにぎわいを一層盛り上げていったのであった。

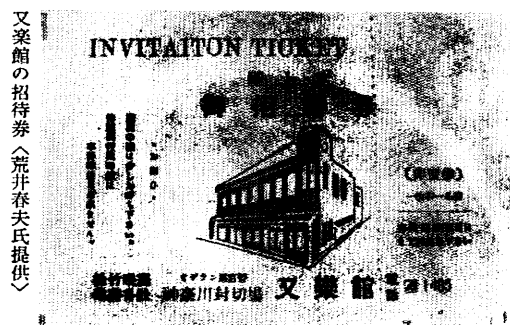
(3) 庶民の町

●娯楽街伊勢佐木町——大正に入った伊勢佐木町は、芝居に映画に、市内最大の娯楽地であった。特に震災前にはその華やかさは、国内でも一、二を争うにぎわいでさえあった。芝居は羽衣座（大正四年まで）賑座改め朝日座、勇座改め由村座、長島座（初年まで）、横浜座などがあった。

当時洋画封切館としてこの世界に君臨したオデロン座、横浜館、邦画は電気館、又楽館、邦画のうち松竹映画は角力常設館であり、芝居といえば喜楽座、歌劇は朝日座と大体相場が決っていた。

毎夜七時からの「只今より入場料半額」の「今半」は、相変らず市民にうけて、深夜、夜通しの興行となった。

●チカチカ写真——「活動大写真」といって、初めてやったのは港座でした。私が子供の時に初めて見たんです。弁士が出てきて前口上を一時間ぐらいやってね。いよいよ始まると、向うから汽車がやってくる。谷川べりを走って近づく。ただそれだけなんです。今から考えるとバカみたいな話ですが、世の中は進歩したもんだというわけです。押すな押すなと皆で見に行きました。それと、ニュース映画のハシリみたいのが来た。多分外人が写したんでしょうが、日本の兵隊が大砲を撃っているんです。画面で弾丸をこめて発射するところがある。兵隊は右にゆき左に動く、それ





武蔵橋から雲井町（現、弥生町1・2丁目）



武蔵橋から足曳町（現、曙町1丁目）を望む



久方町（現、曙町1丁目）から長者町（現、長者町5・6丁目）



同上（同上）



同上（同上）



武蔵橋から雲井町（現、弥生町）



久方町から長者町（5、6丁目）



同上（同上）

明治末期関外の街並み——横浜電気鉄道敷設の前後



同上（現、弥生町2・3丁目）



梅ヶ枝町から羽衣町



長者町(現, 6丁目)から梅ヶ枝町(現, 羽衣町3丁目)右手吉田中学校あたり)



同上



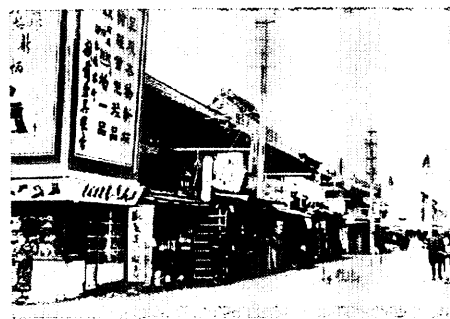
同上(同上)



同上



同上(同上)



羽衣町から空見町(現, 末広町3丁目)



梅ヶ枝町から羽衣町



同上(同上)



同上

だけなんです。撃つたびにスクリーンの後ろで南京火花をあげる。擬音ですね。そのけたたましい音が舞台から観客席いっぱいに広がって、そりゃあもう大変な騒ぎでした。入場はたしか一銭五厘くらいでしたかね。」(第一中部有志座談会)

「昔の活動写真の思ひ出ほど僕にとって懐しい記憶はない。お天気の日だか雨の日だかわからないやうなキズダラケの、チカチカ光る写真でさへも、誰も腹を立てずに熱心に見てゐたものだ。

舞台の上に弁士が出てきていふ口上がいつも、きまり切った文句なものだから、子供ながらもすっかり覚えてしまったほどだ。

『かゝる寒さもおいともなく、賑々しく御来館の栄を賜はりましたる段、館員一同になりかはり、厚く御礼申上げる次第であります。さて最初御覧にいきますは、イタリーはゼノアの風景で』などと、叮嚀な挨拶がすむと、二階の隅で、ジンタッタ、ジンタッタと『空に囀る鳥の声』の楽隊が始まるのであった。

鉄道線路がずんずんと私達の方に走ってきて、その内に汽車はトンネルに入る。画面が真暗になり、向ふの方にトンネルの出口が小さく揺れている。

それが近くなつて、まもなく外に去出ると、私達は本当にホットした呼吸をしたものである」(蒔田朝男「キネマ・萬華鏡」『夜の横浜』昭四・七・五号)

●目玉の松ちゃん——オデオン座や横浜館のような洋画専門館では、舞台下に作られたボックス(四、五人の楽士が入る)で、ク

ラシック音楽を、邦画館では女流筑前琵琶等がよく演奏された。「殆んどの映画館は昼夜の二回興行で、この間にベラ棒に長い休憩時間がある。

休憩となると、私達子供は、『お菓子買って来るから出して』と入口のモギリのお姐ちゃんに言い、外に飛び出して常設館の向いにある駿河屋の豆羊かんや蒸し羊かん、オデオン座の前の『都豆』という菓子を買って戻って来るのだ。腹がうんと空いていて菓子だけでは足りそうもない時は、家までとんで帰り、有り合わせの喰物をとってきて、息せき切つて舞い戻つた。

私達のアイドルは、邦画では何てつたつて『目玉の松ちゃん』だ。五右衛門かづらに鎖帷子の松ちゃんが大ガマの背中に乗つて印を結べば『ドロン、ドロン、ドロドロド』と大太鼓が鳴り渡り、松ちゃんは忽ち雲の上。「おのれー」と悪玉の忍術使いも雲を呼び、松ちゃんに追いつがる。

専売特許の大目玉をヒンむいた松ちゃんと丁々ハッシの大立回りとは相成る……。

舞台の裾に待機していた三味線が『チャ、チャ、チャンチャン』と弾き出せば、拍子木を持った囃子方『タン、タン、タタン、タン、タン』とここを先途と舞台を叩きまくる。手に汗にぎり息をこらして見つめているのは、私達子供ばかりではなかったらしい」(岡田清『大正の頃』)

●ヨコデンなど——「伊勢佐木町にヨコデンといって横浜電気館

ができて、本格的な活動大写真を見せてくれた。定刻、場内が暗く
なると、軍艦行進曲が始る。左手袖からフロックコートを着た世
波田如水などの弁士が現われ、中央にとまる。奏楽が止むと『に
ぎにぎしくご来場を頂きまして、館員一同厚く御礼申しあげま
す』と、型のとおりやった後、映画のあらましをしやべって、袖
に引き退り、同時に映画が写り出す。弁士が『春よ春、春たけな
わにして桃の花咲く平和な里、ケンタッキーの村を訪ねたのであ
ります……』とはじめる。そんな具合だった。

福富町に横浜開港記念電気館が開業した。キネデンである。次
いで吉田橋際の伊勢佐木町入口に横浜館、三丁目にオデオン座が
相前後して開業した。前者は『イントレランス』のような洋画も
あったが、日本物が主で、田中絹代だのエノケン（榎本健一）だ
のがよく出た。後者は通称「デラン」である。ロイド・ハミルト
ンの喜劇や「カピリア」などの文芸物など幅広い出し物で、ハマ
の人気をさらったものである。

又楽館が出来たのはそれからずっと先の頃のことである。敷島
座は活動写真もやったが、むしろ浅草風のいわゆる三文オペラの
常設館であった。杉狂児や田谷力三に市民は惜しめない拍手を送
ったものである。丁度その頃、竹久夢二の絵が評判になり始めた
頃だったから、タヤリキの歌った椿姫だのデアポロの歌などの楽
譜が、夢二の表紙で売られ、若者の人気を集めたのである。
県第一高女出身の女優紅沢葉子さんは、この辺りで初舞台をふん

だのではなかったか」（前掲書）

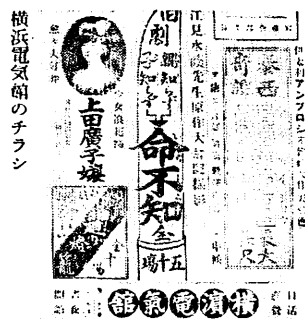
●おせんにキャラメル——「その頃の木戸銭は一等・二等・三等
と分れていて、三等は大人十銭、小人五銭だったと思う。一等二
等はその二倍か三倍だったか……。ヨコデンは二階建てで、階下全
部が三等、二階の正面が一等、両袖と正面の一部が二等、楽隊は
一等の隅に二、三人頑張っていた。キネデンは平家建て、前の方
の中央が一等、その両側が二等、木の柵で囲んである。その外側
の両袖と後方が三等である。ほかの活動館も大体似たようであ
った」（前掲書）

興行の単位は一週間ぐらい。開演は普通は午後一時だが、午前
一〇時からのもあった。出し物は大体二時間から三時間以
内、ニュースや実写それに短編がついて劇映画となる。目玉の松
ちゃんの出る劇は、特別興行であったようだ。

「一連の映画が終ると『毎度ありがとうございます。お静かにお
帰り下さい』という声がかかって総入替となる（後年この方法が
変って、いつでも出入りが出来るようになった）。

『エー、おせんにキャラメル、南京豆、エー、ラムネにあんぱん
はいかが。休憩時間には必ずおちさんがやって来る。何か食べ
ながら活動を見るのは楽しみなものであった。

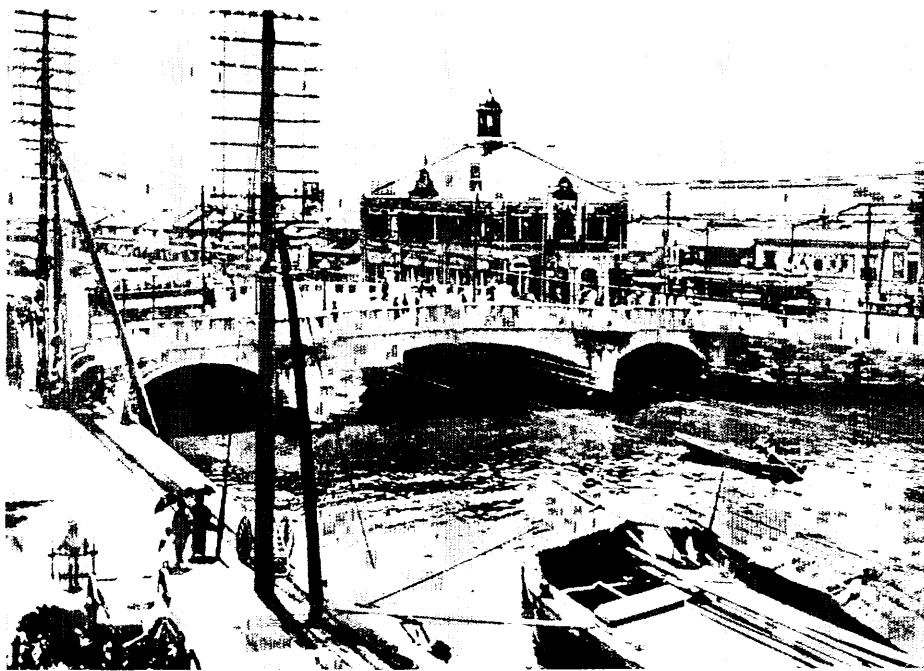
いつの日か活動では場内禁煙となって、場外の廊下でタバコを
吸うようになり、売店が出来て、食べ物を買えるようになった後
も、『エーおせんにキャラメル』はやって来た。しかし、土曜日



横浜電気館のチラシ



伊勢佐木町通り——芝居小屋ののぼりが目立つ（大正初期）



伊勢佐木町通りの入口吉田橋——中央の建物は伊勢佐木警察署（大正初期）

の晩なぞ大入満員のカツドウでは、押すな押すなでそれどころではなかつた。

暗闇の煙草の火は、驚くほど明るい。夢中でカツドウを見てみるとパッと明るくなる。こちらでも、あちらでもたまりかねた親方から声がかかる。「タバコやめろッ」と。静かに治まればよいが、相手が活きのいいお兄さんだったらたまらない。カツドウのさなか弁士が仲裁、なんてこともあった。

カツドウだけでは物足りなくて、実演をやったのがキネデンである。富士山のある風景の模型を作って、これに雨を降らせたり、雷をとどろかして稲妻をピカリとやったり、色電球を巧みに使って観客の眼を奪ったものである。

活動でちょっと変わったことがあったから付け加えたい。それは今半である。「唯今から半額、イラハイ」の声がすると、電鈴がやけに鳴り出す。その日の番組が終るおよそ一時間前である。

『丁度八時前後だから、伊勢プラして今半でも見るか』という人もあった。活動館乱立の苦肉策だったのだろう(岡田清『大正の頃』)

●夜店——大正期の伊勢佐木町は、夜店が人々を集めた。夜店は興信銀行(現横浜銀行伊勢佐木町支店)わきの道、福富町から羽衣町にかけてずらりと並んだ。

「日暮れ時からぼつぼつと露店が現われた。地面へゴザを敷いて商品を並べるものもあれば、テーブル状の台に品物を置く者もい

る。陽がすっかり落ちると、一斉に青白いカーバイト・ランプがつけられ、特有な匂いが街に広がる。

口上を述べ立てて売る男がいれば、黙って座っているお婆さんもいた。バナナの叩き売りの声は一きわ高い。手品もあればうらない師もいる。トウモロコシを焼く香ばしい匂いもする。演歌師が独特の節回しでヴィオリンをキイキイならしているのは実費診療所の辺りだ。亀染せんべいの裏に出た焼大福餅はうまかった。

亀染の後ろ筋向いに有った、内田のラーメン誰も好く”の内田屋のラーメンは、店はお粗末だが味は全く天下一品。ザキの通人なら誰も知っていた。あんなにうまいラーメンはその後たべた事がない。今はどうなっているのだろう。

夜の十時過ぎともなると、人通りもやっと減り始め、映画帰りの人々が一刻ゾロゾロと通り過ぎた後は、地元の者達の天下晴れの遊び場となる。あちらこちらの店から大人も子供も一斉に羽子板を持って飛び出し、道いっぱい広がって羽根突きが始まる。羽根を縦長によじって高く飛ぶようにすると、力一杯に打ち合う。これはもう女兒が振袖姿で優雅に打つ羽根突きなんというものでは無く、完全なスポーツだ。とても面白くて毎晩通りの空くのを待ち兼ねたものだ(前掲書)

●年の瀬——また、伊勢佐木町は、年の瀬には殊のほか人の波で埋まった。この頃正月の支度は伊勢佐木町において外に無かったので、全市民が繰り出して買物に来るといっても過言でなかつた



歳末風景——太いごぼうじめのほか正月の飾物が豊富である〈尾崎ミキ氏提供〉

た。

「昼頃から身動きも出来ぬ人の波で、夕方から夜にかけての混雑といったら凄^{かたど}い。掻^か払いを防ぐために店の入口には必ず誰かが見張りに立った。

ドツと波のようにお客が押し寄せ、店の中は黒山の人、人、人。日頃は温厚な父もテーブルの上に立ち上り、殺気立った大声で指揮をする。拾^し四、貳拾^じ四という大口の買物客がひきも切らずに入^いりて来る。大混雑が一時間も経つと、潮の退くように客が居なくなる。しばらくすると、又ドツとばかり押し寄せて、店は忽ち客で一杯だ。大晦日にはこんな人波が三・四回押し寄せる。買物にも潮というものがあるのだろうか。正月より面白かった。

それに、吉田橋のたもとは、ひきもきらず人々の往来であつた。年の瀬になると、歳の市が川岸に並び、正月の飾物がうず高く積まれて売られた。そして、救世軍の慈善鍋が現われた。

お天気の良い日には、毎晩八時頃になると、吉田橋の方からきまつて救世軍が太鼓を叩いてやって来た。女も男も黒^{くろ}っぽい軍服まがいの服を着て、赤い帽帯を巻いた軍帽を被^かっていた。行進曲風の旋律で、

み栄は……信ずる者は誰も皆救われ……

と歌いながらドンドンと太鼓を鳴らし歩調を揃えて、それはとても景気の良いパレードだ。これが来るのが楽しみだった」（前掲書）

●お浄行さま——大正に入った伊勢佐木町界限では長者町八丁目の常清寺が、この地域のシンボルであり、寺の周辺は小さな門前町の観をなしていた。広い境内のなかの放生池には、無数の亀が放たれていたし、境内の清正公堂に参詣の人々も多かった。このため近所の飲食店はなかなかの繁盛で、かど店のおでん屋蜂谷のおでん、汁粉にはいつも人々が一杯であり、ラーメン屋新橋はスーアのたぎるラーメンに人氣が沸いていた。

清正公堂はいくたびか火災に遭い、結局昭和五十三年に久保山常清寺に移転することになる。

それに少しはなれた福富町仲通四十番には境外仏の浄行菩薩が祭られていた。地元の人からお浄行様といつて親しまれた。

「境内は二十坪位で、大きな桜の木が植っていました。まわりは、寄進者の名を刻んだ石の玉垣にかこまれていました。中央には浄行さまのお像が安置されていました。朝となく夕となく一日中参詣者で賑わっていました。なかでも花柳界のきれいどころがたくさんお参りに来て、それはそれは華やかでした。

お浄行さまにお参りすると病気が治るといわれまして、病气持ちの人は自分が病んでいる処と、お浄行さまのご仏体と同じ箇所を、目なら目、鼻なら鼻というように、そこんところを薬くすりのタワシで、お題目をあげながらゴシゴシ一所懸命にこすったものです。毎日のことですので、境内の入口は、板に釘を打ちつけたタワシかけがありました。誰々ののはこれ、という具合にチャンとかけ

る場所が決っていたもんです」(福富町東通 松本勇蔵氏談)

●騒動——大正に入って順調な発展を見せていた関外も、突如として起った大正七年(一九一八)八月十五日からの米騒動の影響を受けた。

長島橋に集結した群衆は次第に数をまして、目抜き通りへと繰出す気配を見せたが、十八日には離散した。しかし関内はもとよりこの関外伊勢佐木町の店では、過去のいずれの時にもなかったことであった。

「『何処其処の焼き打ちがある』などと恐ろしい噂が十五日から横浜市内に漂って人心絶えて落付かず十五、十六日の両夜は市内の飾窓其の他の建物を木端微塵こらばみじんに打壊した物凄いな光景に、活動写真其の他の興行物は全部休業、十七日は市内大店、小店一様に未だ日の暮れぬ前から飾窓や硝子窓に急造の板閉ひを施し、その色を鼠や黒に塗りかくし、夜の八時頃には横浜第一の繁華街地伊勢佐木町、野毛通りを始め関内、関外の町々皆大戸を固く鎖し、十一時頃には活動写真のイルミネーションや街灯迄殆ど全部消灯し、電車の響きさえ聞えず、さしも繁華な都大路も閑古鳥が鳴きさうな物さびしさ、横浜としては全く空前の惨事である」(『時事新報』大七・八・十八)

地元の人で目撃した人は、
「米騒動は全国的でしたね。私も伊勢佐木町のデモを見ましたよ。梅ヶ枝町の交番を二、三人で道路の真ん中に引っ張り出し

て、焼いているのも見ましたねえ。米屋もやられたんでしょうが、この時は色々な事がありましたよ」(第六地区有志座談会)
●埋地の大火——しかし、この騒ぎが収まった翌年、埋地地区に災害が襲った。いわゆる「埋地の大火」である。

大正八年四月二十八日、千歳町一丁目の住宅から火の手が挙げた。またたくまに燃え広がり、三、二四八戸を焼失した。罹災、負傷者は二万三千人の多数にのぼった。焼失地区は千歳町、山田町、長者町二・三丁目、松影町、不老町が大半を、翁町、扇町、寿町は全焼、面積は五万坪(約一六・五ヘクタール)あまりであった。主な焼失建物は、神奈川県衛生試験所、同消毒所、寿小学校、山田小学校、寿警察署、南太平洋貿易会社、東京製鋼会社、日本海上保険会社、帝国興信所、三浦屋旅館などであった。損害二千万円。横浜開港以来の大火の一つであった。

人々はこの大火を身をもって経験した。

「午後一時頃でしたかな、千歳町から煙がもくもくとあがったんです。我々の住んでいる松影町には川があるから燃えはしない、大丈夫だということで、燃えている川岸の家に火消しの手伝いに行っていたところが、南風がひどくなって、建物が建て込んでいる私たちの家も火につつまれました。寿町の方からも燃えてきて、全部焼けてしまいました。よそに手伝いに行ってるうちにです。残ったのは真金町の遊廓のそばの五味質屋と私どものところの蔵だけです。庭の植木も根こそぎ焼けてしまいました」(埋地地区有



埋地の大火——土蔵が焼け残った(加藤俊雄氏提供)



数少ない鉄筋建物もくずれ落ちた

志座談会

「当時の屋根はほとんど板屋根だったので、それでアツというまに、どんどん焼けちゃったんです」(同座談会)

「出火は昼間で遠くの方でしたので安心していましたが、そのうち火勢が強まり、寿町の方に向かって来ましたので、荷物を舟に乗せて川づたいに元町の方へ避難しました。夜になっても火は収まらず叔父さんたちは荷物の番で舟に寝て、私だけ元町の叔父の家に寝かせてもらったのです。なにしろほかにも避難してきた人達がいって、私は押入れの中で寝かしてもらいました。

当時新聞に焼け残った七輪の写真と一緒にこんな見出しが書いてあったのを覚えております。

『うらみは残る七輪の焼けもせずして焼跡に』

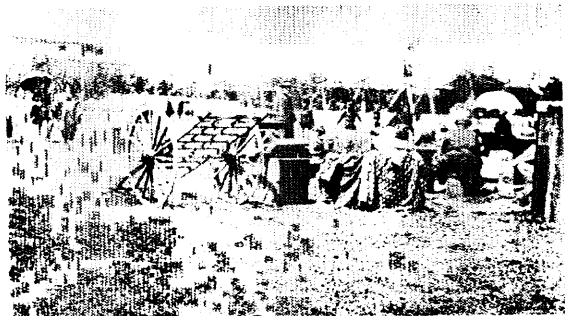
天皇陛下から罹災者一世帯につき三円五十銭ずつの見舞金を頂きました。火事後の復興については、ちょうど景気がよくなる時分でしたから、各地から建築材料が入り、たちまち復興しました、かえって焼ける以前より良くなりました」(ハワイ・ホノルル前川丈夫氏手記)

「寿学校が建てなおされましたがこの学校の校庭は、埋地の大火の経験から、燃えない建物として、横浜市で初めてのコンクリートを使って建てられました。関東大震災でも戦災でも奇蹟的に残って、いまの横浜工業高等学校を建てるに際してこわされましたがね……」(埋地地区有志座談会)



罹災者が集まる

大火で避難した人々



●復興——大火のあと、埋地地区は明治三十二年の大火と同じく、市民の努力によって復興した。埋地の街並みは大火の前後では、大きな変化を見せなかつたようであるが、大火後の大部分の商店は、輸出に関連して、鶴の橋の月村など、輸出用の木箱やポール箱の製造や梱包の業者、輸出雑貨の見本帖（カタログ）の製作、輸出品の整理加工、ししゅうなどと多様であった。松影町一、二丁目の場合には、洋服布地の問屋町をなし、ここでの取引先は、全国にまたがっていた。

●職人町——外埋地に近い長者町一、二丁目あたりには家具、建具職が多かつた。

「山田町、富士見町、松影町、寿町は職人町で、輸出の下請の仕事が主でしたが、震災で輸出貿易がなくなり、それによって随分町が交わりましたね。貿易をやっていた人々は横浜を見限つて、神戸へ逃げた人が多かつたようです。」

長者町の方は家具屋さん、建具屋さんが多かつたのです。今はほとんどオートバイ、自動車屋ですね……。

それに製業のシャツ加工屋さんが多かつたですね。それにシャツ屋の下請、生巾屋さんなんかが多かつたのです……。

松影町に大米屋という大した米屋がありました。亀ノ橋のすぐ左手でしたが、米騒動の時はねらわれ、ぶち壊され、一番被害が大きかつたんです」（同 座談会）

●地区整備——大火のあと、都市計画によって地区の整備が行わ

れ、その結果、長者町から車橋さらに千秋橋までの間、不老町通りの扇橋から港橋、それに亀ノ橋から港橋の間の三つの通りが整備され、プラタナスの街路樹が植えられ、一段と都市の美観を増した。（『横浜市史稿・地理編』より）

その上、この復興にあたっては、この地区に公共施設が次々と建てられ、家内式手工業の地域性に加えて埋地地区の一つの地域的特性とも見られるようになった。

大火後、翁町には翁町公園が建設された。三九二坪（一、二九五・八平方メートル）の小公園ながらこの地区最初の公園であった。翌九年十二月、千歳町の千歳町職業紹介所が廃止され、あらたに富士見町に職業紹介所が設置された。のち大正十二年八月、中央職業紹介所が竣工してからも労働力供給の拠点となった。十年八月富士見町に託児所が設置された。学校は、同年十一月横浜千歳裁縫女学校（のち千歳高等家政女学校）、横浜市立商業補習学校が十月に創立され、寿小学校には高等科が設けられるなど、市街地における教育施設も充実し、埋地地区には、業務の施設のほかに文教施設が加えられたが、これは関内地区の明らかな影響であった。そして石川町にまたがる亀ノ橋のまわりは、地藏坂から本牧方面へ通ずるただ一つの交通路としてにぎわいをみせた。埋地では、相模屋呉服店がすでに大正初めから百貨店の内容を持つ商売をしていたが、これが震災までつづいた。いわばこの辺りが埋地の中心ともいえたいようである。地元の人はいらう。



富士見町職業紹介所

「それから亀ノ橋通りは大したものでした。というのは、根岸の競馬場に通う人、それに又、伊勢佐木町に沿って往き来する人が多く大変でした。だから埋地の広い通りが中心地となったんですよ。たしかにその店は一流でした。それというのは関内に近いからです。関内は何といつても横浜の貿易の中心でしたからね」

(埋地地区有志座談会)

しかし繁栄をつづけている関外地区もまた、震災によって壊滅してしまふのであった。

第二節●日本一の盛り場

(1) 惨状から

●震災前の町々——繁栄の最中にあつた関外地区も、大震災により例外なく大きな被害がもたらされた。

震災直前のこの地区は、前に述べた経過のもとに、伊勢佐木町を中心として、周辺の福富町、久方町、松ヶ枝町。伊勢佐木裏の羽衣町、若竹町、蓬菜町など、いずれも商店、飲食店で賑わつた。細長い町長者町をへだてて、賑町も興行地として人々の人気を呼んでいた。賑町からさらに先にも商店が続き、若葉町、末吉町など小規模な商店の裏には、住宅が密集した。吉岡町、姿見町あたりは、永楽町の遊廓地の影響をうけて、特別な雰囲気のある街並

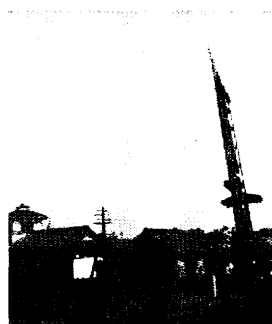


震災前の街 長者町4丁目の町並み——手前から店がつづいている〈加藤後雄氏提供〉

吉田町の夜景〈若松長氏氏提供〉



吉田町の町並み——左手は清水組の建物、火の見やぐら代りのハンゴが立てられている。〈若松長氏氏提供〉



みとなつていたし、駿河町には川に沿つて材木商、運送店が軒を並べていた。地区は完全な市街地であつた。

この市街地の一角の話。

「末吉町の一、二丁目のまん中の通りは、普通一、二丁目通りと言いますが、この通りは昭和三年の区画整理によつて現在のようになつたもので、それまでは砂利が敷いてありました。鎌倉街道に続いていたこの道は、震災前は、馬力、人力車の通行が多くて、人の通りもかなりありました。井土ヶ谷に屠場があつたので、時折り豚を運ぶ車も通りました。この道をはさんで左と右が街並みになつてましたが、裏は露地が縦横に通ち、そこにはいろいろな業種の店がありました。内職に毛の生えたような家内工業が盛んで、職人衆の多い町でした。

どういふわけか、この町には、医者と湯屋がなかつたんですね。ですから私共にとつては、あまり便利ではなかつたんです。

末吉町は大岡川に接していたため水利に恵まれ、木材・石炭・石材・砂利などの店が軒を並べていまして、運送が盛んに行われていました。今も荷揚げの跡がところどころにみられます。現在でも何軒かの材木問屋が見られます」

「末吉町には駄菓子と玩具の卸屋さんが沢山ありましてね。近在から買いに来る人も多く、私たちも、お正月の景品にと買いに行つたものです」(以上第一中部有志座談会)

こうして少しづつ町は市街化していくなかで、関東大地震が襲

つてきた。

●震災の被害―九月一日、この日は日枝神社の祭礼にあたり、少しでも景気を盛り上げるべく、各商店では思い思いの準備をしていた矢先であつた。突然の大地震で、アツという間に建物の七〇～八〇パーセントは倒壊、すぐに火災が発生した。炎は縦横に走りまわり、さしもの繁栄の地区も、焦土となつたのであつた。

野沢屋、喜楽座、角力常設館、朝日座が壊れ、観客は圧死した。賑町の日本屋夜銀行も壊れて焼失。羽衣町では太田倉庫が残つただけで、東本願寺別院、弁天神社など焼け落ち、姿見町では、富貴楼、常盤亭、吉野屋汁粉屋ほかに旅館、料理屋、その他飲食店七〇軒あまりもすっかり焼失。若竹町・吉田町も同様。吉田町では三階建の清水組の建物、共信銀行、興信銀行などがそれぞれ焼失した。

突然の災害で、多くの人々が圧死し、焼死し、そして窒息死した。八方火の海のなかを人々はかたまつて逃げまどつた。焼け落ちる寸前、橋を渡つて中村町の高台や野毛に、そして久保山に避難をしたが、火はものすごく、避難中に天神坂の省線敷設予定地にたどりついたが、これも煙と火につつまれる等、行く先々で人々は焼死した。目の前で子を失ない、あるいは両親が材木の下敷きになつたのを救うことも出来ず、はては、材木ではさまれた片腕をノコギリで切りとつて救助する、といったさまざまな地獄絵図がくりひろげられた。凄惨そのものであつた。

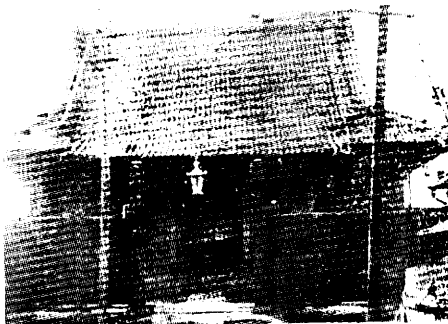


震災の惨状——長者町方面、市電の軌道を復旧する〈加藤直方氏提供〉



震災した児童に学用品が配給された、焼け残った寿小学校にて〈村上盛一氏提供〉

焼失した東本願寺別院（大正三年頃）



傾いた越前屋呉服店



また、ようやく川までたどりつき、川に溺れる者も多かった。なかでも戸数約七〇〇の福富町はその被害は大きく、六〇〇人が死亡。二〇〇人が行方不明となった。一家全滅は三〇世帯にも達した。

埋地の地域は、各町とも表通りが商店、裏は労働者の住宅の街並みであったが、これらの街はすべて焼失。吉浜町の日本海員掖濟会、海員養成所掖濟会病院、松影町の亀ノ橋病院、製氷会社、寿町では相模屋呉服店、左右田銀行支店、バプテテスト教会、寿警察署、名取ホテル、翁町では帝国銀行支店、市営住宅、不老町の安田銀行支店、川岸に倉庫の多い万代町では銅鉄合資会社、葛原冷蔵庫など、長者町をへだてて、山田町の山本邸、白石邸、浅草観音分院、富士見町の市営託児所、山吹町の私立警醒学校、田中金物倉庫などの、目ぼしい建物すべてが焼失してしまった。

特に、この埋地地区は、吉田川、堀川、日ノ出川の三つの川にかこまれていて、木製の橋によって他地域と連結していたが、鶴の橋、扇橋が残ったのはせめてもの幸いで、これによって、かなりの人々が避難できた。

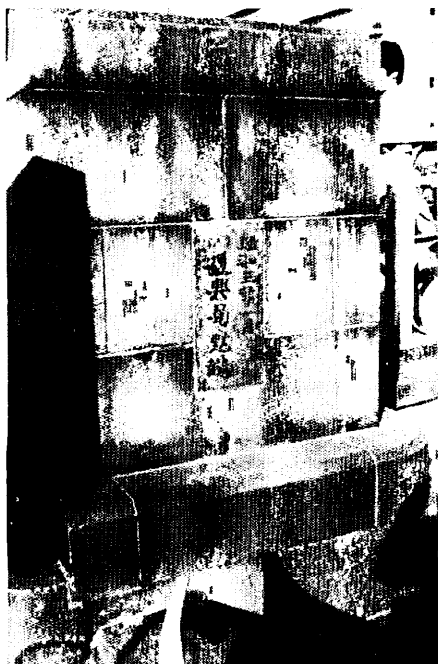
伊勢佐木町方面と、埋地方面をつなぐ東西に長い町域の長者町では、一丁目から四丁目までは、道路がはば広く、四丁目以外は火災も比較的遅かったので、避難が容易であったのがせめてもの幸いであった。しかし四丁目だけは七二人の犠牲者を出した。長者町郵便局は古いレンガ建物で、飛散したレンガで通行人二四人

が惨死した。

五丁目から九丁目ではいずれも家屋全壊、焼失した。九丁目では落ちかかった長者橋に避難民が押し合いへし合い大混乱となった。関外地区一帯は旧吉田新田の埋立地で、地盤が軟弱のうえ、この地区の建物はほとんどが木造であったのでその損害も大きかった。

派大岡川にかかる橋は吉田橋以外、木製の寿橋・末吉・黄金・栄・山吹・権三・日ノ出の各橋は、すべて大破、落下、焼失して、避難者のゆく先をはばみ、運河にかこまれた関外地区が犠牲者を多く出すこととなった。

●区画整理——震災復興にあたって、この地区は土地区画整理が



震災復興の名残り——復興局建造とある太田橋の親柱

適用された。第九地区、第十地区として市施行により整理された。第九地区は福富町ほか十一カ町の各一部。第十地区は雲井町ほか九カ町の各一部で埋地地区をのぞく一三万二、九七八坪六六（約四三・九ヘクタール）で関外の大部分であった。この区画整理に当っては建物移転も当然大々的に行われた。

この区画整理は、今までの土地の地目、面積などに大きな変更はさせないように、しかも各筆とも道路に面するように計画された。さらに、今までの道路幅や道路が系統的でなかったのをそれぞれ修正し、道路網計画によって、第九地区では、伊勢佐木町通りを幹線に、隣接各路線と連絡をとる幅三ないし一五メートルの道路を、十地区では二五メートルと二二メートルの幹線道路を新設、これを中心として三ないし一七メートルの道路を新設したり、拡張したのであった。

また道路も舗装され、伊勢佐木町通りの一丁目から七丁目には、アスファルト・ブロック。羽衣橋から駿河橋の先まで、港橋から日ノ出橋先まで、それに亀ノ橋などもアスファルトによって舗装された。

これらは復興の一部だが、現在の道路網はこのときの大幅な整備によるもので、震災復興の成果といえる。

伊勢佐木町の商店も次々と復興していったが、野沢屋は十二月に早くも復旧を開始、さらに亀ノ橋で焼失した鶴屋（のちの松屋百貨店）も吉田橋際に進出、寿町一丁目の相模屋呉服店（昭和十



亀の供養——ずらりと卒塔婆が並んでいる

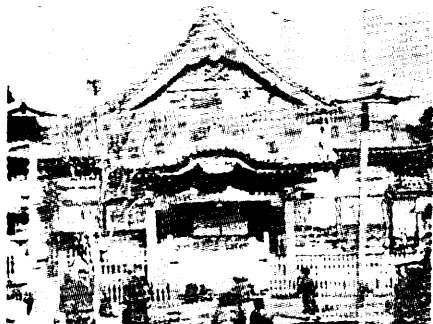
二年湘南デパートとなる）は出遅れたが、賑町に移転開店した。

震災復興に当り、商店の復興もめざましく、昭和戦前の街並みを形成することになった。

●亀供養——「震災の復興は、何を建てるといっても材料がないのでこまりました。三カ月前の十二月一日に、やっともとの処に家が建てられました。復興の際、建物の基礎工事をすると、人骨がでてくるようなことはざらでしたね」（埋地地区有志座談会）

「震災前の常清寺には広い境内がありました。」

関東大震災の時、寺が焼けて池も埋まりました。無数の亀が恐らく二、三百匹はいたでしょう。それが死んだので、早速、寺の境内にずらりと塔婆を建てて盛大な供養を行いました。そのと



震災前の常清寺（大正三年頃）

き、私共の青年団、檀家、町内会が協力して三日間、泥んこになって、亀を掘り起しました。大小の焼けこげた亀の甲羅を集めて、白木の箱におさめました。ピラミッドのように積みあげられました。清正公堂廟が震災で焼けたんで、池を埋めて整理したんです。その池の地固めには、東京大相撲の力士を呼びましたが、その一人に羽ヶ嶽がいたのを覚えています。たしか昭和五、六年のことだったと思います……。

その後、再建するための基礎工事をしようと池を掘ったところ、甲羅の焼けた亀が一匹出てきましたよ。数年間も生きつづけていたんですね、びっくりしてしまつて、お酒を飲ませて野毛山の水行場の池に放してやりました」(日ノ出町 田中幸一氏談)

●港の後背地——昭和初期には復興がほぼ完成、街の形態が整った。

「町の様子を想い出しますと、大きな建物はあまりなくなつて、寿小学校の三階建が目立つ位でした。校舎は鉄筋コンクリートで、当時としては大変モダンな建物で、各地から見学に来たといひます。

普通の家は平家か二階建、商店や事務所もかなりありました。概して、しもた屋が軒を並べておりました。関内や山下町の商館に近いので、輸物商や雑貨商が多く、艦船業者、船に食料品などを売る店もありましたし、ミシン加工業、梱包屋、ボール箱屋、製本屋、印刷屋、輸出用木箱の製造業者などがたくさんあります。

てね。

箱屋以外は家内工業的なものでした。町内には魚問屋があちこちに残っていました。

このあたりの近所付き合いは、いわゆる下町風で、隣近所は親戚つき合ひでした。おかずのやりとりは日常のことでした。夏などは道路に縁台を出して、夜遅くまでおしゃべりでした」(埋地地区有志座談会)

埋地地区は、大正震災前からひきつづき、港の貿易の後背地として、大正末から昭和初期にかけて、繁盛したところであった。

「埋地が発展しはじめたのは、この埋地には輸出用の箱を作る箱屋だとか、布の加工屋とか、輸出の下仕事をする人がたくさん住んでいて仕事をしたこと、それに山下町方面のお茶場に通う人達の通勤の道だったことなどが、その理由だったと、年寄りから聞いています。埋地はだいたい港に係した人が多く、船行きといて、品物をかついで船へ商いに行く人や、シャツの加工屋などもそうで、船行きが船から注文を取ってきては、シャツの加工屋に仕事を出す、加工屋はすぐ縫って渡すというように関連していました。

埋地は横浜港との関連が大ありでした。埋地には山下町の外人商社に納入する瀬戸物、コットン、ちぢみ、木綿類を加工する店が多かったですね。一軒一軒はたいして大きな店構えではなかったんですがね。ボール箱や桐の箱などの箱屋がありました。みんな

な輸出用です。鶴ノ橋のそばの月村という箱屋が代表的で、大きかったです。ほかに何軒もありましたけれど」(埋地地区有志座談会)

「うちの親父は梱包が専門でした。箱屋が作ってきた箱、そうね、一尺四方のものを一歳、二尺四方のものを二歳といっていました。親父は普通一五歳というのをやってきましたね。その箱へ輸出の瀬戸物とか、こわれやすいものを入れて、きっちり梱包するんです。でもただ入れるだけでなくて、そこへ詰めもののパッキンを入れるんです。

このパッキンには、わらを使ってたんですが、アメリカから虫がわくからいけないって言われまして駄目になりました。そこでそれに替る物というんで、木くずのようなものでパッキングをしました。今でも使われていますが、これは親父の発明ですよ」(野毛町 吉田衛氏談)

●縫製——縫製については、次のような手記もある。

「大正の末、私は番地は忘れましたが、寿町三丁目の叔父の家に居りました。当時、区制はなく横浜市寿町でした。家は木造建物でしたが、あの近辺にはめずらしく三階造りでした。前向いに指物大工さんがいて、そこでは立派な火鉢を作っていました。その三、四軒左がタバコ屋さんや魚屋さんでした。

叔父さんの職業は裁縫業で、小僧を六人と女中を一人使っていました。裁縫ミシンで外人寝巻の賃縫いをしておりました。それ

は刺繡ししゅうの浮模様の入ったチヂミの生地で、日本着物のように仕立て、うしろに帯を縫いつけたものでした。

生地を西戸部町の商店から箱車で寿町まで運び、それを裁断し、縫い上げてアイロンをかけ、一枚づつたたんで西戸部町まで届けたものです。一枚いくらで仕上げたものか知りませんが、小僧さん達は朝七時前から晩の十時過ぎまで、休むのは食事中だけ、よく働いたものです。今と違って年奉公に入ると、二〇才の兵隊検査まで無給でして、月の一日と十五日の二日、十銭から三十銭、勤めた年数によって差があったのですが、小遣こづかいを貰って遊びにゆく位のことを楽しみだしたそうです。お風呂だつて週一回、冬は風かぜ、夏は南京虫になやまされたものです。そうして年季があけると羽織袴一揃にミシン一台もらつて一人前という事でした。

私は朝、皆と一緒に食事をすまして、住吉町の三留義塾に通い、学校から帰ると、仕上がった寝巻をたたむ手伝いをさせられたものです。そして九時頃になるとよく今川焼や焼芋などを夜食に買いに出されたものです」(ハワイ・ホノルル 前川丈夫氏手記)

●町の表情——埋地地区の町の表情。

「市役所の水まき自動車が、ほとんど毎日のように、決った方角から来ました。その撒水車の水は鶴ノ橋近くのポンプ場からくみ揚げたものです。

埋地は波止場に近いせいか、外国の船乗りがよく酒を飲んで歩



復興後の町の表情——富士見町の通り〈加藤俊雄氏提供〉



同上——長者町3丁目通り〈加藤俊雄氏提供〉

いてました。イギリス船のインド人の下級船員などは、真黒い顔にもぢやもぢやのヒゲを生やし、頭にターバン、ひざまである長いワイシャツ、その上に短いチョッキ、ダブダブのズボンをはいて、それに素足でした。五、六人組んで歩いてましたが、なかには八百屋でナマの大根を買ってかじりながら歩く人もいましたね。

市役所わき、港橋の角の公衆電話のところには、露天の帽子屋がいつも居ました。初老の夫婦でしたが親父さんは酒好きで、酔いがまわると、道路の真中に立って、バスや自動車を通せんぼしてしまふんです。悪い癖なんですね。昭和の初めは自動車の数も少ないので、そんなこと平気だったんですね」(磯子区森三丁目 飯田信二郎氏談)

◎イセブラ——昭和三年、復興が成り土地の区画が整理された関外地区のうち、伊勢佐木町周辺は大幅な町名地番の改正が行われた。この改正は、合理的な地番配付であった。現在の町域と地番のもととなったものであった。

新設の町名のなかには、例えば、英町や黄金町は紀元前中国の学者の書准南子の「清水有黄金—菴淵有玉英—」から、曙町や弥生町は当時の文部省唱歌「春の弥生の曙の上り下りのそのなかで……」からそれぞれ命名された。

これで関外地区での旧町名は消えたが、改正されたことは、街並み復興の完成を示すものであった。

この改正で特にここで注目されてよいのは、伊勢佐木町の場合——二丁目だけであったものが、三丁目から七丁目一本の通りなりに拡大されたことであり、老舗の街が一本化されたことであった。昭和三年伊勢佐木町には、街路樹も植えられた。「青い灯、赤い灯、映える夜の情趣は艶美の極致を現じ、行人皆花に溶け、花人に媚びて、不夜の巷を浮べて居る」(『横浜市史稿・地理編』)という状況となった。

野沢屋、松屋、相模屋などの百貨店は鉄筋コンクリートで、新しくお目見得した。来客のため送迎用のバスが伊勢佐木町と横浜駅間を走った。

伊勢佐木町を洒落て「ザキ」、ザキを散歩するのが「イセブラ」と言われたのもこの頃であった。

興行街もまた復旧。オデロン座をはじめ映画を中心とした娯楽街として、ザキはまさに最盛期となった。それに夜店には人々の人気がわいた。

大通りの亀楽せんべい脇で、大道芸人の居合抜き、歯みがき売り、記憶術の本、バナナの叩きうり、野沢屋から松屋にかけても露店が並んだ。

この通りには紺の股引き腹掛姿の人が、手押ポンプで道路に撒水する姿も見られ、この頃の情緒をかもし出した。

●ザキ——ザキについては多くの思い出をもつ人が多い。そのいくつかを紹介しておきたい。いずれも昭和初期の話。

「私らが子供の頃、市電が七銭、うちが山元町でしたので、子供同志五人位で円タクに乗るんです。オデヲン座前で降りて十銭。日活で朝の割引映画を五銭でみて、上総屋で牛丼を三銭で食べて……そうするともう金がなくなっちゃうんです。帰りは歩きです。ね。親から二〇銭も貰えばもうオンの字の時代でしたね」(野毛有志座談会)

「昭和の初め頃、大人の私共だつて、五〇銭持つてゆけば、円タクに乗つて、映画を見て、汁粉かなんかたべて一日中、ザキでゆつくり遊べたもんです。帰りは親不孝通りから真金町通りにゆくと、もう五〇銭じゃ帰れませんでしたけれど、五〇銭はズシンと価値がありましたしね……。その頃の若いもんはザキとそのまわりをひとまわりしてこなければ、寝つかれなかつたんじゃないですか」(埋地地区有志座談会)

「昔は伊勢佐木町あたりしか行くところがなかつたですもん。金魚すくい、玉ころがし、射的だとかつて店があつたんです。いい所でした。縁日は常設で朝日座のとこから入つてネ。また、荒井屋の裏通りにもね」(酒亭・上総屋常連座談会)

ザキのにぎわいのスタート地点は相変らず吉田橋であつた。夏には川つぶちに植木市、暮にはしめ縄などの市が立つて、アセチレンの光が夜を彩つたのであつた。

まさに昭和戦前のよき時代であつた。しかしアセチレンの光のなかに浮き上つた情緒も、昭和十年代に入ると薄れ、そして消滅

してゆくのであつた。

(2) ネオンかかやく

●一文おもちゃの店——昭和の初期、ザキの本通りの繁盛にもなつて、その周辺も影響をうけてにぎやかとなつた。福富町の場合、「戦前この町は特別な町というほどのことはなくつて、一部伊勢佐木町の家内工業が盛んな町でして、タンスや風呂桶の職人も多く、しもたやのような家の板の間でトントンと仕事をしました。いわゆる職人の町でした。ですから、いまとはまったく違つた町でしたね」と町の人はいう。

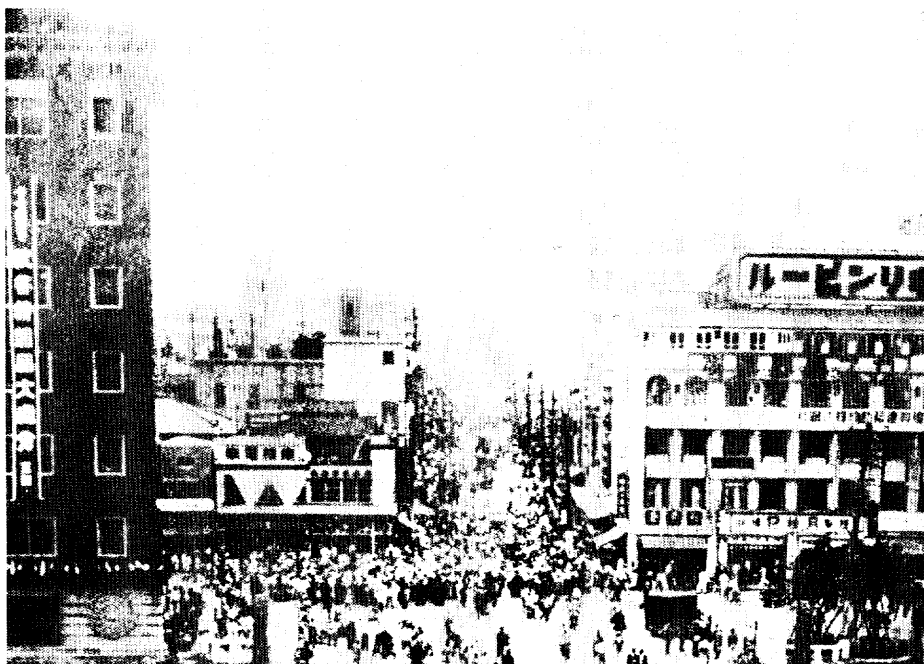
長者町通りの野毛方面からの入口、八丁目あたりには、明治九年頃、いわゆる一文菓子屋ができてたことは前の節にも述べたが、昭和五・六年になると菓子製造業者がさらに集まり、菓子製造業の町となつた。そして地つづきの八丁目には、浅草の蔵前に似た一文玩具(おもちゃ)の間屋が順次開店されていった。

この一文菓子も一文おもちゃいずれもが、駄菓子屋で子供相手に売られたものであつた。

おもちゃについて、

「かくて順次発展を加へた十数軒の店舗は、此町の色彩を濃いものにして、両々相俟ち、現在、榎本・佐野屋・早川・石川等の老舗が軒を並べ、横浜名物に数へられて居る。

おもちゃ製造の材料は、安価を前提とする為め、主として木



ザキは繁昌——ザキの入口、左手のビルは松屋デパート



— 1・2丁目の通りの賑い

イルミネーションに輝く野沢屋



片・厚紙・ブリキ等の廃物を利用するゝ事が多い。そして市内に散在する製造工場に依つて供給さるゝのであるが、部分品の加工は、場末居住者の手内職として、所謂家内工業の一部を受持つて居る。かくて一文おもちゃは、近郊近在の一文菓子を商ふ店々に分配されて居る」(『横浜市史稿・風俗編』)

これらのことは、長者町が交通の便がよく、近郊近在の一文菓子商に供給するのに便利であつたことが、その原因とみられる。

昭和十年代、長者町八丁目には地区の人々の記憶でも、菓子の問屋、製菓店が多かつたという。

●ネオンがやく——昭和十年三月、横浜では復興大博覧会が盛大に開催された。関外地区も例外なく、この喜びにひたり、市民が充満し非常なにぎわいとなつた。昭和十二年十月、吉田橋ぎわには東京銀座のオリンピックの支店が進出。四階建の食料品とビヤホールは、大衆向きの店として早々に市民の人気を集めた。

巷は、夜のネオンに輝いた。特にカフェーは市民の歓楽を代表するものであつた。伊勢佐木町ではメトロナイトパレス、サクラサロン、それに曙町の喫茶横浜ブラジルが評判となつた。金港ダンスホールでは創立十周年記念の大舞踊会が行われるなど、昭和初期の風潮が、あたかも徒花のように湧き出した、といえた。

ザキの盛況にたいして、周辺の街並みも整備されていった。例えば末吉町や若葉町の場合、

「旭橋横から黄金橋の末吉町一丁目には旅館新盛館、日本製菓株

式会社の製菓工場、荒金菓子製造所、杉山空びん倉庫、小此木材店、古橋牛肉店などの大店、黄金橋から太田橋にかけての二三丁目は古川製材所や数ヶ所の材木置場として、願西寺や中將湯、末吉旅館などが目立つ建物でした。太田橋から栄橋には倉庫や材木店が並んで、小規模の建物が多かつた。若葉町には橋湯、カトリック教会、料亭喜文、大谷甘納豆製造所、柳湯がありました。

五丁目には横浜病院が別館を含めて大きな敷地を占めました。それに坪井こんにやく店、隣りが松原銅工店、いも屋、その前に北浜、坪井、隣りにふみの古道具屋、その向いに太田古道具屋、交番裏は鈴木葬儀屋。それに宮越、青木畳屋で、次は私の家、杉本建具屋、長田ペンキ屋、駄菓子屋、仕立屋、魚源、その隣りが柳湯、タバコの専売局、川松屋という酒屋、だるま横丁の八百屋、塩もみ屋、もち菓子屋、市川下駄店などでしたね」(第一中部地区有志座談会 地元の人々の、こうした記憶は詳細で鮮明である)。

●職人町——福富町の場合、伊勢佐木町通りに並行した福富町東通、福富町仲通、福富町西通となつている。いまの福富東通や福富仲通は歓楽街の一角となり、福富仲通から福富西通りにかけて家内式手工業の盛んな町で、しもたやのような家のあちこちでダンスや風呂桶、建具などが造られていたし、土壁の下地を細い竹で編む木舞職こまなど建築関係の職人も多く住んでいて、いわゆる職人の町であつた。

常清寺界限はまた震災前の賑いに戻った。清正公は毎月二十四日、浄行堂の縁日も復活、参詣者も後を絶たなかった。

しかし常清寺の放生池は埋め立てられ、震災前の雰囲気とは変った。

●裏通り——伊勢佐木町を中心とする周辺の地域の特徴が出てきたのもこの頃であった。伊勢佐木町一・二丁目の通りを中心として大岡川寄りの吉田町、派大岡川寄りの蓬萊、羽衣、末広の各町は、伊勢佐木町の裏側の町として、歓楽街を形成してきた。この地域を区切るようにほぼ南北を長者町の通りが貫き、伊勢佐木町三丁目から先を区分する格好となった。

伊勢佐木町三・四丁目（旧、賑町・松ヶ枝町）は、一・二丁目の連続の地域であったが、五・六・七丁目（旧、長者町・若竹町・吉岡町の一部）となると、その繁華さはぐっと庶民的な雰囲気を持ち、七丁目あたりは、いわば場末の観が見られた。

昭和初期、ザキ一・二丁目の通りから長者町先の南側、曙町・弥生町や北側の末吉町・若葉町は、それぞれの特徴を見せはじめていた。

曙町や弥生町は、富士見川（現、大通り公園）にかげられた武蔵橋や長島橋によって隣接の遊廓地域と接続し、その影響を強くうけた。大岡川の川岸には柳が植えられ、市電が走り、風俗営業のもつ雰囲気があるにも出現した。川に沿った一帯にはバー・待合・飲み屋・芸妓置屋が多かった。

「この地域には『景気づけ』に飲み食いをして廓なまに繰り出す者や、廓での不首尾を忘れるためのやけ酒、というような人々が多く来たこともあります。

曙、弥生の三丁目から四丁目にも置屋が多くて、飲み屋、カフェもずい分ありました。置屋の芸者は、伊勢佐木町の料亭にでかけてましたね」（第一北部有志座談会）

●迷惑——弥生町の一部はもとの吉岡町、久方町、雲井町が含まれていたことから、吉岡町の岡をとってオカチヨウ。曙町の場合には、曙のアケからのちにアケチヨウと略して呼ばれたこともあった。

大岡川の川岸一帯の盛り場は、市民に親しまれた。特に十一月、大鷲神社の酉の市ともなれば、その市にきた人々の流れが、この界限を埋めたものであった。

また盛り場には有りがちな私娼が出没、夕なずむ頃になると、嬢客の袖を引くという風景が見られたものであった。

盛り場にそったこの界限の裏通りは、地元以外からは通称「親不孝通り」と呼ばれた。

「語源といったほどのことではありませんが、あその通りには若い頃放蕩を尽して、親の死に目にも会えなかった人がいたとかで、そのように呼ばれるようになったと聞いています。」と地元の人はいう。

一親不孝通りといわれて、迷惑したのは私共の地元です。私

どもが店を持った昭和初期、不良青年がいつも来てて、もめごとが絶えなかつたんです。或いはそういうところから、へんな名前と言われたんでしょうが、私共これは非常にいやなんで戦後、昭和三十年頃には会をつくって、『伊勢佐木町中通り会』という名前にし、通里も中通りというようにしました」(第一中部有志座談会)

●情緒―しかし、こうしたイメージの暗さの通りにたいして、この地区をぐるりと取りまく運河、特に派大岡川(新吉田川)では、巷の情緒は決して失ってはいなかった。

「おしゃれ女が髪かざりの弁を、抜いては無心に投げこむように、散りのこる柳の葉が風もないのに、きれいな流れにハラハラと落ち、河岸に舫う、苦船の夕煙りがゆるく川面に流れる頃になると、橋一つ向うの廓の灯も、さすがにさびれて秋が来る」

これは、昭和初期―横浜市内の中央を流れる新吉田川、長島橋付近の晩秋風景である。それほど澄んだ流れではなかったが、時には釣糸をたれて楽しむ人の姿もあった。

蝙蝠の飛び交う淡い夕月の下へ涼み台を持ち出し、湯あがりの浴衣の袖を川風に吹かせて恋を語った若き日の甘い夢も、今では遠い昔の想出である」(越川政治・随筆白湯の味『日本履物新聞』所収)

●外埋地―一方、遊廓地域に隣接する埋地地区のうち外埋地といわれた一带、山吹、富士見、山田、千歳、三吉の各町は曙、弥生の方面とは違った街並みを見せていたようである。

千秋橋・山吹橋寄りの区域では、川岸に材木店、運送店が見られ、かなりの繁栄を見せていたが、遊廓地域からの直接的な影響は比較的少なく、むしろ一筋の道路が一線を画し、住宅・商店混在の街並みが続いてバー・芸妓置屋などの風俗営業はほとんどなかった。

地続きの山田町の場合、街並みの型状はこれとほぼ同じであったが、むかし、伊勢佐木町通りにあった観音堂の後身といわれる浅草寺別院・観音堂があたかも町のシンボルかのように町の中央部にあり、そのまわりに住宅商店が並んでいた。

このような街並みには、地域的団体・組織が結成されていた。その例は松影町内会で、昭和十年四月の「役員人名」によると、顧問二名、会長・副会長のほかに一七三名の役員が見られる。この頃の町には町内会が青年団・少年団を、多くは丁目毎に結成し、それが町に合同して町の自治的活動が総合的に行われていた。町内会組織の一端を示すものであった。

●商店街―昭和十一年三月、繁栄の伊勢佐木商店街にたいして、商工省は小売業改善施策の一端として、馬車道と一緒に実態調査を行った。その概要は、店舗数三三七店、開業年代は明治六九店、大正二二〇店、昭和一四八店。従業員は二〇三人が一四二店と最も多く、四〜五人が九二店でこれに次いだ。最高は三一人以上のデパートで野沢屋ほか二店であった。

営業時間は夜の十二時迄、店の平均売場面積は一・一・八七坪



右側



野沢屋(現、横浜松坂屋) 外壁のデザイン



昭和11年頃の伊勢佐木町通り

●吉田土手——ザキと野毛とを結ぶ吉田町は、完成した商店街で、伊勢佐木町的な雰囲気を持っていた。森永キャンディーストア（森キャン）はその入口に当り、学生達の溜り場となり、裏通りのおでんやにはサラリーマンの常連が屯するなど庶民に親しまれたのであった。町の北側は派大岡川で、もとの柳町であったが、柳橋によつて関内と連絡されていた。吉田河岸又は吉田土手ともいわれ、柳が川面に映え、ぼんぼりともる情景が震災後も続いたという。昭和初期、吉田町青年団（団長 原田久太郎）はここに桜を植え、ますますこのあたりの環境を良好にした。

（四二・五平方メートル）、販売方式は二七店以上が正札売、又は陳列売りで、ほかに呉服屋などの座売りが五六店となっていた。そして、この土地の地価は最高で二、五〇〇円、最低で三〇〇円であった。



野沢屋正面入口



野沢屋の売場風景 (1)



スカールの練習——昭和6年、左手に吉田橋と松屋デパートが見える。右手は港町2,3丁目〈加藤直方氏提供〉



同上売物風景 (2)

(3) それでも盛り場

●かげりのなかで——昭和十二年七月一日、蘆溝橋事件が勃発、この月、早くもザキには戦争の色が濃くただよいはじめた。

ザキの通りには、数人の女性が千人針の一針縫いを呼びかけ、二カ月後、商店街では早くも防空演習が開始された。この年の歳末、贈答品には国防石けん、愛国キャンデーなどの名がつけられた商品が、ウインドーに並んだ。

百貨店界では、昭和三年以来の横浜駅からの送迎バスがこの年の六月限りで廃止、それに替るかのように催し事が頻繁に行われた。松屋百貨店ではスパイ防止の「防諜展」、昭和十三年五月市防衛団主催の「市民防空展覧会」、野沢屋では「代用品振興展」が県・市・商工会議所共催で開催（同年十一月十六日より）されたが、ここには大豆を化学処理して作った洋服が登場して、市民の人気をさらった。こうしたなかに十三年九月二二日、同盟国ドイツのヒットラー・ユーゲントが横浜を訪問、伊勢佐木町の通りを行進、市民の猛烈な歓迎をうけた。翌年五月にはドイツ風ピアノホール「ヨコハマ」が羽衣町に誕生したのだった。

政府のこうした国威宣揚策にもかかわらず、伊勢佐木町周辺興行街は相変らずの人気で、伊勢フラの人々は昭和八年当時から一八倍になったという。なかでも十四年六月横浜常設館上映の「愛染かつら」は爆発的な人気を呼んだ。観客があふれて路上の整理



デパートで国債売出し中（昭和15年）



防諜紙芝居の実演風景（昭和十四、五年）

がつかないことで、館では罰金を課される始末であった。

しかし人気のある洋画専門館オデロン座は、アメリカRKO製作の「ガンガディン」をその十二月、敵性映画ということで自主的に上映を中止し、さらにこの年焼夷弾投下を予想して、防空訓練を行わなければならなかった。この訓練の時、こんなことをして何になる、と罵倒した酔客は五日間の拘留処分にかかるなど、珍事もあった。

●戦時色——映画館や劇場での防空演習は半ば義務づけられるとともに、伊勢佐木消防団では、武蔵橋わきに半永久的な防空壕の築造を六月にはじめた。これが市内での防空壕構築の始めとなった。

昭和十五年、いよいよ太平洋戦争の直前になって、ザキの大手百貨店は早くも臨戦体制下に入ったといえる。松喜屋では松喜屋商業報国会が三月、県下で最初に結成された。毎日の時報をかねて防空施設のサイレンがこの年五月、松屋百貨店屋上に備え付けられ、銀色のサイレンから突然の試吹鳴をおこない、イセブラの人達をびっくりさせた。当時の新聞は報じている。

そして、一方では九月には「国民防空展覧会」が松屋で、「栄養普及講習会」が野沢屋で、それぞれ開催され、戦時色が盛り上げられ、町はもはや戦時色一色に塗られていった。百貨店の食堂では節米運動として、十五年七月には週二回「米なしデー」が実施され、火曜日、土曜日には「うなぎうどん」「刺身うどん」



ヒットラー・ユージェント歓迎〈村上盛一氏提供〉



伊勢佐木町通り昭和十三年頃

「てんぷらすいとん」などが登場して販売された。

そしてオデヲン座では、ベルリンオリンピック記録映画「民族の祭典」三部作を上映、館内一杯にファンファーレが鳴りひびき、市民の喝采をあげたのであった。ザキの映画入場者は一月下旬で七六万七二〇人、料金収入二七万二八四円（十五年一月現在）で、五月には減少を見たが、それでも入場者は四三万四五人、料金一四万一、九六七円となった。

一方、全国的な軍需景気にあおられて、それまで関外の花街置屋六八軒は芸妓が少くなっていたものの、意外な好況を見せ、待合、貸座敷などの繁盛が目立った。これにたいして曙町の曙飲食店組合加盟の五八店は法の改正によって十二時迄に閉店、従業員不足などがたたって、かなり衰退現象を見せることになった。周辺に当る長者町の場合、十五年には同町九丁目の菓子製造業の町も経営が不調の兆しを見せ、大手の水飴問屋が廃業声明を出したのをはじめ、廃業が目立った。

●戦争直前にぎわい——太平洋戦争のはじまる直前、伊勢佐木町の繁盛を代表する興行界はまだ花盛りであった。大通りを中心として横浜宝塚（馬車道）、朝日ニュース、花月映画、電気館、常設館、オデヲン座、朝日座（新興映画劇場）、世界館、帝国館、日活、大都館、敷島座、横浜歌舞伎座、それに少し場所がはなれて金美劇場、三吉劇場がくつわをならべていた。

次の引用は、この頃のことを伝えている。



消防団の放水訓練——派大岡川で港町側より〈潤米保太郎氏提供〉

「然し映画の方の資材の統制などのため続映が多く、各々アトラクションに活路を求めている。ここで市民は必ず文化映画を観せられ、日本のニュースで前線の情報を目のあたり見るのである。

稀に『南太田の岡本さん。公用でございます。』と映写中にアナウンスされると、観客全部が起立して万歳を以て謝意を表するのである。演劇の方は敷島、歌舞伎、時によっては金美も映画に挟んで興行をしているが、上演脚本の選択になかなかの意味を払っているようである。そのせいか、人間ポンプ有吉光也と称する反芻胃を持つ奇人や、歌舞伎女形林長之助が敷島座に現われたり歌舞伎座は四年越しの日吉良太郎、花柳愛子が根を張って、月末には浪曲、漫才などの色ものも演じている。

花月劇場も金語楼劇団や、川田義男のミルク・ブラザーズなどで客を呼び、花月映画でも往年ハマの人気を日吉と争った曾我廼家メ太郎一座、金美館は富士嶺子、牧野映二、春野勇などハマに馴染んだ顔触れで剣戟、歌舞伎をやるなど、物凄い演劇時代を現出している」(高野まさし「伊勢佐木町繁昌記」『銃後の横浜』昭十六・十一・二十五)

しかし、華やかな興行界は、消えてゆこうとする徒花でしかなかった。そして、興行界は、戦後にも、現在にいたってもなお戻ってはこなかったのである。

●アーチも征く―昭和十六年十二月太平洋戦争に突入、この月のうちに警察は、カフェー、飲食店から英語などの「敵性横文



オデロン座<ニール・ペトラ氏提供>



オデロン座の楽士たち、大正十三年八月 永淑光氏提供

字」を追究するよう各店に注意を促し、横文字の「オデヲン座」は真先に槍玉にあげられ、十七年四月、横浜東亜劇場と改称させられた。この頃、徴用工員が工場をサボって来る者もあり、常習者は検挙されることもあった。

そればかりでなく、ザキの通りの鉄製街路灯が、金属回収のため撤去され、商店街のシンボルで市民にはなじみ深い、通りの入口のアーチが、十七年十二月、続いて撤去された。

このアーチは復興博覧会記念に造られ、建造費約四千円の立派なものであった。新聞は次のように報じた。

「伊勢佐木町一」と書いたこの鉄のアーチと、両側の舗道に鈴蘭燈を設けました。丁度昭和十年七月二十七日でした。舗道の鈴蘭燈の三分の二は第一次回収に応召、第二次回収で残りの三分の一も応召しまして、いよいよアーチが征く番となりました。毎朝毎晩眺め暮したアーチがなくなるかと思うと流石に感慨無量です。私達の実感ですが、自分の肉親に訣れる思いです。十二月六日の町内常会に於て応召と決定、町内の皆様も元気で送ることに決めました」『神奈川新聞』昭十七・十二・二十

昭和十七年、太平洋戦争下の伊勢佐木町では、戦果が挙がるたびに提灯行列が行われ、人々はそれを喜び合った。派大岡川の吉田橋わきには、二、三艘の貸ボートが浮び、松屋のビルのあかりが川面に映えた。

「私は伊勢佐木町を歩くことにしました。何と言っても心臓部で



横浜歌舞伎座〈加藤博士氏提供〉

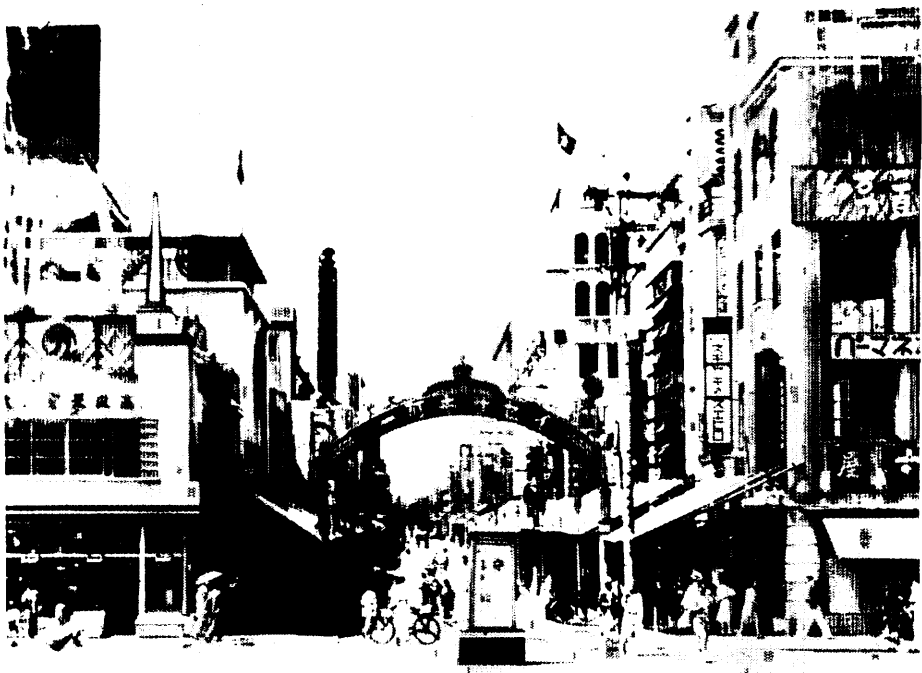
横浜歌舞伎座の舞台―ひらかな盛衰
 記源太勘当の場へ加藤俊雄氏提供

サクラビール
 サクラスタウト
 ミンレット

は経緯も勘當が
 店十時初音

横濱歌舞伎座のプログラム〈北村
 きく氏提供〉





伊勢佐木町通りとアーチ——アーチのうしろにはずららん燈が並んでいる〈横浜市図書館提供〉

す。街は人で一杯です。この人混みにもまれて私は歩いて行きま
した。

どの人も、どの店も活発に動いています。物資の節約で店売りの品物が無いかと言へば、それ相応の代用品は出廻っています。森永も博雅も有隣堂も万客で埋めています」(安田樹四郎 横浜の町『銃後の横浜』昭十七・六)

そして、有隣堂では戦争文学書や、工学書、南方への発展の指針といったような本がとぶように売れ、不二家には代用品のコーヒーを一系列行で待つ客が多かった。和菓子屋には代用の芋羊かんが並んでいた。

Sekai-Kan News

No. 156



横浜 北条町

セカイカン

世界館のプログラム〈荒井春夫氏提供〉



横濱日本話館の招待券〈荒井春夫氏提供〉



世界館の入場券 荒井春夫氏提供

●廃業——戦時下のザキは、こうして次第に商売にならなくなつていった。

昭和十八年一月、伊勢佐木町の百貨店、野沢屋の五階売場が、神奈川県木材統制株式会社の事務所となった。ついで三月には福富町の芳野呉服店など八カ所の閉鎖を発表、伊勢佐木町三丁目の尾張屋、林呉服店が廃業するなど、戦中に入って商店の閉鎖・廃業が相次いだ。さらにようやく営業をつづけていた麻雀屋六店は、警察から早急に廃業するよう敝命された(昭和十八年九月)。一方では最後まで残つた吉田橋の照明燈は供出のため取はずされたのであつた。

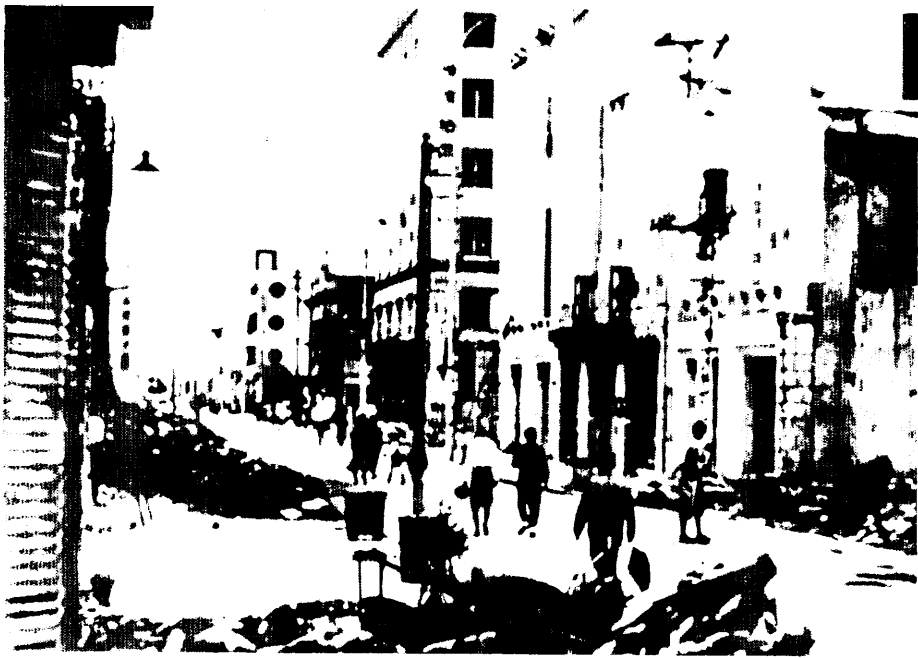
「ここにザキの象徴といえる、野沢屋、松屋の両デパートは、物資の不足と、勤労働員令による男子職員の徴用などで、四階以上の閉鎖がきめられた。このためザキの通りは蟬のぬけ殻のようで、繁華街に終止符を打つたのである」(『毎日新聞』昭十八・十二・十八)

そして十九年五月、野沢屋、松屋の各百貨店も、ついに軍需工場の東京芝浦電気の通信機製造工場に充てられた。戦時下の関外の低調は百貨店のみではなく、当然映画興行界にも及んだ。十九年三月二十日、政府は、密集興行地帯の疎開方針を決定。県下では伊勢佐木町が疎開の指令をうけた。このため、常設館・世界館の映画館と演芸場、花月小劇場がわずか十日のうち、四月一日づけで閉鎖除去が決定されるのであつた。

●空き家——このため盛り場ザキはまったくさびれ、昔日の面影は見られなくなった。商売をやめた店は空き家となり、十九年の後半には五軒に一軒が空き家となった。さて次はどこが空き家となるかが町の人の関心となった。灯下管制のなかで町は暗すぎた。繁華街はまさに灯が消えた。このため、よからぬ人々がのさばる始末になり、県や経済会、警察はやつきになって、その明朗で健全な町の建設を地元と呼びかけたのであつた。このような皮相的施策の実施をうけたザキの商店主たちは、「商店街地区再編成研究会」(酒井元一理事長)を結成して、活動をはじめることになった。「この会の望みは、何でもいい、ただ空き家にせず、暗いながらも五燭の電灯を軒に一燈つつ出して街を明るくし、散歩をしても危険がなく、ちよつと腰もかけられ、また渋茶の一ぱいも飲めるといふ、全く健全な戦時色の盛り場出現が目的なのだ」(『毎日新聞』昭十九・十一・五)といつたささやかなものであつた。

●大空襲——繁華街の沈滞は、あたりの町も、当然さびれさせた。そして旭橋から若葉町二丁目へ、末吉橋から若葉町三丁目へかけての建物が強制疎開となって、防空防護用の空地となった。さらに、伊勢佐木町の三丁目あたりには、防火用の井戸が掘られるなど、まさに町は臨戦体制のなかにあつた。伊勢佐木町七丁目の場合。

一戦中、この辺りでは、歩道のプラタナスの並木の間に、二世帯ぐらい入れる、盛り上げた形の防空壕を造り、その間に防火用の



戦災地——ビルは焼け残ったが……伊勢佐木町通り

井戸を掘りました。はじめは家の縁の下に作ったのですが、これでは危険だと市の指導で今度は外に掘りました（伊勢佐木町七丁目 田村益太郎氏談）

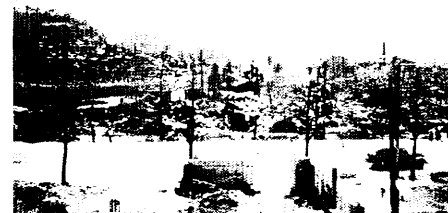
十九年から二十年頃の街並みは、末吉町から旭橋まで大岡川に沿って雑穀・機械・石炭・石材・材木・砂・製材などの店が目立っていた。旭橋の通りには日用品の店が集まり、南北の中央の道をはさんで、商店街がつづいていた。

末広町の通りには、カフェーがところどころに見られ、羽衣町・巖島神社付近には、ビリヤード、ミルクホール、パーマメントなどの店があった。

その対岸の末吉町、大岡川沿いには材木店、石炭、石材店が見



まったくいらなくなった……扇町、翁町付近（村上盛一氏提供）



ぼつぼつと小屋が建ち始まった、長者町1丁目、対岸は南区中村町（村上盛一氏提供）



野毛の丘が見渡せた……埋地一帯を見る。

られ、若葉町をへだてて末吉町の通りには、日用品を主なものと
した商店が並んでいた。これらの店は、いずれも物資不足で配給
統制、戦時下まともな営業がされていなかったことはもちろんで
ある。

しかし、こうした街並みを含め、関外地区は二十年五月二十九
日、横浜大空襲によって炎上、ことごとく焦土となってしまった
のであった。関外はまさに全滅した。もとより、人々も、その業
火に逃げまどい、さまざまいつつ、焼死、窒息死多数となった。過
古の築き上げた栄光も、あとかたなく焼き尽くされていった。関外
地区はまっ平となった。

そこにはあたかも死骸のように建物の骨材やコンクリートのが
れきの山がつづいていた。

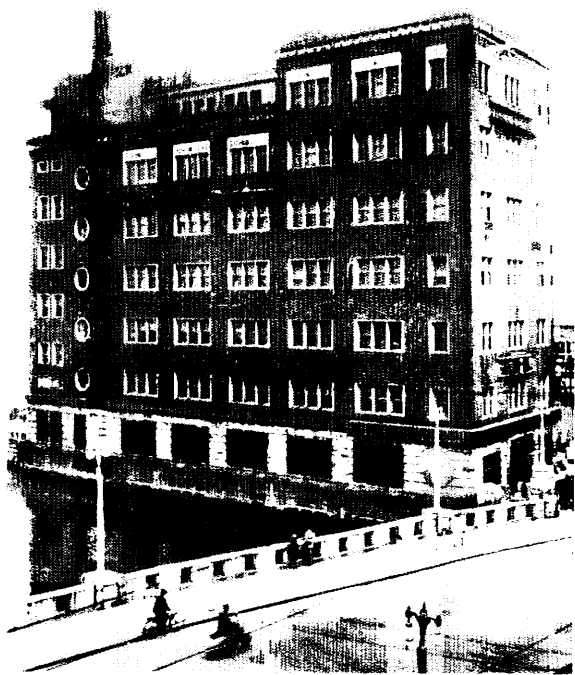
第三節●外国領土からの復活

(1) 接収のなかに

●接収―関外地区は戦災によって壊滅、そして他の地区と同様
に、二十年十月アメリカ第八軍によって接収された。土地につい
ては、二十年当初、二六万九、五〇三坪（八九万〇、九二三平方
メートル）、三三年までに一〇九万一、〇七二坪（三六〇万六、
八六六平方メートル）、に及んだ。建物については、当初一〇万

〇、九六五坪（三三万三、七七〇平方メートル）、これに引続い
て三万〇、二四七坪（九万九、九九一平方メートル）が加えられ
ている。

戦災を免れた野沢屋や松屋のデパートは第八軍PXに、不二家
は兵士用クラブに、吉田橋際の旧松屋（戦時中は日本海軍病院）
はアメリカ軍病院として接収された。オデロン座（戦時中は東亜
劇場）は第八軍の名をとったオクタゴン（八角型、八辺…編者）劇
場として米軍専門劇場となった。



接収された松屋デパート（神奈川新聞社提供）



チャペルセンター（昭和二十五年頃）
〈いせぶら百年〉より〉

接収は福富町や吉田町、長者町、若葉町、末吉町、万代町、不老町、寿町、松影町など関外地区のほぼ全域に及んだ。戦災で焼け出された人たちが帰り、焼けトタンと燃え残りの材木で小屋を建てていたが、接収のため文句なしに立退きを命ぜられた。

「私どもも焼け跡にバラックを建てましたが、撤収命令が出るや、もう次の日にはブルドーザーで、なにもかもきれいにされてしまいました。人々は市の幹線で睦町方面にゆき、今も住みついています」(第一中部有志談会)

接収は埋地で七万坪(二三万一、四〇六平方メートル)外埋地四万坪(一二三万二、二三二平方メートル)で、この地区のほとんど全部であった。接収されたこれらの土地は、米軍の補給物資材置場、モーター・プール、カマボコ兵舎の用地となり、焼け残った建物は寿小学校のようにそれぞれに接収利用された。

長者町七丁目から若葉町の一部にかけては、小型飛行場となった。原形をとどめないそれぞれの町域に、長々と金網が張りめぐらされた。

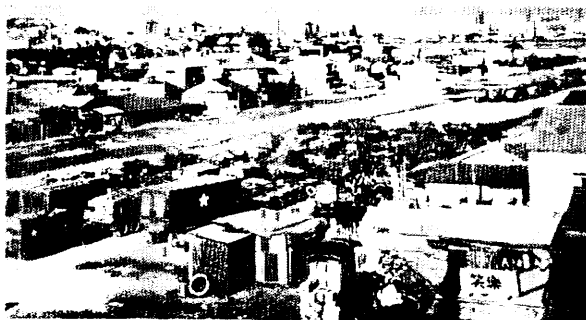
そしてそのまわりは、埋地と同じように米軍の居住地、そして自動車置場(モーター・プール)となった。

そして教会には、土曜・日曜にアメリカ兵が、ひきもきらずに礼拝に来た。この教会の前の時計宝石店のある店員は、

「強く印象に残っているのはクリスマスです。食べるのがせいじつばいで、クリスマスどころでなかったわれわれにとって、大型



接収されたオデロン座、オクタゴン劇場と名を変えた〈神奈川新聞社提供〉



小型飛行場——滑走路が続く、のちにモータープールとなった〈いせがら百年より〉

のイルミネーションで飾られた教会周辺は、オトギの国でも見ているような気がしました。イブは夜中の三時、四時まで続くのが恒例でした」と当時を振り返って語っている。教会前のPXや食堂、劇場は米兵で溢れた。

●群迷——この頃、市民をおどろかせたのは、町中に出現した飛行場であった。

「飛行場には鉄条網が張りめぐらされていました。マツカーサーと連絡をとるのに使ったもので、郵便物を送ったりする一人乗りの小型飛行機やオートジャイロ専用でした。黄金町駅の裏の、金丸牛肉店の所へ飛行機が墜落して、パイロットが死んだこともありました」(第一中部有志座談会)

この飛行場は二十五年七月三日に接收解除となった。

カーキ色の米兵の群にまじって、PX周辺をうろろしているのは街娼(バンバンガール)か、ヤミ屋、進駐軍相手の靴みがきか、似顔書きであった。ただもう「アチラさんひとすじ」の街となり、一時は外国の領土のようであった。

この頃のザキは、野毛と同じように各地から人が集まり、いずれもが食を求め、職を探し、あてどなく歩いたものであった。アメリカ兵相手に物々交換をする人も現われ、振り袖の着物や日の丸の旗などが、タバコのラッキーストライク数個と換えられたり、日本の絵や書がアメリカ軍の携帯食糧(レーションと言われた)数個と換えられたりしていた。この頃、ザキとその周辺に

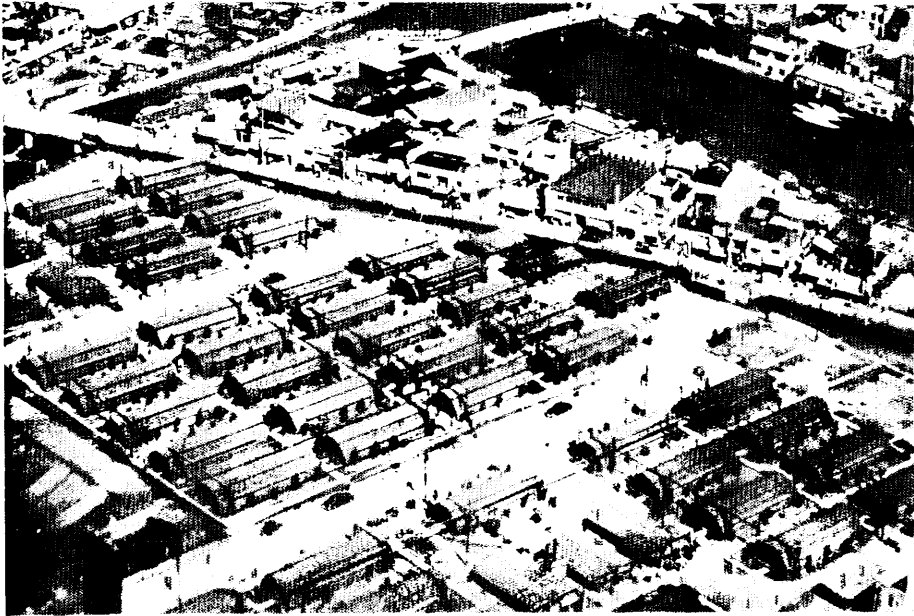
は、あらゆる人々が集まった。なかにマンドリンを弾く目の悪い老婆は印象的であった。

「マンドリンを弾くおばさんのことは有名でした。懸命に弾くんです。いつも決って『さらばラバウルよ』でしたね。夕方になると、やっぱり目の悪い旦那さんが迎えに来ましてね。どこの誰か勿論知りませんが、ええ、そのマンドリンは実に物悲しくって、あれを聞いた人は、それぞれ忘れることのできない戦後を感じていた筈ですよ」(酒亭・上総屋常連座談会)

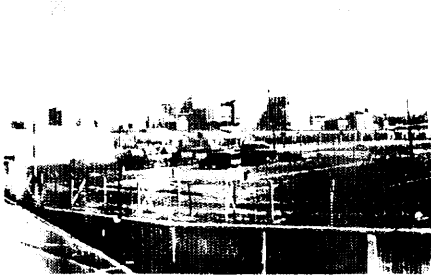
●敗戦の縮図——横浜出身の作家獅子文六は、この終戦後のにぎわいをハマツ子の目で眺めている。

「伊勢佐木町もにぎわいの点で、いささかも昔時に劣らないが、雰囲気はまったく異ってしまった。この街に軍用病院あり、兵隊さんが歩くのも当然であるが、私のように昔しか知らぬものは、眼をみはるのである。横浜は外人が多いのが、昔からの通り相場であるが、こんなに多くを迎えたのは、横浜開港以来のことにはない。敗戦の縮図は、日本全国中、横浜においてのみ正確また精密である」(獅子文六 随筆『山の手の子』)

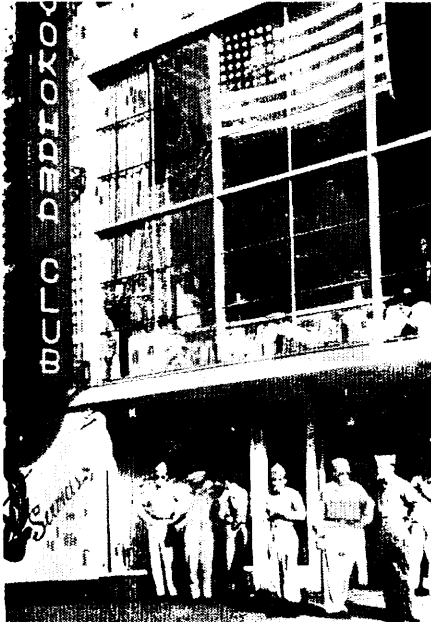
●分散——伊勢佐木町の商店街は、この接收によって四散した。母家をとられた商店は、わずかに接收を免れた部分の土地で、細々と営業するほかはなかった。野沢屋は衣類の販売を主に吉田町派出所脇に、有隣堂は野毛というように、大方は吉田町、野毛町、さらには花咲町から先に分散した。これらはまだよい方で、



接収となった町々——町が半分となった吉田町、カマボコ兵舎は長者町までつづいていた。左端は都橋、上部は柳橋、派大岡川 橋のたもとには屋根をつけ廃船を利用した水上ホテルが繋がれている。〈神奈川新聞社提供〉



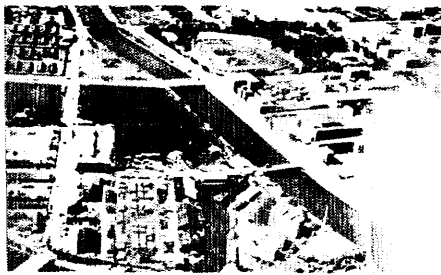
福富町西通、福富町仲通、大岡川の上に鉄条網が張られている。正面のビルは伊勢佐木町〈千葉弘之氏提供〉



米兵専用のヨコハマクラブ、現在の伊勢佐木町不二家の位置



左から万代、不老、翁、扇の各町、左の川は現在の大通公園、中央は派大岡川、橋は港橋〈北見忠久氏提供〉



手前が吉浜町、米軍の施設が立ち並んでいる。現在の石川町駅、中央の川は派大岡川、手前の橋は吉浜橋、その上が花園橋。



長者町1・2丁目、道をはさんで米軍の兵舎がある。左手の塔は米軍の望楼、右下は車橋、手前の町は石川町五丁目。

弘明寺、横浜橋などへ行った店もあった。商店街としての機能を失ったのは伊勢佐木町だけではなく、接収によって片側町となった吉田町、裏手に飛行場ができたザキの三、四丁目、さらにそのまわりの末吉町、若葉町、福富町など、みじめな商店形成となり、英町や日ノ出町方面に四散した。そればかりでなく、接収地からへだたった伊勢佐木町五、六丁目さえ大きな影響をうけた。

「この辺のお店は何軒もなく、住んでいた人達の三分の一位が戻ったくらいです。お店というのはお土産屋から始まったようです。借地の人が多かったためか、その後は何年もまわりが空地だという時代が長く続いています」(第一中部有志座談会)

七丁目の場合もその影響は大きかった。

「車道に敷きつめられてあった木煉瓦が、罹災の人々の燃料として掘り起され、わずかな間に一片も残さずなくなってしまうました。しばらくして、アスファルトが敷かれたのですが、所々は空地で、カボチャなどが植えられていました。昭和二十八年、角に富士銀行が建つまでは、そこも草ぼうぼうで、時にはサーカスが出てにぎやかに興行が行われたこともありました」(第一中部有志座談会)

吉田町は、野毛の活況に影響されて、一時的な繁栄を見せていた。

「現在、七九戸しかありませんが、皆が一致協力して街をよくしようという意気に燃えています。吉田町の名物としては、まず松

屋乾物店があります。安価だという評判です。つぎに忠安公司、誠実な勉強ぶりには感服しています。喫茶店ではレッド・アンド・ブルーが感じがよくていつでも満員です。それに、末広も味とサービスでは満点、銀なべのかばやき、中川牛肉店も健在です」
〔月刊よこはま〕昭二十五・九

●独特な活気——このような商店に対して、接収地の隣地に当る末吉町裏などに酒場がぼつぼつ出来ていた。特に曙町や弥生町あたりは、戦後の混乱期を代表するかのようになり、独特な活気さえ見せはじめていた。

一带はいわゆる「青線」といわれ、夜には屋台の店が並び、街娼が出没した。特に裏通りの一部は、俗に「親不孝通り」といわれ市民の歓楽の地域となった。

●解除陳情——目抜き通りが接収された伊勢佐木町から、かつてのにぎわいは喪失した。残った三丁目の先だけが頼りとなった。幸いにも松竹映画劇場から相模屋にいたる間が昭和二十年、十八人の業者用敷地を割り当てられ、早くも復興の意欲を見せていた。

しかし、肝心な三丁目入口のオクタゴン劇場は、接収中で、喉元を押しえられたままの状況であった。そこへ、こともあろうに二十一年七月には、在日米軍によってオクタゴン劇場前において、米因独立を記念した盛大なデモンストレーションが行われた。将兵二、〇〇〇人、装甲車のほか飛行機の編隊も飛んだ。

こうしたなかで、すでに一月の十七日には、「伊勢佐木町新興会」（上保慶三郎会長）が組織され、接収解除陳情を繰り返しながら、部分的な返還がなされた土地について、十一月、伊勢佐木町一丁目森永キャンデーと野沢屋の間、及びその裏にかけて各店二間間口の店構えで一八店舗の敷地割当を決定し、かつての地権者に店を出すよう勧めた。

このことは、各商店の過当競争の防止だけでなく、なるべく多くの種類の商品販売を行おうとする目的があったという。

この結果、二間間口の一八の店舗が建てられ復興のさきがけとなった。一、二丁目での組織だった商店街復興は、小さかったが復興への光明となった。接収解除と復興は地元伊勢佐木町だけでなく、市民の悲願であった。

●陳情つづく——陳情はあらゆる人達、あらゆる機会にわたって行われた。例えば、昭和二十六年九月二十日、有隣堂は横浜地方調達局長あてに接収の解除を陳情、「終戦後、その土地は進駐軍に於て接収せられましたので、止むなく中区野毛町三ノ一一二番地を借用して営業を継続して来ましたが、何分にも敷地狭隘の為に、活動に著しい制限を受け、為に営業に極めて困難を来しております」(『有隣堂七十年史』)と述べ、地上五階、地下一階の新建築設計図を添えて提出した。

二十七年二月十四日には長者町四丁目復興促進同志会（石谷大輔会長）ほか二人が中区復興促進実行委員会山本新三郎議長に

陳情、五月七日には野沢屋従業員二四〇人が連名で、八月十三日には同社の社長名をもって中区長あて、それぞれ嘆願・陳情、八月六日には不二家から中区長あて、十一月にはフライヤージム用地について、土地所有者(代表上保嘉保)ら一二名が市長に対して敷地返還を要求した。これに対して中区長は地元の市会議員や市関係者とともに国を通じて陳情した。切々として各種の団体は窮状を訴えた。「接収の解除の申請を執拗と思うほど繰返す」(『掲掲書』)であった。

フライヤージムは、この頃になると米軍はほとんど使わず、横浜ジャズまつり、近江俊郎歌謡曲の会、映画、河合拳闘倶楽部のボクシングといったように一部市民にも開放されていたので、市民の返還の要望をますます増幅させていた。

この頃は陳情とわずかな部分的な解除の繰り返しであった。こうしたことは、関外地区が商業地であるとともに、旧住民の復帰が早く、意志の疎通が比較的早く、在来のイセザキツ子の努力の結果であった。

●特殊飲食店——だが、この地区は他の地区と異った側面をのぞかせていた。その一つは、特殊飲食街に指定された地区以外にも、風俗営業的な営業が続出したことであった。二十六年当時の慣行地(戦前から認められていた区域)としては、曙中央(伊勢佐木町の仲通り二一軒)、伊勢佐木町西部(曙町四丁目二七軒)、それに永真(真金町一丁目八二軒)の各地区が一応認められていたが、

末吉町一丁目ノ三丁目約二〇軒、近くの南区西仲町の一角約三〇軒が、永貞カフェー周辺にはみ出した。その多くは住宅を用途変更したものであった。

特殊飲食店は、他面では売春婦を増加させ、風紀の悪化をもたらすもので、当局はしばしば摘発したが、この指定地以外の売春婦は、慣行地区の約一、四〇〇人に対して、このはみ出し区域は約二、五〇〇人の上っていたといわれている。

●復興へ―住民が残り少なくなった各町でも、それぞれ復興がぼつぼつ始まっていた。福富町の場合、前記の二〇世帯が解除の土地に商店や住宅をわずかに建てはじめた。しかし、これはあくまでも粗材の小さな建物であった。

凶は、接収解除直後の末吉町一丁目である。カマボコ兵舎にはもう住む米兵もなく、土地は草原となっている。米軍のゲートは取り払われ、日本人の姿が見立つ。道路だけが広々として、かつての街並の痕跡がある。復興への遠い道のりが待っている状態である。

遠景の左手の丘には市立の図書館、その前面の野毛山には日本住宅公団のマンションが建築中で、右手一帯の丘には成田不動産の塹が見える。丘すその野毛や宮川町は復興し、街並がととのいはじめているのが、草原の土地と対照的である。

関外地区の復興は、目抜きザキのように部分的に行われていたが、やや広域的な復興は伊勢佐木町七丁目をはじめてとなつ

た。七丁目は接収を免れたものの、当然のようにさびれ、商店街としての機能は失われてしまっていた。町の有志は当然、意欲をもやした。「地域発展のために、町や商店街で緑日をやろうということになって、進駐軍、市役所、消防署へ許可をとりに廻ったんですが、進駐軍は七丁目だけならいいかと、外は許可しませんでした。なにしろ、この頃に緑日をやるって、第一に電気がない。トランスを探すのにはほんとうに苦労しましたね。ヤミで都合をつけました。市へ道路使用料を払って始めたんですが、その日、子供達が『おじさんありがとうありがとう』って言ってくれたときは、うれしかったですね」(伊勢佐木町七丁目 桜井益太郎氏談)

商店の有志、町内会の役員によって、七丁目には商店街が整備され、子育て蔵の緑日が再興し、二十一年四月一日盛大に行われた。

●復興祭―九月十四日から、横浜伊勢佐木町復興会は神奈川新聞社と共催して尾上町のオリンピックを会場として、復興祭を行った。内山知事、半井市長の祝辞、上保会長の挨拶をはじめ、バンドの演奏、ダンスそして「ザキ音頭」の発表が行われた。この日、全国に向けて中継放送が行われた。さらに祝賀行進がバンド演奏を先頭に、花山車にはミス横浜が分乗して行進した。観衆数十万を数えたという。『神奈川新聞』昭二十一・九・十六より)

復興祭があたかも刺激となったように、伊勢佐木町三丁目でも



福富町復興会の役員へ松本勇造氏提供



接收解除直後(1)〈松本勇造氏提供〉



同 上(2)〈松本勇造氏提供〉

子育地蔵再建―戦後の伊勢佐木町七丁目にて(堀内昌子氏提供)



二十一年の暮から翌年にかけて松竹映画劇場から相模屋にいたる表通りに店が少しづつでき、本格的な復興の緒についたのであった。同じ頃、吉田町でも斉藤町内会長の肝入りで商店街がほぼ完成した。これは地元建設業清水組の施工になるものであり、復興祭が行われた。さらに、今までの暗さを吹き飛ばすような町民の楽しみが生れた。それはおさん様、日枝神社の祭りであった。二十二年に復活、町内の桶神輿が参加した。二十九年には大人用、子供用の神輿も作られ、山車もそろって、盛大な祭りに発展してゆくことになる。

そうした最中、二十二年九月に襲ったキティ台風は、折角造ったバラックを吹きとばし、大きな被害を与えて去っていった。七丁目では復興中の歌舞伎座も、柱が立ったばかりのところであったので倒れ、その後も建てられずに終わった。「もし、この劇場ができていたら、この町の雰囲気は別なものになっていたでしょう」と町の人は言う。

●街頭録音―二十一年九月三十日、ザキの松喜屋デパート前（赤トードイ）ではJ O A K（のちの日本放送協会『NHK』）による街頭録音が行われた。二時間あまりの時間に人々が群集、港都ヨコハマ再建への意見が続出した。この年二十二年の歳末風景は、一部接収解除された野沢屋、松屋デパートに買物客が殺到、正月用品の買いあさりとともに、陶磁器、化粧品、電気器具などの日用品に人気が集まったという。

●復活しきり―この頃のザキは、ほとんど進駐軍向けの土産物品店となっていたが、二十二年も六月末になると、通りには鈴蘭燈六〇本が出現した。伊勢佐木町新興会が主体となって、一丁目から七丁目まで間口一間（一・八メートル）につき四五〇円、予算二〇万円をもって設置した。このなかに赤紫黄の三色のネオン燈を通りの両口にとりつけることにしたもので、戦前の面影を再興することになった。

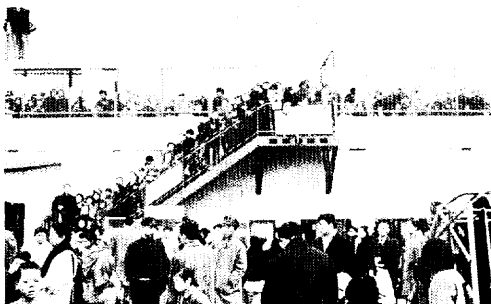
この年九月、新衣料切符制度が実施され、業者は新たに繊維製品配給指定店の登録資格審査を受けることになったが、五丁目だけでも二〇軒、ザキと野毛では一三〇数軒がしのぎをけずることになった。

二十三年一月十日の伊勢佐木町繁華街の入口にあたる吉田橋では、戦後復興を象徴するかのように、橋畔では横浜、川崎、横須賀、鎌倉四市の官設消防の出初式が、知事、警察部長、県会議長ほかに八軍関係者出席のもとに盛大に行われた。木遣音頭や梯子登り、消防車の一斉放水など頼もしいところを見せたという。

こうした正月の行事に対してこの年の夏、中区復興会の肝入りで吉田橋から都橋間の川の沈没船やゴミくずを清掃し、川端に桜や柳を戦前のように植える美化清掃にのり出したのであった。その手はじめとして、戦災以来中絶していたポート場が橋のかたわらに七月三日開店した。

「二十数隻の新しいポート、華やかなビーチパラソルで人々の人

催事に集まった市民―昭和三十年代
 〈横浜松坂屋提供〉



気を集めた。一時間五十円、朝十時から夜八時まで」とされた。

『神奈川新聞』昭二十三・七・四

入出の多くなつたザキには、さまざまな娯楽が出現したが、五丁目の野外ダンスホールもそのうちの一つで、五〇円の宝くじ一枚買えば、その余録として一晚中ダンスが楽しめるというのがミソであったが、これは逆に不良青少年の悪の温床となり、一二〇名の不良少年が検挙されたこともあつた。『神奈川新聞』昭二十三・八・十九

●客足を——この頃、ザキの人通りのなかには、家族連れのみ軍人が多くなり、買物の傾向は土産物より日用品に変わつていった。戦後の伊勢佐木町はG I相手のスーベニア（土産物店）から出発して再興が始まつたのだが、こうした日用品の需要がふえた傾向を、ザキの商店街では将来に対して考え直す時期として、注目し始めていた。隣接の野毛に移つた繁栄を取り戻すため、地元では客足をザキに向けせようと、桜木町・杉田間の市電運転を陳情し、さらに、新しい歓楽境として四階建のビルを計画した。一階は商店、二階は駐車場、三階はハイアライの競技場、四階はホテルとしてザキを国際色豊かにしようという計画であつた。さらにザキ入口に高さ二〇メートルのエッフェル塔型の広告塔が経費八〇万円をかけて昭和二十四年に設置された。

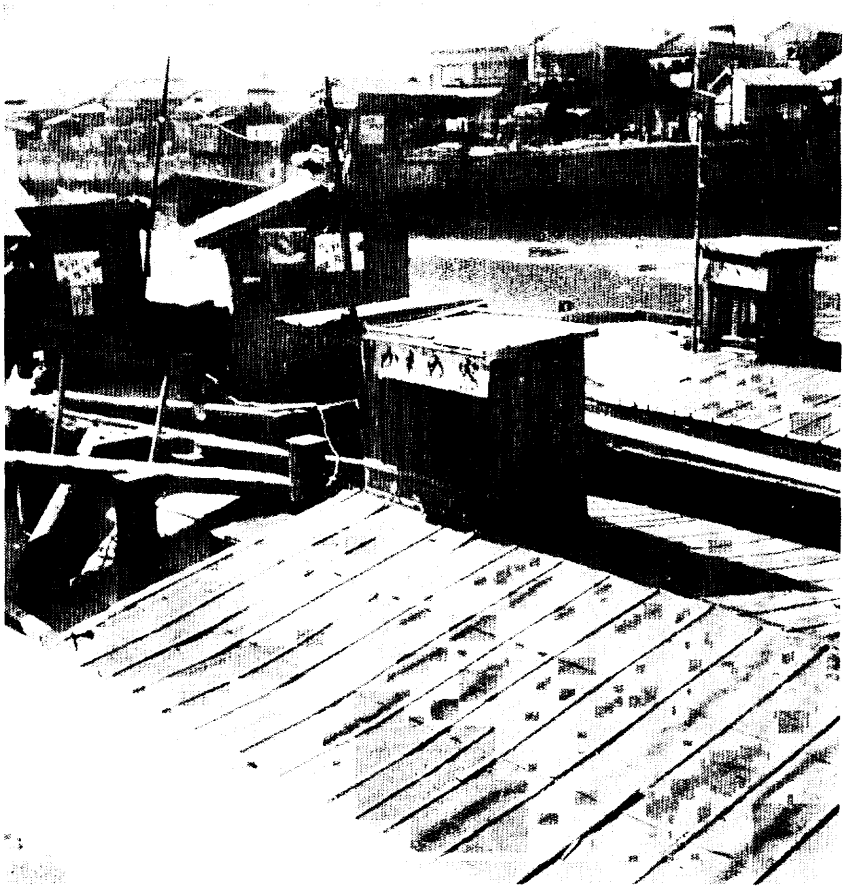
さきに述べた七丁目の縁日も相変わらず盛大で、二十三年八月十一日一六地蔵に入仏式を行い、素人演芸会が開催された。これは

一例だが、ザキの通りは両側の入口からの復興策がとられたのであつた。

●定住へ——この年、伊勢佐木町の居住者で、主食の配給を受けていた者の数は八七人。接収中で住民が少ない一、二丁目には中華料理、薬局、袋物、洋裁店など。三、四、五丁目になると居住者も多くなり、土産物屋、写真屋、雑貨商、古物商、靴屋、洋服店がみられる。六、七丁目になると時計商、特殊喫茶、本屋、古物商、下駄屋であつた。

これらの人たちの住居の畳数は、六畳一間、八畳一間、それに四・五畳と四畳というのが圧倒的に多く、なかには三畳一間というのもあつて、戦後都心部での住宅事情の劣悪さの一端を示すものといえる。これらの借家の家賃は、六畳で七〇〇円から七五〇円、一五畳では一、〇〇〇円、中には五畳で売上の五パーセントというのもあつた。反面このことは、伊勢佐木町通りの居住が定着したことを示している。

●ゆかた姿——こうしたザキにおいて、昭和二十五年七月、待望の飛行場の接収が解除されることになつた。これは地元の人達の陳情など、多くの努力の結晶であつた。京浜急行のガード下の仮小屋などで、古巣へ帰る日を待っていた一五〇世帯の人々にとつて、大きな喜びであつた。しかし、飛行場跡の処理については意見の対立があつた。県としては、ビジネス・センターにするため甲種防火地区とし、鉄筋コンクリート建物のみ許可する方針をた



大岡川に浮ぶ水上ホテルかもめ寮―河岸は花咲町一丁目あたり（浅野 隆氏提供）

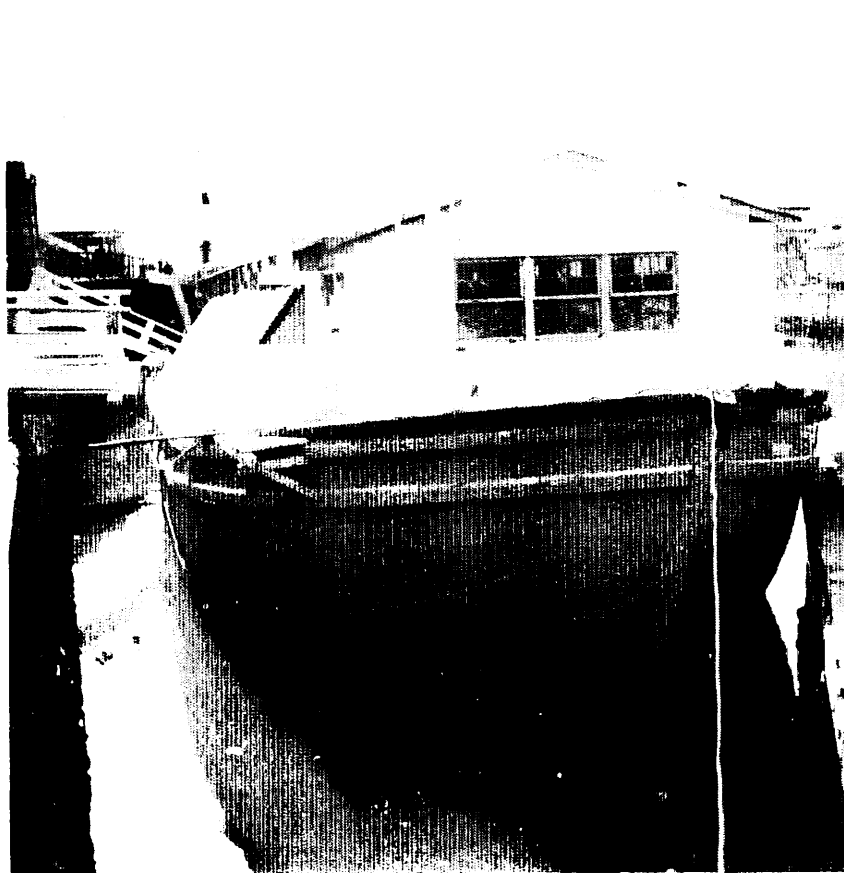


改造されたホテル（左下写真）の内部（浅野 隆氏提供）

発しんチラス発生で使用禁止となった水上ホテル、人口（左）にはピラがはってある。（浅野 隆氏提供）



改造されてきれいになった水上ホテル―左の橋は大江橋（浅野 隆氏提供）



てた。その上に、この地域の二〇パーセントを建築用地とし、そのまた一八パーセントを住宅用地にするという風聞も流れた。

これに驚いた地元では、若葉町復興会を中心にして、伊勢佐木町の伝統を活かした近代的市街をつくるべきで、県の意向は地上権の侵害であるとして反対運動を展開した。結局、防火地区にすることは当然としても、既得権者の保護を十分に考え、優先権は保証するという事で結着したのであった。

この七月、接収解除の喜びのなかで、地元が主催して市民納涼の夕べが飛行場跡地で行われ、チラホラゆかた姿もまじって、市民は解放感に浸ったのであった。

●水上ホテル転覆——しかし、ここに悲劇が起った。大岡川で廃船利用の自由労働者宿泊所、通称水上ホテルが、二十六年一月二十三日転覆。死者七名、重軽傷者三七人を出した。

ホテルは心友会宿泊所開進丸で、満潮によって船が浮き上ると、岸壁との間にあった直径五寸、長さ六尺の支柱二本がずれて、大きな音がしたのをホテル居住に出来ない者が、舷側が破れたと早合点、「船が沈む」とどなったため、またたく間にパニックがおこり、船は傾斜、転覆したものであった。

市では民生局、中区役所がその対応を開始、宿泊者中の病人、女子供は柳橋の市営水上ホテルに移し、負傷者は十全病院に移すなどの処置を行ったのである。戦後のこの地区での大惨事となった。

こうした暗い事件があつたのちの十月末、市警察保安課は、南区西仲町や末吉町に散在する私娼街の一掃にのり出し、街娼一人を留置するという事もあつた。

●まつり復活——ザキの通りは、それぞれの計画がなされてゆくなかで、二十五年十二月、三、四、五丁目の商店街でも五〇〇万円を醸出、クリスマス之夜からアーチに豪華なネオン灯を復活し、市街復興への途をひらくことになった。一丁目から七丁目まで、アーチ六基、街路灯一二九本（工費六五〇万円）がつけられ、二十六年四月十四日からはネオン祭が催されるほどになった。

そしてこの九月十五、六日に、関外一帯の鎮守お三の宮（日枝神社）の祭礼が一年ぶりに復活した。接収によって氏子が減少したとはいえ、六〇基の御輿による連合渡御など盛大に行われた。

こうしたザキ復興の具体化のなかで、デパートでも各種の催事が行われたが、二十五年の年の暮、衣料ラッシュのさなか、米国東京女子大学建設資金のために、中古洋服のバザーが開かれた。中古品のオーバー、背広一着五、八〇〇円などで、日本人向きに改造したのが人気を集めた。さらに翌年の暮、長者町のフライヤージムでは、県・市・横浜商工会議所が一体となって、翌年の講和条約発効をひかえて、日米合同の「お別れクリスマス」が開かれた。市内小学生五、〇〇〇人が招待され、内山知事、平沼市長、原会頭、米軍司令官が列席の上、クリスマスカロール、バラエ

テイ・イン・ショー、米軍楽隊の吹奏、ピクター児童合唱団の合唱などが盛大に行われた。

お三の宮の祭礼、お別れクリスマスは、まさに横浜の戦後の収束を見せたような感があった。

しかし、ザキの野沢屋や松屋では依然として全面接収がつづけられていった。一方、二十六年春、四丁目には湘南デパートが誕生した。そこでは九月にはファッションショーなどが行われた。

●光明——こうした接収地関外地区に、一筋の光明を見せたのは、二十七年の関内の接収解除であった。関外の部分的な解除は、当然商店街の全面復興につながらなかった。たとえ土地は、全面的に解除されても、荒れるにまかせた土地は地域ぐるみの整備が必要であった。二十七年七月十六日、関外は、岡野町（西区）東神奈川（神奈川区）とともに「接収解除地整備事業」の地区に指定され、十月二十四日「関外地区土地区画整理委員会」（磯野庸幸ほか委員九名）が設けられた。

計画は三カ年計画で、市経済の中心的地域の発展を予想し、街路整備、公園の整備が重点とされた。しかし、米軍の代替地や施設の整備問題などによって大幅に遅れ、三十二年度に、焼けた電柱や老朽化した建物を整理したのとどまり、結局、区画整理事業の完成とともに地域が整備されるのは実は、十年後の昭和三十七年となるのであった。

(2) 不死鳥のように

●接収解除——関外地区、特に伊勢佐木町に明るさが戻ったのは、接収の解除であった。この解除にさきがけて、昭和二十六年四月、伊勢佐木町商店街協同組合が発足、すずらん燈が点灯、翌年アーチが建設された。これが商店街復活の第一歩となった。

主な建物や土地は、地元の人々や行政機関などの努力が実って、昭和二十七年九月に解除となった。しかし、解除されない土地もあって、復興のさまたげになることもしばしばであった。末広町の一部には、ほとんど使われていない、倉庫のような小さい米軍の仮病舎一棟が残っていたが、そのわずかな未解除土地のため、有隣堂が計画した社屋建築工事ができないということもあった。野沢屋は二十八年三月二十七日解除となったが、それも二階以上で、一階は接収のままというチグハグなものであった。この野沢屋が全面解除となったのは三十年三月、同六月に盛大な開館パーティーが行われ、デパートとしての機能が回復した。

二十七年伊勢佐木町の解除ののち、二十八年六月には、関外を含めた関内、岡野町（西区）東神奈川町（神奈川区）にわたる接収解除整備事業竣工式が、千秋橋で盛大に行われた。野沢屋隣の松屋の分館解除は二十八年八月十四日、同年十一月十二日にフライヤージュが解除となった。当時巨大なかまぼこ型の建物は、横浜公園に移転となるまで一時的に市民に開放された。次はその一

例。

「伊勢佐木町にフライヤー・ジムがあった時、私たちがジャズコンサートに興行をしました。大変な人気で、すごいものでした。二回目の時は怪我が三〇数人、人事不省におちいった者二人が出ました。もう入れないというのに、どんどん外から押してきて、見ている間に締めてあった入口のカンヌキがしなるんです。危い、逃げろと言ったとたん、カンヌキが折れて将棋倒しになったのです。その時、出演したブレーヤーは、フランキー堺がドラムをたたき、トニー谷やまだ子供だった雪村いずみ達でした」(野毛町・吉田衛氏談)

昭和三十年一月二十八日、長者町の一部、二、〇六四坪(六、八二三・二平方メートル)が、十一月に入ってからアメリカ軍病院(旧・松屋)と教会が解除された。のち、アメリカ軍教会はすぐにかわされたが、旧松屋は昭和五十一年十一月解体、教会跡は四十年二月まで丸井伊勢佐木町店が開店するまで空地としてそのままになっていた。結局ザキ一帯の完全解除は昭和三十五年まで、十五カ年の年月を要したのであった。

●交通量―こうして三十年代前半から伊勢佐木町は本格復興に入るのである。昭和三十年の調査によれば、一丁目から七丁目までの店は、伊勢佐木町通り全延長一、〇四八メートルに沿って、三八二店、外に百貨店三店でその明細は次のとおりであった。

一、二丁目 三六二店 七五店 百貨店 二軒 野沢屋、松屋

三丁目	七五店	四〇店	百貨店	一軒	松喜屋
四丁目	一二二店	六〇店			
五丁目	一九一店	七三店			
六丁目	一四八店	八五店			
七丁目	一五〇店	四九店			

またこのような伊勢佐木町通りに隣り合せた吉田町の同年十一月の交通量は次のようであった。(十一月二十四日、晴、午前十一時より二時間)

人 二、三四六八
 乗用車 三四〇台
 自転車 二九三台
 貨物自動車 六九台

またこの調査によれば、一日の中で最も人通りの多いのは、平日にあって夕刻五、六時であった。乗用車は昼間はおよそ二時間、約三〇〇〜四〇〇台を上下する数であるが、夜間に入ると少々減り、午後十一時前後娯楽街のひき時に、又一とき激しい自動車の流れがある。しかし月曜日はデパートの休日にあたるために交通量はかなり減る。

この交通量は野毛大通り、伊勢佐木町通りと変らないが、これは、この商店街が野毛・伊勢佐木商店街の通路にあたっていることを意味する。しかしこの交通量はこの商店街にあまり利益になっっていない。というのは、この町の片側は接収中で、片側は



昭和30年代の伊勢佐木町通く〈横浜市図書館提供〉

仮建築が多くて、商店街そのものは魅力に乏しく、又車道、歩道の区別なく、通行人は激しい自動車の流れを避けるように、野毛なり伊勢佐木町に急いでしまつていたのである。

●復興手はじめ——こうした状況のなかで、元町においてはニューモードのショッピングセンター、横浜駅西口には日本一の売上を誇る一大商店街が誕生していた。この激しい情勢のもとで、伊勢佐木町のかつてのイメージを築きあげてゆくことは、並大抵のことではなかった。伊勢佐木町の商店街状況は一丁目から四丁目までは、デパートを含む高級商店が軒を並べ、販売品も高級品が多く、近代的ビルが建築されている。五丁目から七丁目に至る商店街は、戦後の一時的な建築が多く、販売品も中級品、廉価品がよく売れている。全体的に、織物被服商が多く、それに飲食店が次いでいる。飲食店は純喫茶、社交喫茶、飲屋とに分けられているが、この地域の性格をあらわしている。

●トルコ風呂登場——こうした街並みは復興の一つの成果と見られる。さらにザキ周辺については昭和三十年の四月、飛行場の跡地若葉町には個室四をもつトルコ風呂が許可された。トルコ風呂は、パチンコブーム、ストリップ劇場の繁盛を見た昭和二十六年四月、東京の銀座に生れた東京温泉が始まりだが、本市は福岡、札幌に次ぐものであった。以来風俗営業指定地域である福富町、末吉町、若葉町、曙町にその姿を現わすことになる。

昭和三十年代はじめの頃のザキ周辺の例をいえば、末広町に小

規模なビルが建ちはじめ、羽衣町は吉田中学校以外はまだ本格的な復興が始まっていないかった。またこの地域の復興に一役買ったのは、洋画劇場の横浜東亜劇場で、野毛のマックアーサー劇場や国際劇場が閉館されて以来、この映画館や近隣の長者町の松竹劇場などとともに、市民娯楽の場となった。

そして、末広町の通りには、街娯が徘徊し、クラブが発生するなど、まだ戦後の名残りがあつた。

一方では、曙町、弥生町方面でも、復興にかける意欲は強いものがあつた。その一例

「伊勢佐木町本通りの方で、電柱が古くなったので捨てるという話を聞きつけ、それをもらい受けて通りに電柱をつけ、町を明るくしました。そして、中通り会を作ったのです。それから私たちが「伊勢佐木町中通り会」と名を改めたのです。今では、浜ッ子通りと呼んでいます」(第一中部有志座談会)

●埋地も復興二十七年四月区画整理(横浜特別都市計関外地区土地区画整理)が告示されるにあたって、埋地地区の中心部寿町や松影町の役員らが一致団結して、復興への道を拓き、努力を重ねてゆく契機となった。こうしたとき――伊勢佐木町の復興は、埋地方面にも大きな刺激となった。埋地地区は昭和二十八年に接収が解除された。

また地区内の長者町一丁目から四丁目まで、山吹、富士見、山田、千歳、三吉の九カ町は外埋地と呼ばれるが、この地域では三

十年十二月、土地所有者などによって「外埋地九カ町復興会」が結成され、復興への意欲を見せはじめた。

これに対して寿町、松影町などの埋地地区の中心部は、戦争中の強制疎開、さらに戦災がダブって、ここに居住していた人々は四散、残る者はほとんど居なかつたこともあつて、埋地防犯協議会はできたものの、組織だつた運動はむしろ不発に終つていた。

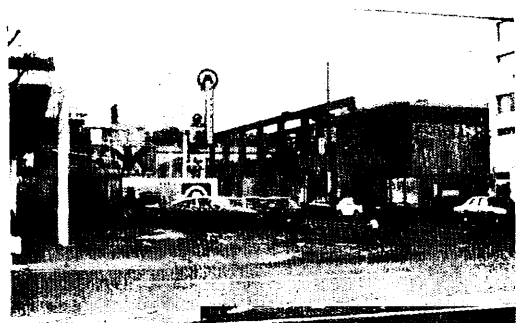
●ドヤ街発生――「埋地復興会というのは、吉田町の石田さんという紙屋さん、石井さんという人の他にも、解除になると同時に、区画整理委員というのを選出しました。

その人たちが復興のために働いてくれました。文化体育館だとか、花園橋の角の簡易裁判所だとかは、役所の方へ、整理委員の人達が方々説得して出来たんです」(埋地地区有志座談会)

埋地においては、こうした解除後の復興に、地元の人々が懸命のさなか、接収解除直後の土地には、一部の東洋人がこの跡地の一面を占有したのであつた。跡地には次々と彼等によって小屋が建てられ、港灣労働者を相手として食品や雑貨が売られた。

「私は昭和三十二年七月に、ここに初めて来ました。ドヤというようなのは、まだ二、三軒しかありませんでした。それから長者町一丁目近くまでできて、一九六軒ぐらいいになりました。どんな出来たというありさまでしたね」(同・座談会)

三十二年には、横浜公共職業安定所が桜木町から寿町に移転してきた。このことよつて、にわかに自由労働者の溜り場となつ



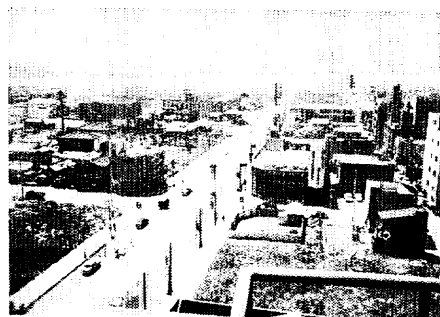
旧、職業安定所あと(寿町四丁目)



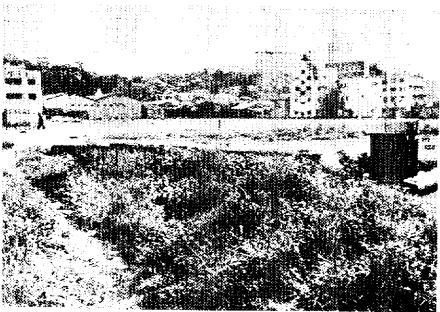
接収解除後の関外一帯——空き地が目立つ〈横浜市図書館提供〉

た。桜木町や野毛から自由労働者がここに集まるようになった。そしてこの地域には、これらの人々のための簡易な宿泊所が、次々建てられていった。いわゆる「ドヤ街」の発生であった。三吉、扇、寿、松影町にわたって、簡易宿泊所は三十四年に六四戸余、三十八年に八〇戸余、四十八年には八七戸と増えていった。八七戸のうち七五パーセントは外国人（東洋人）の経営によるものであった。

ぼつんと電柱が焼け残り、米軍に接収使用された建物だけが残った接収の区画整理は昭和三十二年度五五本の電柱の移転（七一万七、七六八円）と、日本飛行機株式会社の自動車工場ほか四棟二八万二、〇一五坪（九三万二、〇五九・五七平方メートル）の



昭和30年代はじめ頃のザキ周辺〈横浜松坂屋提供〉



接収解除直後の吉浜町（現、石川町駅前）



曙町にあった横浜東亜劇場（昭和34年）

移転（二、〇七八万円）から始まった。埋地地区は、ドヤ街となりつつも、復興がはじまってゆくのであった。

●清正公再び——一方、伊勢佐木町は、早い速度で高度成長期の波に乗った感があった。三十一年の伊勢佐木町（表通り）の店舗数は、各業種四〇一店舗を数えた。このうち最も多いのは、和洋服仕立の一四・四パーセント、洋品、小間物が一三・七パーセントで、飲食店がこれに次いだ、また野毛と対比をすれば、野毛では飲食店が最も多く二〇・九パーセントで、この比較で伊勢佐木町の特徴は、衣類の店が多いことがいえる。

こうして、伊勢佐木町が急速な伸びを見せつつあったが、それとともに隣り合せた地域もまた、盛り場的な雰囲気を見せはじめていた。なかでも長者町八丁目の清正公堂は、三十五年十月には本堂が再建、落慶式があげられた。これがあたかもシンボリックな存在となつて、いよいよ商店街の清正公街が、飲食店を主として繁盛してゆくのであった。

地区の繁盛をもたらすものに、飲食街はもとよりだが、映画館もまたそのための大きな要素である。この地区の映画館は館数一三、席（シート）数は七万七、九八〇席と野毛を抜いていた。

◎アーチ塔——一方、メイン通りの伊勢佐木町入口のアーチ塔は、二十八年に開港百年記念として造られ、アーケードが三十一年に建てられ、三十五年八月に伊勢佐木町一、二丁目商和会が結成された。三十六年六月からは、土、日、祝日に一時から二時

まで車両の通行禁止、いわゆる歩行者天国が実施された。そして水銀灯がずらん灯に変わった。そして、シンボルのアーチ塔は、三十九年には、東京オリンピックの聖火を迎えるために、新たにウエルカム・ゲートとして十月八日に建造された。ゲートの高さは二七メートル、ステンレスの柱、ピアノ線を多く使つて、風速六〇メートルにも耐え得るように設計されている。工事費は一、八二〇万円。夜ともなれば三色のネオンが点滅、街の夜空を彩り、商店街のムードをつくりあげた。長い間の接収により、復興の遅れた街に明るさをとり戻してくれた。

そして、中区内でもはじめての試みとして、四十三年には一、



伊勢佐木町商店街のアーチ塔



再建落慶式の清正公堂（神奈川新聞社提供）



伊勢佐木町商店街の店頭（昭和三十五年）（神奈川新聞社提供）

二丁目にカーラー舗装が施工された。

●強敵西口——しかし、こうした地元での懸命な繁栄策にもかかわらず、三十年代前半には、接収で復興が著しく遅れていたうえに、ダブルパンチを見舞われた。それは、横浜駅西口に高島屋が進出するという問題であった。県百貨店協会を作っていた野沢屋、松屋、松喜屋、横須賀のさいか屋、川崎の小美屋などで猛烈な進出反対運動が行われた。しかし結局は進出が決まり、その結果は伊勢佐木町商店街にとっては不利なものとなった。横浜高島屋は遂に三十四年十月一日に開店。これが契機となって、砂利置場であった西口周辺は急速にその姿を変えていった。三十六年十二月には横浜で最初の地下商店街が相鉄ビルに、翌年十一月には横浜西口民衆駅が誕生、駅ビル商店街、三十九年十二月にはダイヤモンド地下街と相次いで開業。さらに四十八年には相鉄ジョイナス、横浜三越の進出とつづき、この影響からか、遂に四十九年地元百貨店の老舗野沢屋、次いで松屋横浜支店も姿を消すことになった。

危機は既に三十年代から見られたが、これらの動静は、ザキにとって他の地域の変化というだけでは済まされない、ザキ自体の深刻な問題であった。

ザキ再生と、その活路を探るなかで、接収による復興の立ち遅れは、いかんとも仕方のないものであった。そして、それが故にその性格はもはや旧に復することはなかった。戦前、日本で有数

な興行街であった性格はなくなり、一挙に商店経営も他地方からの資本の流入で従来の老舗を圧迫した。しかし近隣地区の曙、弥生町方面には飲食、料理店、末吉、若葉町にも飲食店のほかバーなどが集中し、その上三軒の映画劇場ができ、新たな伊勢佐木町を背景とした個性的な街の性格の定着が見られるようになった。

そして関外地区の東西を貫く長者町六、七丁目は伊勢佐木町と合流し、にぎわいの拠点となった。一丁目から五丁目にかけては、自動車やモーターバイク等の関係業種が増加、一面では建物の高層化にともなう業務地域の状況が見られはじめた。八、九丁目では、若葉町、末吉町の入口として飲食店、映画劇場ができ、伊勢佐木町の延長線上のにぎわいを見ることになった。

一方、ザキの裏側として末広、羽衣、蓬萊町の方面は、一部末広町に飲食店を見るほかは国道十六号をはさんで、業務地域的な傾向が見られはじめた。

●埋地対策——昭和三十七年五月十一日、埋地地区に東京オリンピックの競技施設提供の一端をになって、不老町に横浜文化体育館が建設された。総面積八、〇四〇・五二平方メートル、収容人員固定席二、二四二席という本市最大の体育館であった。敷地の選定に困難もあったが、地元の協力が効果を上げ、ここに建設されたもので、この体育館はスポーツ界だけでなく、「文体」と通称され、市民に親しまれ活用されることになった。地域の商店にも若干の潤いをもたらすことになった。

そして、山田町には、日本住宅公団などによる住宅ビルが建設された。寿町には横浜社会福祉センターが建設されて、この地域の中心的な存在として、日雇労働者のためのオアシスとなった。

しかしこの頃の関外地区の顔は、中心商店街の華やかさとはうらはらに、埋地地区における部分的なスラム化や大岡川周辺の不法居住、それに沈船、トルコ風呂などの風俗営業増加など、社会相を如実に現わしていたのであった。

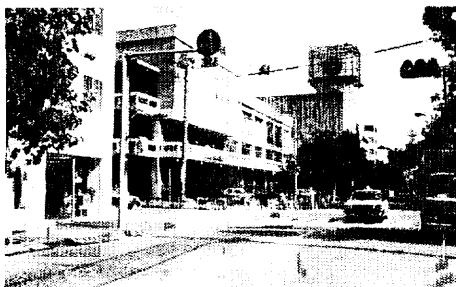
●トルコ街―その一つは、伊勢佐木町裏に、戦後の新商売、風俗営業のトルコ風呂や、バー・キャバレーなどが進出したことであつた。

トルコ風呂は、三十三年九月をはじめとして、三十七年から四十年にかけて弥生、曙、末吉に多く点在するようになったが、四十一年、福富町西通りを中心につきつぎと建設されてゆき、さらにこの町域には集中的に建設されていった。横浜市では、四十七年十二月十二日「横浜市トルコ風呂指導要綱」を施行、トルコ風呂対策協議会（建築、衛生各局、中区）をもつて、営業時間、個室内の照度（五〇ルクス以上）などを指導することになった。

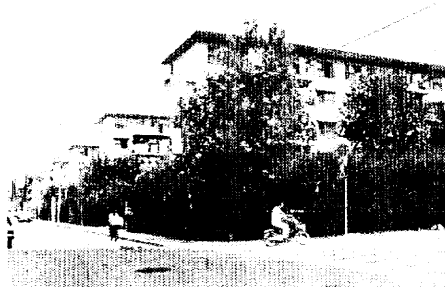
トルコ風呂でこの月までに区内で許可をうけたものは、総数四四店（浴室数は五八九）であつて、うち関外地区で三一店（四五一室）野毛地区一〇店（一一三室）関内地区三店（二五室）であつた。関外地区のうち福富町西通の一四店が最多で、曙町が六店



横浜文化体育館



県立勤労会館



山田町の住宅公団団地

続いていた。これが五十一年になると、西通は一七店となり、他町とも同様に増加傾向を示した。この頃ホステスは一店平均一八・九人、料金は平均四、五千円、高級和風トルコがその主流となつた。

このようなトルコ風呂が発生したのは、福富町西通、福富町東通、それに曙町、弥生町、末吉町にまたがっており、営業禁止除外区域に指定されたことがその原因となつた。これらの地区にはバー、キャバレー、スナックの進出が目立ち、かつての伊勢佐木町の裏通りとしての庶民娯楽の町のイメージをすっかり変えたのであつた。そしてこのことは、高度成長の一つのひずみともいえ

た。

トルコ風呂は、中区においては二十八年六月、野毛町に一店一六室が許可されたのがはじめてであつたが、年次的に見ると、二十八年から四十七年にかけて発生、特に福富町西通に最高の店数（室数）が発生してきた。このことは現在のトルコ街形成の原因となつた。この地域のトルコ街は、県内では川崎堀之内地区とともに、その数が多い。

●大岡川川岸——伊勢佐木町が再び不死鳥のように蘇生しようとしていたとき、その周辺、特に大岡川川岸はまだ暗く、「乱雑な戦後」をそのままにしていたのであつた。川岸には、木片やポール箱をめぐらした人のほかに、無許可の屋台八軒があつて、この屋台は、固定すれば建築物、車をつければ屋台として食品衛生

上にかかりがでてくる、といった法律的にも厄介な代物であつた。

また、このほかに問題とされたのは、第一に公共河岸である道路の不法占拠であつた。（『中区役所文書』より）

昭和四十四年の暮から四十五年の一月にかけて、末吉町一丁目の大岡川岸あたりでは、道路の不法占拠が行われ、そこに寝泊りをしてゐる者は八人から一〇人ぐらゐであつた。なかには大岡川に転落したり、凍死者がでてくる始末であつた。これに対して市では何度も撤去を求めたが、その都度戻つてくる始末。この人達を収容するのにも施設がない。生活保護法を適用して保護費を支給するのにも、その収入がつかめない実態であつた。

これらの川岸の住人は増加の傾向にあつて、多い時は五〇人近くにたり、そのうち愛死者一〇数人を数えている。市では、これらの人の立退きのあと、グリーンベルトを河岸に作り、花壇などを作り、場所によっては駐車場にするなどの計画を立てていたのであつた。

この後、さまざまな催告を行ったががちがあかず、四十八年三月には道路不法占有により市によつて強制的に取り壊わしたのであつた。

一方、日の出町付近の川べりには、四十五年二月、屋台は移動式十四軒（許可済）に加えパネル式の四軒に対して、車をつけて移動できるよう行政指導を行ったのであつた。この屋台は車がつ

けば、道路交通法上で取締りの対象となるからであった。

●明るさ―一方、寿地区においては簡易宿泊所に宿泊する人々もますます多くなっていった。四十三年には、家族を含めて七、五〇〇人をこえた。そのうち未成年者は約一、〇〇〇人、小、中学生は三五〇人で、宿泊者の大半は港湾労働者であった。

四十四年三月、この地域に「寿地区自治会」が結成され、「寿町の夜明け」と各新聞は報道した。この自治会の実践スローガンは、全住民の自治会参加への呼びかけのもとに、美化運動の徹底、児童公園設置、防火・防犯・交通安全思想の普及、夜間生活相談所、夜間診療所、集会所の開設、夜間銀行の開設、婦人学級の開設、子供会活動の強化、などであった。

その結果、野球部松影シャドース、住民勉強会、寿囲碁同好会、寿婦人学級などが結成され、子供新聞「季節」が発刊、さらに市有地内に寿児童公園、松影子どもの遊び場が設置され、福祉会館内には夜間銀行も設置された。これらはいずれも好評であったが、夜間銀行では早くも口座が一、一八五。一日の利用者は五、六〇人に及んで住民に喜ばれた。町に明るさがもどってきた。

自治会のある役員は次のようにいう。

「いま私どものやらねばならないことは、既に、考えることではなく実践のみである。しかし、その実践の足場をドヤ街における話し合いに置く。その話し合いは、まず聞くことが有効であると

し、寿町子供の集い、寿婦人学級を核として、寿町に集まる数千人の人たちの対話を求める。そうした対話は、ドヤ街住民の不満や要求を一方的に吸収する吸取紙としての機能を果してはならない。積極的にドヤの外に出る方法を取り、意識を外に向けて、それぞれの場合を広くさせることこそ、実践の実践たる所以である」

しかしながら、経済不況は微妙に、しかも直接に生活をおびやかすことになった。

昭和四十九年の場合、本市でも港湾関係業務が極度に不振となった。求人が少なく、さらに求人側は資金繰りが困難なため、日雇よりも賃金あと払いの常備（一カ月以上常備）を求めている。

しかし、人々はその毎日の賃金を必要とした。仕事にあぶれた人々は区役所の福祉事務所に、「法外援護」を求めて早朝から数人〇人が並んだ。さらにその年末年始にかけては、福祉事務所では法外援護のパン券や宿泊券の交付を行い、一方では安定雇用のための支度金貸与制度を創設したのであった。

しかし、こうした経済不況によって大きく左右される寿地区の人々の生活は、今後行政の大はばな施策を必要とされている。

●大通り公園・誕生―昭和四十六年八月、地元の蓬萊、長者町三、四、五丁目、羽衣、万代、不老の各町内会において、大通公園の建設計画の説明会が開催された。たびたびの話し合いの結果、地下鉄駅と公園整備をセットで実現することとして、工事が



子鳩会鼓笛隊―第二十一回国際仮装行列に参加した（佐藤寛治氏提供）

開始された。各種の運送が行われず、運河の機能を失った派大岡川を埋立て、地下鉄一号線を通すという構想は、横浜の市街地整備の上だけでなく、極めて画期的なことであった。

五十三年に竣工するまで、関連の工事が多く、それに地元から多くの要望が出された。このため橋一本の撤去工事にも約一カ年を必要とする始末であった。これは一例だが、震災復興で鉄橋にかけ替えられた新吉田川上の権三橋の撤去の場合は、昭和四十七年五月九日から翌年三月三十一日までを工期としてたが、地元の伊勢佐木警察、交通局第一工事事務所、銭高組万代町作業所の三者連名によって「地下鉄万代町工事のため、万止むを得ず中区万代町一丁目先、吉田川沿道路（蓬萊橋ノ権三橋）の車輛通行禁止を工事期間中実施することになりましたので、不本意ながら沿道の方々のご協力をお願い申し上げます」といったチラシを配布して工事を始めたのである。

六月十四日になって、埋地連合町内会（佐藤吉蔵会長）から「権三橋撤去に関する反対」の陳情が出された。

地元では、権三橋の撤去は地下鉄工事のため止むを得ないとしながらも、一方的な通交禁止は納得できないというものであった。市は再び説明会を催し、地元市議が説得にあたり、ようやく七月になって地元の了承をうけたのであった。

実に、権三橋の通交車輛は、工事前では往復三、二四九台（午前七時より午後六時まで）に達し、陳情当時には、車の交通量も



埋立前の富士見川

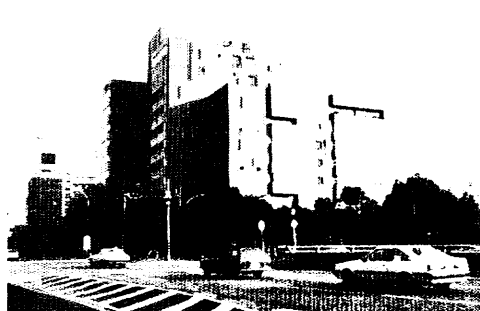


埋立後出来た富士見川公園

はるかにそれを上まわっていたからで、通交禁止は地元の商業活動を阻害することになったからである。

大通り公園の計画と実施は、この関外地区のいくつかの地点を大はばに変えていった。

この派大岡川を埋め、地下には地下鉄、地上を公園ということ、運河機能の停止というマイナス面ではなく、新しい都市の施設を生み出すことになった。この一つが、南区境の富士見川を埋め立て、今まで悪臭を放った運河が、四十八年十月に富士見川公園として再生した。園内には七七〇本の樹木、市電の敷石五〇〇枚をもって補修した。中区側からは、伊勢佐木町七丁目、末吉町四



横浜市教育文化センター

丁目、南区側からは、南吉田町など五カ町の共同管理の珍しい公園となった。

また、地下鉄の運輸指令室と、横浜市教職員の研修所の設置の必要から、万代町には四十九年七月、横浜市教育文化センターが落成した。はじめの計画よりも内容を充実して、市民ギャラリー、消費者センター、視聴覚センター、広報センター、教育文化ホールなどを併設、地上一階地下二階のビルが誕生した。工事費は二九億五千万円。

開館式の記念行事は「バロック音楽の夕べ」を皮切りに、現代芸術のシンポジウム、演劇など多彩であった。

●労働福祉会館——一方簡易宿泊街の寿地区については、四十五年、市はスラム対策研究会をもって調査、研究し、その結論として、「寿町に総合労働福祉会館を建設し、地区住民の生活環境の整備と福祉の向上及び寿地区の再開発と環境浄化をはかり、また寿町及びその周辺の青空市場の解消と近代的職業紹介を確立すること」になった。

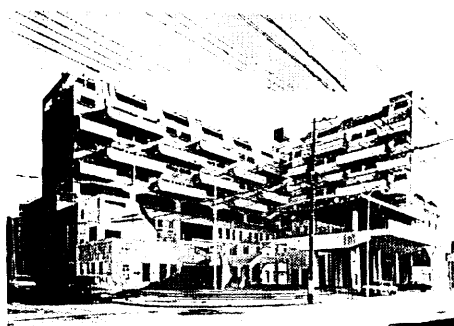
結論が出されてから四カ年、四十九年九月に「寿町労働福祉会館」がオープンした。地上九階、地下一階、一―三階（延面積九、六三二・三二平方メートル）が職業紹介相談、浴場、食堂、集会所、夜間銀行などで、四階以上が市営二種住宅八〇戸という建物として建設された。寿地区にとっても最大級の建物であるばかりでなく、福祉センターとして登場した。そして、簡易宿泊所が鉄

筋耐火構造化への様相を見せはじめてきた。

●交通量増加——伊勢佐木町の通りは、一丁目から七丁目まで約一・三キロメートル、幅員一五・三メートル（車道部分七・三メートル）である。四十五年六月頃の交通量は、各丁目によって異なっているが、最高は松屋前で日中一時間平均二、二〇〇人、車両は四六〇台とかなり多かったので、所轄の伊勢佐木警察では、伊勢佐木町通り一丁目から七丁目にわたり一方通行、一時から二一時まで、うち一、〇九八メートルを駐車禁止としたのであった。

さらに、昭和三十八年以来、署では野沢屋前で自動車排気ガスの調査を行ったが、一酸化炭素の環境基準は八時間平均二〇PPM、二四時間平均一〇PPMと比較すると、測定十三日の間のうち、合格は四日、不合格は六日、土、日曜日はすべて不合格。平日の不合格率六〇パーセントであって「市内に他の例はない」《中区役所文書》という状況であった。

昭和四十八年十二月五日、羽衣、末広町内会（池田忠雄会長）は中区長に対して陳情書を提出した。これが少し変わった陳情であった。「町内空地の不法投棄雑物の処理について」というもので、この陳情書によれば、「該当ヶ所が不心得者のために益々廃棄物が激増して実に驚くほど山積しております」そしてこの廃棄物の中に巷の浮浪者が寝床を作り、ふとんまで敷いて夜寝ている様子なので、万一中でたばこなどを喫った場合は火災事故が心配



寿労働福祉会館

され、風の吹く夜など心配で睡眠することができない。是非早くきれいにしたいというのが趣旨であった。場所は羽衣町三丁目、吉田中学の裏にあたっていた。

市では、ここ以外にも不法に投棄している空地が多いので、この清掃にやっきとなっているところであった。すでに、この区域、末広町三丁目を含めて狭い区域内に九カ所、うち四カ所は清掃を終っても、まだ残る五カ所は不法にゴミが捨てられるという始末であった。この不法投棄物というのは、建築に際して取り壊した建物の古材、壁のセメントの破片、古トタンなど雑多なものであった。

このことは、数か月のうちに清掃されたが、都心が空地になっていることや、また空地にこうした廃材が棄てられることも、いわばこの頃の世相であり、高度成長期の経済のひずみを、そして関係者のモラルの低下を示すものであった。

(3) 伊勢佐木町百年祭

●ザキは祭り——昭和五十年は、丁度伊勢佐木町の発祥百年であった。地元協同組合伊勢佐木町一、二丁目商和会と、協同組合伊勢佐木町商店街とが主催して「伊勢佐木町誕生百年記念祭」が九月二十七日から一五日間にわたって盛大に催された。町をあげて行われたこの祭は、伊勢佐木町の通りを連日人であふれさせた。戦後市内における祭のうちでは最大の規模であった。この行事

は、ザキ再生への出発点となった。新設されたネオンアーチは一段と光彩を放った。

盛況のうちに百年祭が終った伊勢佐木町は、翌年四月、余勢をかるように、吉田新田（現、伊勢佐木町通りなど周辺）開拓者の吉田勘兵衛にちなみ、第一回の「勘兵衛まつり」が行われた。

伊勢佐木町のほか、吉田町、福富町、長者町、羽衣町、末吉町など二一カ町の主催であった。マスコミは関外の『生みの親』をしのぶ「勘兵衛まつり」として、一斉に報道した。

「郷土ヨコハマのまつりを生む伊勢佐木町商店街、商売っ気出さず「住民による住民のための」で成功、飛び入り続々、踊りのウズ」『日経新聞』昭五十一・五・七と大活字で見出しがついた。

●大通り公園——五十年の一月、伊勢佐木警察署の庁舎が完成、業務を開始した。地上五階、地下一階のこの建物（三、二〇〇平方メートル、工事費三億八、四五〇万円）は県下一の警察署となった。

次いで、かねてから狭かった中消防署が、警察に隣り合せて五十二年七月に完成（面積二、四九七・九八平方メートル）して、今までの日本大通出張所（昭和二年建築）から移転してきた。

この二つの公共機関の前側、かつてのどぶ臭い富士見川が、五十二年には大通り公園として誕生した。このことは市にとって画期的なことであった。

この公園は、四十五年から既に計画されていて、『横浜市大通



伊勢佐木町誕生百年記念祭〈伊勢佐木町1，2丁目商和会提供〉



勘兵衛まつり（第一回）〈伊勢佐木町1，2丁目商和会提供〉

り公園および周辺地区開発基本構想』（横浜市）が策定され、これに基づいて全市的なスケールでの「みどりの軸線」を形成し、横浜の新しい顔となる、内陸都心開発の手だてとして、都心にみどりを回復、市民に憩の場を提供し、そして災害時の避難地にもするなど、多目的使用の公園とするものとし、さらに公園の周辺地域の開発の手だてともすることを目的としていた。

はじめに山吹橋から阪東橋間の延一・七キロが完成開園、ついで、水の広場、石の広場が五十三年九月にはすぐ開園した。この開園式では国際バザール、農業展、コンサートなど多彩な催しものが行われた。

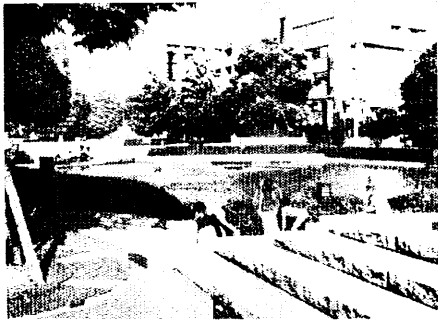
●地下鉄とマリナード——つづいてこのあたりの大きな変化は、



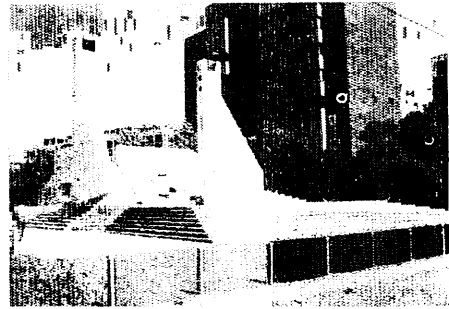
造成中の大通公園

横浜市営高速鉄道（地下鉄）の開通であった四十七年十一月、伊勢佐木町・上大岡五・二キロメートルが開通したが、地区内では、駅名をどうするかもめたすえ、「伊勢佐木長者町駅」と決った。五十一年九月四日地下鉄は、両端から延長されて、横浜駅まで、片や上永谷（港南区）までとなったが、この敷設は横浜始まって以来のことであった。その一番電車で一番乗りをした通勤客や学生数人が、当時世間に騒がれたものであった。

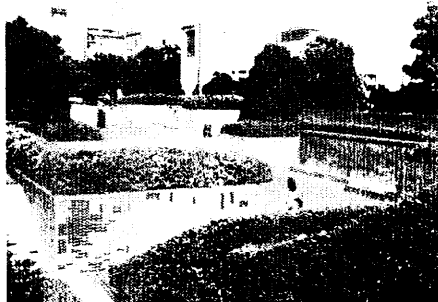
一方では、山下・長津田線の道路の開通をひかえ、伊勢佐木町と馬車道の中間地点の地下に、国鉄と地下鉄の関内駅、関内と関外を一体化する目的で、横浜中央地下街（マリナード地下街）が五十二年十月二十九日に完成した。都心部でただ一つの地下街となった。出入口一、その一つの地下広場には人工の滝を造り、自然に光を取り入れる構造とし、世界の時刻表を示す陶製の地図などが設けられた。



—水の広場



大通公園風景—石の広場



公園内の地下鉄コンコース



—石の広場につづく植込み



—森の広場

地上には山下・長津田線の道路の一部が開通した。桜木町のゴールデンセンター前から扇町交差点までの一、二〇〇メートルの道路で、工事費は実に一〇六億三、四〇〇万円であった。

そして地下街の上には、かねの橋を復元、歩行者広場を広くとり、バス、タクシー待合広場も設けた。これは「吉田橋スクウェア」というもので、五十三年三月に完成した。

こうした一連の都市整備は、隣接商店街の振興がその目的の一つであった。

●太陽よみがえる―戦前、伊勢佐木町は横浜を代表する、日本有数の商店街で、一日最高三〇万人の出入を誇ったのであったが、戦後は戦災、接収そして横浜駅西口の発展に伴って人出はやつと一五万人と、半分に落ち込んだ。こうした伊勢佐木町を復興させようと、地元では伊勢佐木町一、二丁目商店街振興組合街づくり委員会（松信隆也委員長）が組織され、ショッピング・モール化が計画されたのである。「都市を車から人間に解放する第一の試み」（伊勢佐木町二丁目 松信泰輔氏談）というのがその目的であった。

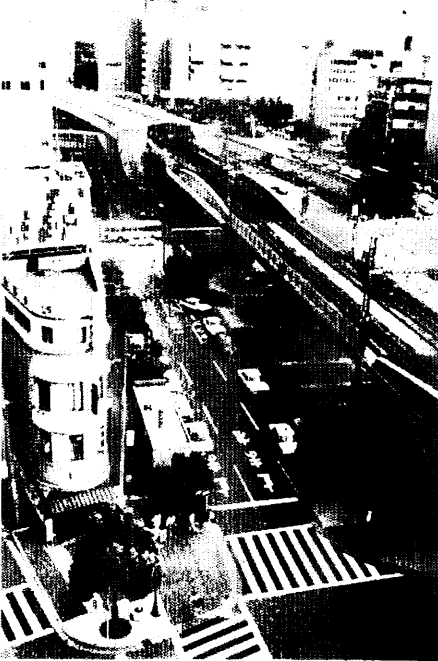
ショッピング・モールとは、樹木のある買物公園という意味で、道幅一四・五メートル、延長四〇〇メートルの、一、二丁目から車を締め出し、電柱を抜いて樹齢二百年のサルスベリをはじめめとして、ケヤキ、コブシ等七〇本の樹木が植えられた。さらにアーケードを取り除いて、陽の光を充満させた。道路一杯には数



吉田橋スクウェア



マリナード商店街を歩く



関内駅とスクウェアの一部



同上

十色のレンガタイルを敷きつめ、しゃれた街路燈や電話ボックス、彫刻、時計塔が配置された。こうしてくつろいだ雰囲気生まれ変わった一、二丁目が、五十三年十一月に市民の前にその姿を現わした。

モール化されて以来、人出は以前にくらべて、平日で二〇から三〇パーセント。土、日曜、祝日ともなると約五〇パーセントの増加で約六万四、〇〇〇人の人出となった。「通過地から目的地になりました。イセブラが復活したのです」(商和会関係者談)

たしかに、売上高も一〇パーセントから一五パーセントと伸びたが、当初目標の二〇パーセント増には足りなかった。五十四年六月の商業統計調査によると、県下の繁華街ベスト一〇の中で伊勢佐木町一、二丁目は四位で、横浜駅西口、横須賀中央、小田原駅中央に続く販売高を示している。三年前の調査結果と比べると、伸び率は低い。その原因は、大型店の不振によるもので、今後反省すべき点とされた。

ショッピング・モールが完成して以来一年間に、一一〇団体、三、三〇〇人の見学者が伊勢佐木町を訪れている。その中には、アメリカや西ドイツの見学者もあり、国際的な反響を呼んだ。そして、年毎に来訪の人々が多くなり、この間、店舗改造も各店毎に行われていった。こうして伊勢佐木町の新しいイメージが作られていった。

●消えた戦後――昭和五十五年八月、伊勢佐木町四丁目の酒場、



モール化前、アーケードが目立つ



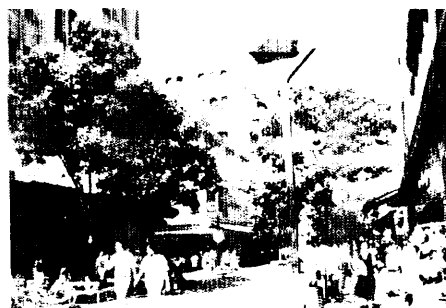
モール化前の伊勢佐木町



伊勢佐木町二丁目のモール街のアーチ



モール化が終った伊勢佐木町



同上

根岸家が閉店した。この店は終戦直後飛行場に接収された土地に隣り合せた一角にぼつんと立った。二十年に開店、米兵が出入し二四時間のオールナイト営業をつづけてきたもので、戦後横浜名物の一つであった。黒沢明監督の作品「天国と地獄」の舞台にもなった。しばしばジャーナリストの目に止り新聞種となったが閉店に際しては、「ハマの戦後」また消える。国際酒場「根岸家」が閉店」『神奈川新聞』昭五十五・八・十六」と報じられた。

翌五十六年五月には、伊勢佐木町二丁目横浜銀行伊勢佐木町支店前から宮川橋に通ずる通称福富町通りには、ガス灯をデザインした水銀灯三七基が設置され、歩道には植込みの整備が行われた。工事費八百万円であったが、整備の背景には、この地域に出没するバイラー（客引き）や暴力バーの出現を意識してとのこと、その効果はてきめん、バイラーは姿を消したという。

こうしたことも、五十四年十一月地元商店によつての福富町通り会が結成され、明るい町づくりに努めた結果であった。新聞は次のように書いた。

「安心して歩くことができ、楽しく遊べる町づくりを目指したい。福富町通りだけでなく、交差する路地にも明るい町づくりの輪を広げてゆくと町の人は語っていた」『神奈川新聞』昭五十六・五・十六

●コンサート——こうした商店会を中心とする整備が進むなかで一方、五十六年八月大通公園石の広場で、道しるべコンサート、

トランザムコンサートが開かれ、身体障害者の作業所の作品、陶器やレザークラフト、手芸などの即売会も行われた。そして九月には横浜出身の世界的銅版画家長谷川潔制作の像が大通り公園内に設置された。これは横浜に美術館ができるまでの設置とはいえ、こうしてさまざまに大通り公園は市民のための公園として活用されていった。

また、市庁舎のわきに、港町旧魚市場をしのぶ碑がこの年十二月に建てられた。

●埋地では——こうした状況のなかに、埋地では寿生活館（寿町三丁目）が五十五年十二月に再開された。これは四十九年第一次オイルショックの不況によつて、港湾労働者に対し、四十九年十月から五十年の十二月迄を期限として、便宜的な一時的な宿泊を認めたものだったが、明渡し完了に伴う再開であった。

一方では、五十七年一月寿町の旧職業安定所の建物跡が、特殊技能養成訓練所に衣替えしたのであった。ここは身体障害者の通所による授産所と職業訓練施設を兼ねたもので、ここには社会福祉法人横浜ひかりセンター、希望更正会により運営されることになった。

さらに一方、吉浜町の石川町駅前は一帯の空地であり、駅裏の掖済会病院の立退きの跡地、一万一、一九〇平方メートルに、石川プラザと称して地上一九階建のビル建設の計画が持ち上っていた。そのなかには、一階から五階には大手スーパーのダイエーが



福富町の通り（福富町仲通）



福富町の夜景

進出することになっていた。これに対して、石川町、山手一帯の商店は、売上げにひびくことなどを理由にこの進出に反対、「ダイエー石川町店進出反対山手地区協議会」が市長、市会議長に陳情するという騒ぎであった。結局は建築されず、代って五十七年一月にビクター（一般客）専用のテニスコート一〇面が造成された。面積一万九〇〇平方メートルで、一八〇台の駐車場も併設された。

●三、四丁目モル化——また、この年の四月、伊勢佐木町一、二丁目地区商店街振興会では、街づくり協定を決定した。その内容は、新築の場合には一・五メートル、建物の壁面線を後退し、人々の通行を便利にして、その上二階には自由道路（オーブ・コリドー）を設けて「天空率」を確保し、「買物をしながら青空を楽しむ」という構想であった。これは伊勢佐木町としては画期的な構想で、将来に向けて指標が決められたのであった。

五十七年三月現在のサキの出は一日平均五万人、日曜・祝祭日は一〇万人を越した。

五十七年十一月、一〇カ月の工期をもって、三・四丁目のモル化が完成した。樹木七〇本、彫刻一点、シンボル塔としてチャームがしつらえられた。一丁目から四丁目まで三一五メートルであり、一、二丁目のモル四〇〇メートルと合せて延長七一五メートルとなった。

オーブニングに出席した細郷市長は「ここにみどりがあり、太



3丁目モールの入口

陽がある」と挨拶した。式は盛大に行われた。

●現在の各町——現在の関外地域を仮に分ければ、東西は大通り公園、南北は長者町の通りによって四つの地域に分けられる。これをこまかく町名でいえば、①北部地域は伊勢佐木町一・二丁目、吉田町、福富町の各町に末広、羽衣、蓬萊の各町と、長者町五丁目から九丁目の一帯。②東部地域は埋地地区の万代、不老、翁、扇、寿、松影、吉浜の各町、それに長者町一ノ四丁目。③南部地域は山吹、富士見、山田、千歳、三吉の各町と南区の永楽町、真金町、万世町となる。④西部地域は伊勢佐木町三ノ七丁目の南区境までと、末吉、若葉、曙、弥生の各町、さらに大通り公園の



伊勢佐木町三、四丁目のモル

南側。

関外地区は、すべて旧吉田新田であり、旧八丁細^{なほ}手の長者町が、奇しくも現状の地域区分の境となっている。その概略は次のようである。

① 北部地域

この地区の中心伊勢佐木町は吉田橋からはじまる。高速道路の建設に伴ってかけ替えられたもので、我が国最初の「鉄(かね)の橋」のイメージを保存するため無橋脚の橋梁型式を採った、ヨコハマらしい景観を見せている。開港百年記念の「吉田橋関門跡」の碑も残されている。

この吉田橋下の地下街(通称マリナード地下街)は現在三八の店舗があり、馬車道と伊勢佐木町とを結ぶ連絡路としてだけでなく、吉田橋スクウェアとともに市民のショッピング、散策など憩いの場となっている。道路上のみどりなど、都市のなかのオアシスの感さえある。

● 伊勢佐木町一・二丁目 ― 吉田橋からすぐが伊勢佐木町通りで、高いタワー型のアーチが入口となっている。この地域唯一つのデパート横浜松坂屋を中心として店舗がつづいている。

現在の商店街は、土、日曜日にはことのほか人出が多く、横浜における商店街の老舗の貫録を示す。人出は、婦人や若者の姿が目立ち、これらの人々には「ザキ」の名もすたれず、まさに「イセブラ」を楽しむかのような風情がある。各店にはそれぞれの工

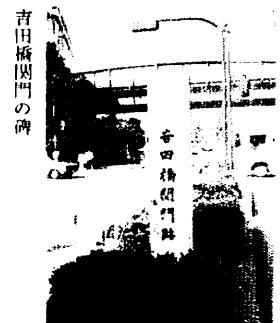
夫された店構えに特徴があつて、ザキのファンは相変らず多い。伊勢佐木町一、二丁目のショッピング・モールは自然の樹木と店舗が溶け合い、他の商店街にはない良い自然環境をつくり出している。街路には赤煉瓦の歩道と彫刻、レリーフなどが景観を添えている。

一丁目には横浜松坂屋の本館、西館(旧・松屋)と第一伊勢ビルが戦災に残り、かつてのザキのイメージの建物として残っている。伊勢佐木町共同ビル、有隣堂本店、大丸百貨店伊勢佐木町支店、横浜銀行伊勢佐木町支店があり、二丁目には、三井銀行伊勢佐木町支店などのほか老舗が軒並みである。

これらの商店の組織として協同組合伊勢佐木町一・二丁目商和会(昭和三十五年八月結成)があり、一丁目五〇店、二丁目五九店、計一〇九店が加盟し、商店街の興隆に力を尽している。

● 吉田町 ― 吉田町は、伊勢佐木町一丁目から都橋までの通りを中心とした三角形の町だが、吉田町一丁目共同ビル(四階建)の三階以上がアパート住宅になっているほかは、全町が店舗である。このビルは昭和三十二年に建設され、この町でのビルの建設のはしりであった。現在、この町には旧都南銀行の名をとった、都南ビル(五階建)、齊藤ビル(六階建)、第一生命ビル(七階建)などの四階以上の建物が狭い町域に十一棟も見られ、高層化が進んでいる。

いま伊勢佐木町と野毛町の間立地するこの町は、両商店街



吉田橋関門の碑



伊勢佐木町商店街入口（昭和59年）

の通過地として、さほどの活気は見られないが、固定客を引きつけての堅実な営業がなされている。商店会は、吉田町名店会（会員四九店）が結成されている。町には静岡相互銀行横浜支店がある。都橋脇の清水建設株式会社横浜支店の地は、開港の頃から横浜造成に尽した旧清水組の本拠地であった。現在、町の北側の半地下を高速道路の横羽線が走っているが、ここには町に潤いを与えるための植栽がなされ、町の雰囲気を保つ配慮がされている。

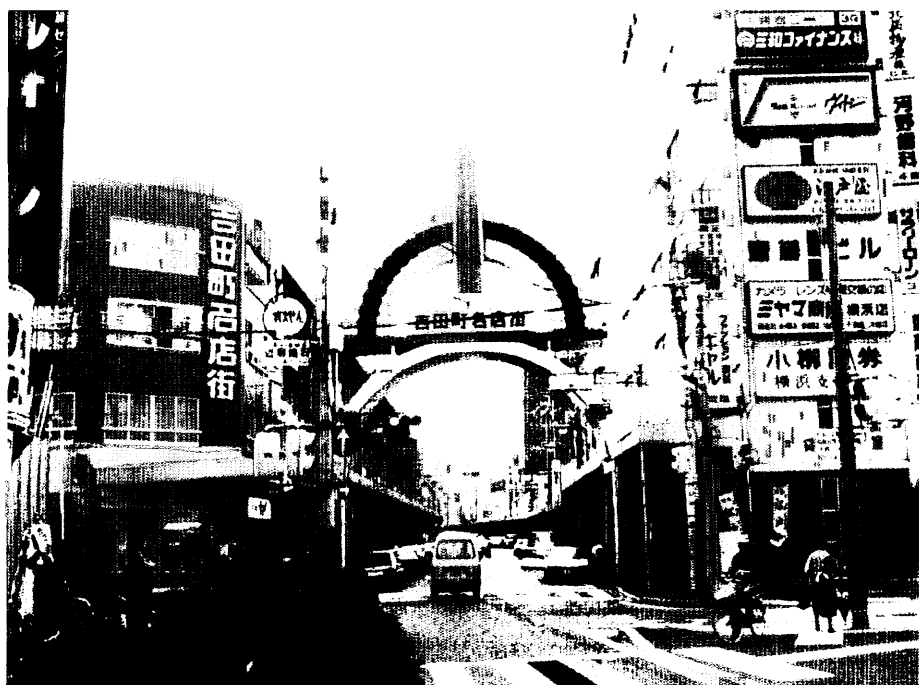
●福富三カ町——福富町東通、福富町仲通、福富町西通の三カ町は、伊勢佐木町商店街北側の裏手に当たっているが、この三つの町はほぼ同一の地域といつてよい。特殊浴場のトルコ風呂が多く、福富町仲通を除き五十八年度現在二四軒が営業の認可を得ている。風俗営業のキャバレーや九店バーも三八店がここに集中し、区内はもとより市内でも最も多い所である。トルコ風呂が多いのは西通で、バーやキャバレーは仲通、レストランなど普通商店は東通と大まかに分けることができる。夜ともなればネオンの輝きに彩られて、ことのほか派手やかである。

仲通には、福富日用品市場、一階を店舗とする日本住宅公団福富町アパートのほか、神奈川朝鮮信用組合、有隣堂外商センターがあり、ここはすべて高層化となっていて、バー、スナック、キャバレー、飲食店が並んでいる。仲通と東通の境の道は、長者町八丁目の清正公街に接している。

西通は、大岡川沿いで都橋と宮川橋によって野毛町、宮川町に



大正期の吉田町通り



現在の吉田町通り（名店街）

つづいているが、宮川橋は通りの入口となっている。この都橋わきには福富町の西公園があって、豊かなみどりを見せている。この町には一階を店舗とする福富町西通アパート(五階建)、福富町西通第二公団アパート(五階建)などのアパートがあるが、ここにはバー、スナックのほかトルコ風呂が多い。都橋からの西通の夜景は、五色のネオンが川面に映えて美しい。

●末広・羽衣・蓬萊各町―これに対する伊勢佐木町の裏通りの町は、末広町で、二丁目には伊勢佐木町一、二丁目会館があった、協同組合伊勢佐木町一・二丁目商和会の事務所がある。狭い町域には亀楽ビル事務所、スナック、バー、それに公共駐車場もある。

羽衣町は大通りを中心にした町域で、もとの羽衣橋交差点からはじまる。一丁目には平和相互銀行横浜支店、住友銀行横浜支店、日興証券横浜支店、東京瓦斯横浜支社、同横浜統合展示場、そして大きなパチンコ店もある。二丁目は磯島神社の所在地で、朱の鳥居はビルと違和感があるが、神社はこの界わいの象徴的な存在に交りない。その隣地、給油所の前は群馬銀行横浜支店、駐車場をへだて洋画の関内アカデミー劇場、アサヒビル、ヤマギョ電気店があり、戦後復興にいち早く建物をたてた鮑ビルなどがある。三丁目は、吉田中学校の所在地で、戦災を免かれたこの学校も、老朽化のため昭和五十八年二月に改築された。この吉田中学校の前は長者町駐車場(西本願寺別院の跡地)がビルをなしている



大岡川に沿った福富町西通



福富町西公園

る。

蓬萊町は羽衣町の地つづきで、大通り公園に面している。町域は有料駐車場が多い。二丁目に横浜商信用組合本店があるほか、業務用のビルが多い。ビルのなかには県警蓬萊町宿舎がある。

②東部地域

この地区は、いわゆる埋地七カ町の地域である。さらにこの地域を大まかに分けると、扇町の中央を貫く道路を境に、大通り公園側の翁、不老、万代の各町と、反対側の中村川寄りの寿、松影、吉浜の各町となり、この二つの地域は少しばかり状況が違っている。前者は公共施設の多い地区で、後者は簡易宿泊所が大きく占めている。さらに車橋から大通公園に通ずる長者町一丁目か



吉田中学校



磯島神社あたり―ビルのはざまに朱の鳥居

ら四丁目は、いわばこの地区の入口に当たっていて、交通の要所である。

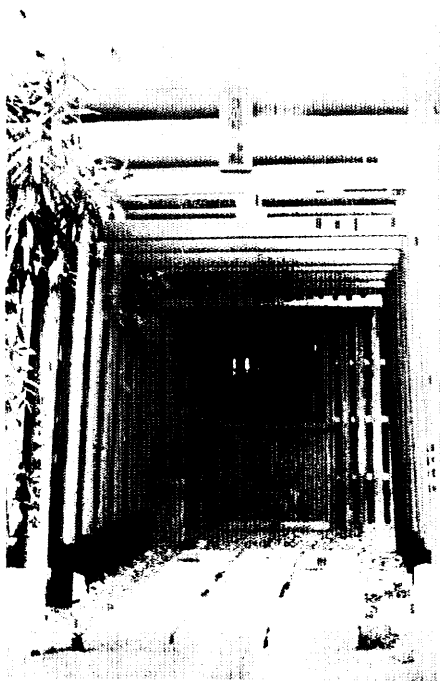
●埋地各町―この地域の各町については、万代町の場合は大通公園に沿っていて、一丁目関内駅南口に向って、横浜市教育文化センターがある。赤煉瓦の建物十一階建はこのあたりに偉容を誇っている。ここは消費者センター、広報センター、市民ギャラリー、教育文化ホールなどの複合の文化施設である。市民の利用も多く、年間五二万八、九一五人（五十七年度）にのぼっている。さらに、最上部十一階には、市交通局の電車部運輸指令所、電力指令所等となっている。

次に三丁目には、テニスコートを持つ日ノ出川公園がある。ここは旧日ノ出川と派大岡川（現大通り公園）の合流点にあたっていて、市街地の中でもみどり豊かである。不老町は、万代町とともに関内駅南口の入口に当り、横浜公園から市庁舎わき旧港橋を経るの主要道路をもつ、交通頻繁な所であるが、文化体育館の空間がこれを補うように地区の一角を占めている。文化体育館は市内最大のスポーツの殿堂としてだけでなく、各種の行事で市民に親しまれている。年間利用者四六万八、六九九人（五十七年度）である。隣りに平沼記念レストハウスもある。長者町の境には、三棟の公団長者町団地があつて、いずれも五階建、集会所が付属されている。空間をひろげた構内には八二世帯が住む。この町にはまた駐車場が多く、中古車展示場もある。

翁町もまた、万代町とともに関内駅南口に当たっている。地区には小規模の有料駐車場が比較的多く、ビルの谷間に組み込まれているような空間を示す。この町には市立横浜工業高等学校があり、勤労青少年の学習の場となっていて、文化体育館とともに、夜間はあたりをにぎわす。さらに隣接する青少年相談センターには、埋地地区青少年の家（集会所）が併設されていて、青少年はもとより埋地連合町内会地区の人々によつて、各種の集會に利用されている。かたわらには、関外地区としては珍らしく小さな祠がある。それが豊川稻荷社である。ここには地区の人々の信仰も厚い。いま、これが埋地地区の昔をしのべるもののひとつである。



横浜工業高等学校―廃校となった寿小学校の位置



埋地の豊川稻荷社（青少年の家敷地内）

豊川稲荷社は、一説には明治七年頃の創建といわれ、その年代を示す手洗鉢、燈籠などがあったというが、現存していない。三河国の侍、梅村与八郎が明治維新に際して、三州豊川稲荷の分霊を奉じ、横浜市扇町三丁目七番地上蔵造の社殿を建て、横浜豊川稲荷神社としてお祭りしたもので、毎月七日と二十二日が縁日で、出店は扇町より翁町、不老町、権三橋方面におよぶ盛大なものであった。大正八年埋地の大火により焼失したが、町民の意思によって扇町二丁目花園橋通りに復旧し、扇町豊川稲荷社と称し、石井福治、川村精次郎、村瀬定吉、梅村賢三郎らが祭事を行った。

そして太平洋戦争当時は、出征兵士の送別ににぎわいをみせたが、戦災によって再び焼失、御神体は一時、日枝神社に遷座、三十八年佐藤吉蔵らによって現在の地に祭られ、埋地豊川稲荷社として再建された。

扇町は、旧花園橋のあった花園橋交差点からで、角地には扇町公園がある。ここは『夢を喰ふ人』などの作品で知られる作家松永延造の生家があったところである。この町の二、三丁目には駐車場、給油所、それにマツダオート、神奈川トヨタなどの大手自動車関係会社が多い。

吉浜町は、中村川と首都高速道路との角地であって、町の中央は国鉄根岸線石川町駅によって分断されている。山下町より三角状の土地は、古くは横浜製鉄所跡地、昭和五十五年まで横浜掖済

会病院などがあったが、いまは首都高速のランプとして計画されている。駅の改札口のまわりには商店が多く、亀の橋通りや旧吉浜橋通り、松影町と接する側にはビルが並んで、駅前の中央部は市有地で空地となっている。この利用については、まだ決まっていない。

松影町は亀ノ橋から翁橋にいたる中村川沿いの町で、川に沿って松影町公団住宅、一、二丁目には各企業、ホテルなどが並び、川に沿って企業が点在し、その間を三、四階建の簡易宿泊所が四十数棟（五十七年十月現在）が一带を占めている。

寿町の一丁目は、扇町公園の真向いで、首都高速道路わきには横浜家庭裁判所、県立勤労会館、神奈川県交通共済ビルなどがあり、二丁目には日本バプテスト横浜教会、寿共同保育園があり、建設、港湾関係の会社が多い。三丁目は神奈川県住宅供給公社寿町共同住宅（五階建）、寿町公園、市寿生活館、ことぶき保育園があり、このあたりを中心として簡易宿泊所が多い。四丁目には神奈川県匡済会、中区肢体福祉協会、寿身障友の会、寿町保育園などが一つのビルに入っていて勤労者の福祉向上の施設となっている。

さらに、九階建の寿町総合労働福祉会館（寿町）は、ビル街のなかで、ことのほか目立つ建物だが、おもに港湾労働者の福祉、身体障害者の福祉、職業安定のために、その機能を発揮している。翁橋の通りには、寿町飲食店街があって、一つの区画に六〇



青少年の家と埋地地区連合町内会事務所（左）

ほどの店が見られる。

●長者町一〜四丁目——長者町一〜四丁目は、町域の中央の道路を中心とした街並みで、かつての八丁繩手の一部。事業所や商店が並び活況を見せている。一丁目には東京電力中営業所、神奈川日産と三浦信用金庫支店、横浜長者町郵便局など、二丁目から三丁目にかけては、一階が商店のげたばき住宅のビルが建ち並び、特に三丁目には自動車やモーターバイク関係の会社や営業所が多いのが特徴である。四丁目はも千秋橋のあった地点の大通り公園隣接地で、ここには電業会館があり、神奈川県電業協会が入っていて業界の中核部となっている。ここには、公衆浴場長者湯が表通りに面して営業しているが、こうした繁華街には最近では珍らしいことで、この地区でも唯一のものとなってしまっている。長者町の東側は南部地域につながる。

③南部地域

この地域は、長者町の裏通りといった感じで関外地区商店、会社の多い業務地区にもかかわらず、この一帯は山田町閉地をはじめマンションが多く、住宅地帯を形成している。閉地の夾竹桃などの植栽が鉄筋建物のかたわらに繁みとなって、わずかにこの地域の潤いとなっている。

●外埋地——山吹町は大通り公園沿いの町。ここには山吹公園、伊勢佐木警察署、中消防署がある。隣地は南区永楽町である。

富士見町には、一階を店舗にもつ一〇階建の住宅ビルがあり、

あたり一帯は住宅の高層化が著しい。なかには児童公園をもつ山田町閉地のように、山田町から当町域にまたがって建つものもある。

この町には神奈川県精神衛生センターがひっそりとおる。

山田町はいわば閉地の町である。山田町閉地の四階建と五階建の二棟、そして山田町第一、第二、第三共同ビルの三棟がある。共同ビルはいずれも県住宅供給公社の建てたもので、商店または企業会社が一階、二階以上が住宅である。第一および第二は四階建、第三共同ビルは五階建となっている。町は商業地区で、会社・商店が多く、さらに富士見中学校、五十六年一月吉浜町から移ってきた横浜掖済会病院、千歳公園など、さほど広くない町域にコンパクトにまとまっている。私営の富士見町日用品市場もあり、昭和四十九年六月には、九階建の高層住宅セブンスター・マンションが中学校の角地に出現した。

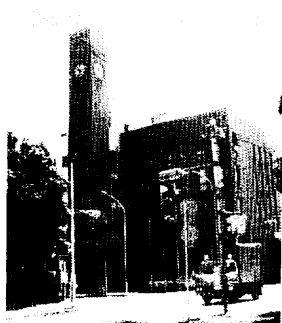
●観音さま——この地域にも、昔を感じさせ、今に残る浅草観音横浜分院慈音寺がある。この寺について地元の人には追憶がある。

一観音様は最初、伊勢佐木町の野沢屋さんにあつたんですが、商業上の発展を阻害するということで、二丁目の相撲常設館に移転しました。

その頃、父が堂守をしていたんですが、そこも追い立てられ、長島町の今の鍵屋さんのところにまた移転させられました。そこ



伊勢佐木警察署



中消防署

でもまた火事になって、山田町にきたんですが、こんどは大震災や空襲にありました。散々でしたね。

観音様の縁日は十八日と二十八日で、茶番劇の『にわか』なんかをやる舞台も出ていました。

境内には『おびんずる様』があって、四月は甘茶もやりました（埋地地区有志座談会）

この浅草観音分院は、明治四十一年の創立になり、大正期に浅草寺出張所と称し、横浜三十三番札所の内十一番で、聖観音を本尊としていたという。しかしいま、その縁日はなく、このあたりもひっそりとした街並みがつづくのみである。

●千歳町・三吉町——山田町につづくのは、千歳町、三吉町で、ともに中村川に沿った細長い町で、道一つ隔てて南区万世町に隣り合っている。この二つの町は、特に特徴はない街並みで、日用品の商店が東橋あたりから続いている。そして、ここにも自動車関係の販売会社、サービス工場や運輸関係の会社が集中し、倉庫会社の倉庫や木材置場などが広い面積を占めている。この町域にも十一階の高層マンションが建設されるなど、高層化の渦中にある。

●永楽町・真金町——山吹町、富士見町、山田町などと境を接する南区の永楽町や真金町は、この地域と密接な関連をもち、整然と区画されたなかにも、住・商混在の地で、旅館やバーが多い。大鷲神社前から中央に植込みのある、メイン通りの柳の葉音は印

象的である。西の市には多数の市民がこの町にあふれ、歳末を楽しむ。

神社のうしろは横浜橋通りの商店街で、一四二店が加盟する横浜橋通商店街協同組合（昭和三十六年十一月結成）が組織されていて、親しみのある商店街として活況を呈し、大通り公園をへだてて弥生町、曙町につながっている。

④西部地域

この地区は、長者町五ノ九丁目に、伊勢佐木町の三丁目から七丁目の通りを中心として、大岡川までの若葉町、末吉町、その反対側の大通り公園までの曙町、弥生町、それに長者町の五ノ九丁目の地区である。この横長の地区は、東西にかけて国道十六号が曙町町域を通り、南北の浜松町（西区）から阪東橋へ走る道路と交差し、同じ曙町で合流する交通の要所である。

南は、大通り公園を境に南区の永楽、真金、高根町に接し、末吉町は川にかけられた長者、旭、黄金、末吉、太田、栄の各橋によって野毛地区および南区白金町に接している。

●長者町五丁目——長者町は、細長く、地型的には開港前後の八丁細手と同じようである。大通り公園から長者橋に至る町域の中央には、主要地方道横浜・根岸線が走る。五、六丁目の商店街は、多種多様の店舗が並ぶ。この地区の建物も中高層化が着々と進んでいる。

五丁目には長者町電話局があり、この地区においては戦前の旧



大鷲神社前通り



浅草観音横浜分院（慈音寺）

状を残す唯一の建物となった。千歳観光ビル十一階がある六丁目は、静岡銀行横浜支店、横浜ビカデリー劇場がある。飛地のような七丁目は、伊勢佐木町一、二丁目と三丁目以降とのジョイント的な立地となっている。六丁目に長者町六丁目親交会（会員数四一店）が結成されている。

八丁目は、北側に福富東通と福富仲通に接し、横浜松竹劇場、東京相互銀行横浜支店、清正公堂は久保山に移転してしまっただが、名だけが残る清正公街飲食街があつて、バー、スナックが密集している。九丁目は長者橋の境で九丁目交差点、あたりには飲食店が並び、これも神奈川相互銀行本店などのビルが並ぶ。

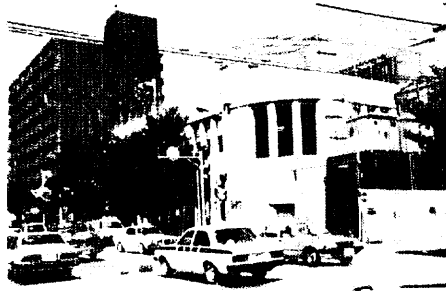
●伊勢佐木町三丁目の先——伊勢佐木町通りは、一、二丁目につづき、この三丁目から始まる。ここにはオデランビル（九階建）、横浜につかつ会館（六階建）、ユニー・イセザキ店（五階建）などの高層建物があり、この通りの中心的な地域である。

三・四丁目は、街路の樹木が生きづいてモールのがびつたりとしてきた。横浜東映、日活劇場があつて、賑町時代のかつての興行街とは及びもつかないが、横浜ビカデリー劇場のほか、イセザキシネマ（長者町六丁目）、横浜松竹劇場（同八丁目）さらに若葉町や末広町の映画館とチェーン的につながつて、一種の興行街をなしている。

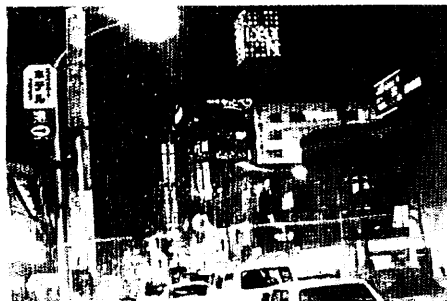
四・五丁目にもユニークな店頭が目立つ。五丁目の裏通りには公衆浴場利世館がある。残り少なくなった浴場には、昔ながらの市



清正公堂（昭和21年）—伊勢佐木町1、2丁目商和会提供



長者町電話局——このあたりで唯一の旧状（震災後建設）を残す建物



長者町の通り——中央のビルはオデランビル



清正公飲食街

民生活の一端がうかがわれる。六丁目には太陽神戸銀行横浜支店、ここには家具店が多い。

阪東橋交差点を渡ると七丁目だが、入口には富士銀行伊勢佐木町支店、富士見川公園わきには横浜銀行阪東橋支店がある。ここには、六階建のビルが唯一つ建設されているが、その他は依然として低層の店舗住宅である。

子育て地蔵尊が商店街の中央部に組み込まれるようになって、年間を通じて香華を漂わしているが、町なかでは珍らしい。毎月一日、六日が縁日で俗に一六地藏といわれ、縁日には露店で賑う。特に夏季などは納涼の場所ともなって市民に親しまれている。商店街のつきあたり南区境は富士見川公園で、街のなかの緑の植栽が潤いを与えてくれる。

伊勢佐木町通りの三丁目からも大型店が多く、全体的に落ち着いたムードがある。三丁目から七丁目までの商店によって協同組合伊勢佐木町商店街（二九四店加盟）が結成されている。一方、国道十六号線沿いの商店街はどちらかというと小型店舗が多い。交通量の頻繁さによって落ち着いたムードを保つのはむずかしい状況にある。

●若葉町——若葉町は、伊勢佐木町の裏通りで比較的飲食店が多く、全体的に建物の高層化が増加傾向にある。パブ喫茶、スナック、バーなど飲食店も多く、ボーリングやビリヤードの店も多い。一丁目には若葉町公園アパート、三丁目には神奈川県国人



曙町の通り



伊勢佐木町7丁目通り



子育て地蔵

商工会ビルなどがある。三丁目の伊勢佐木ジャパビルは、この地区での建物の高さを誇っている。ここには横浜日劇、横浜東映、名画座があり、隣接の末吉町三丁目の千代田劇場とともに、小さな興行地をなしている。

末吉町は、大岡川にかかる旭、黄金、末吉、太田の各橋のたもとに当たっている。川に沿って大手の材木問屋やカトリック末吉教会などが目立つが、裏通りには旅館やアパートが多い。最近、この川岸については、街路樹が植栽され、煉瓦舗道が作られるなど、環境の浄化が実施されている。昭和五十六年から三年次にわたって実施されている。こうした配慮は大岡川周辺の暗いイメージを変えようとするものであった。

末広町の一、二丁目旭橋わきには東京電力伊勢佐木町変電所、ここにも著名な材木問屋、潮菜店、聖トマ学園幼稚園、カトリック末吉町教会のほかアパート、旅館が多い。三丁目そばにレインポー・マンション(十一階建)四丁目の日本住宅公団末吉町四丁目アパート(二〇階建)が建設されたのをはじめ、伊勢佐木町の一、二丁目の後背地として高層住宅化が進んできた。しかし、四丁目にはこの高層建物とは対照的に、一般住宅が混在しており、公衆浴場末広湯などもあって、下町的な雰囲気ももち続けている。いわば全町商店街で、伊勢佐木町商店街の裏町という感じがある。

●曙町・弥生町―曙町の中央には国道十六号線が通っている。交通の要所である。一丁目にはときわ相互銀行、二丁目には横浜



若葉町の通り



高層化がすすむ大岡川川岸



伊勢佐木町裏通り



中郵便局あたり



ここも高層化がすすんでいる(曙・弥生町)

中郵便局などがある。五十五年秋に十一階建の藤和伊勢佐木町ハイツタウンが建設され、この辺り唯一の高層建物となったが、末吉町などの高層アパートと相對している。三丁目にはパーキングセンターが広い空間を拡げており、各丁目とも比較的に小型飲食店が多く、この地区発展の余地を残している。

四丁目、五丁目の間は、阪東橋交差点で、五丁目は道路と区別がつかなくなった駿河橋を境に南区吉野町に接している。

弥生町は、大通り公園に沿った細長い町域で、曙町の裏に当っている。大通り公園側には、一丁目から四丁目にわたり大手の材木商、倉庫、運輸会社などが多い。古くから新吉田川の水運を利用して営業していた名残りを残している。

一、二丁目は、曙町の横浜中郵便局の裏通りに当たっているが、

居酒屋、バーなどが集中している。四丁目、阪東橋わきには静岡相互銀行横浜中支店、横浜質屋会館がある。ここは地下鉄阪東橋駅の一方の出入口である。

いま、この地区の密集した商店街は、地域開発を検討しはじめ、商業振興のため、それぞれに創意が加えられつつある。

建物も、各地域ともに高層のビル化が進み、立体的にしかもカラフルに建物が彩られているが、そのほごまである空間地のほとんどは駐車場として利用されているが、それすらも立体化の傾向にある。

この地区は、伊勢佐木町を中心として発展してきたが、将来にわたって伊勢佐木町の変遷にともなって、今後の開発、発展が期待されるのである。